秋田県文化財調査報告書第102集

真壁地遺跡
蟻ノ台遺跡

発掘調査報告書

1983. 3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

序

国営能代開拓建設事業は，昭和51年度から開始され，以来諸般の事情で保存の不可能になった開拓予定地内にある埋蔵文化財の発掘調査を進めてまいりました。

本報告書は本年度の開拓事業，北能代工区の真壁地遺跡のほか，用排水路建設に係る小友工区の蟻ノ台遺跡の調査結果をまとめたものです。

真壁地遺跡は，縄文時代，弥生時代，平安時代にわたる遺跡で，このうち弥生時代の土器は能代地方においては数少ない出土品として注目されるものです。本書はもとより，これまでの調査成果は，能代地方の歴史解明の重要な手がかりになるものと思われます。

最後に，この発掘調査に御協力いただきました東北農政局能代開拓建設事業所，秋田県能代土地改良区，能代市教育委員会，峰浜村教育委員会，真壁地地区自治会はじめ関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和58年３月

秋田県教育委員会

教育長　畠　山　芳　郎

例　　言

1．本報告書は国営能代開拓建設事業に伴う真壁地遺跡及び蟻ノ台遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書作成については下記の方から御教示を得た。記して感謝申しあげる。

　国学院大学助教授　　小林達雄

3．石器の石質鑑定は秋田県立博物館学芸主事嵯峨二郎氏にお願いした。

4．本報告書の作成にあたり，執筆は下記の様に分担し，その他の部分及び編集は熊谷太郎が行った。

第4章第4節2の(1)　①，②	永瀬福男	秋田県埋蔵文化財センター　社会教育主事
第4章第4節2の(1)　③	大野憲司	秋田県埋蔵文化財センター　社会教育主事
第4章第1節1の(1)　(2)	桧森好広	
第4章第3節の1　第4章第5節の1	米川一郎	
第4章第2節の1，2　蟻ノ台遺跡	大高博康	

5．第2章第3節「真壁地遺跡付近の地形・地質」は，山本郡八森町立観海小学校教諭工藤英美氏の執筆である。

6．遺物の実測は安保徹，大信田学，三ヶ田達也，新田光晴，佐藤せい子，高階恵子，藤倉寿技，進藤妗子，長沢壙子，田中まき子，土器の拓本は米川一郎，竹村純子，草彌弘子，古屋学，茂木マイ子，遺構・遺物のトレースは大高博康，檜森好広，竹村昭雄が主に担当した。

7．土色の表記は財団法人日本色彩研究所　色票監修「新版　標準土色帖」によった。

8．本文と実測図に使用記載した略記号は下記の通りである。

ＳＩ……竪穴住居跡　　ＳＫＩ……竪穴状遺構　　ＳＫ……土壙　　ＳＤ……溝

ＳＮ……焼土遺構　　ＳＸ……風倒木痕　　ＳＲ……土器埋設遺構

ＲＰ……土器　　ＲＣ……　炭化物

目　　次

序

例言

（真壁地遺跡）

第１章　はじめに……1

第１節　発掘調査に至るまで……1

第２節　調査の組織と構成……1

第２章　遺跡の立地と環境……3

第１節　立地と環境……3

第２節　歴史的環境……3

第３節　真壁地遺跡付近の地形・地質……4

１．調査にあたって……4

２．地形概要……4

３．段丘群……4

４．地質……5

５．小結……8

第３章　発掘調査の概要……10

第１節　遺跡の概観……10

第２節　調査の方法……12

第３節　調査の経過……12

第４章　調査の記録……15

第１節　Ａ調査区……15

１．遺構と遺物……15

(1)　平安時代……15

①　住居跡……15

(2)　その他の時代……15

①　土壙……15

② 溝状遺構……15
③ 焼土遺構……15
2．出土遺物……15
(1) 弥生時代……20
① 土器……20
(2) 平安時代……22
② 土器……22
3．小結……23
第2節 B調査区……24
1．遺構と遺物……24
(1) 土壙……24
(2) 溝状遺構……24
2．風倒木痕及びその他の遺構……25
3．出土遺物……26
(1) 縄文時代……26
① 土器……26
第3節 C調査区……28
1．遺構と遺物……28
(1) 土壙……28
(2) 溝状遺構……28
2．小結……28
第4節 D調査区……31
1．遺構と遺物……31
(1) 縄文時代……31
① 竪穴状遺構……31
② 土壙……37
③ その他の遺構……55
(2) 平安時代……55
① 竪穴住居跡……55
② 土壙……56
(3) その他の時代……57
① 溝状遺構……57

2．出土遺物……58
(1) 縄文時代……58
① 土器……58
② 土偶　土製品……59
③ 石器……68
(2) 平安時代……76
① 土師器　須恵器……76
3．小結……77
第5節　E調査区……79
1．遺構と遺物……79
(1) 平安時代……79
① 竪穴住居跡……79
(2) その他の時代……80
① 土壙……80
2．出土遺物……81
(1) 弥生時代……81
① 土器……81
(2) 平安時代……81
① 土師器　須恵器……81
第5章　まとめ……96

（蟻ノ台遺跡）

第1章　はじめに……123
第1節　発掘調査に至るまで……123
第2節　調査の組織と構成……123
第2章　遺跡の立地と環境……123
第3章　発掘調査の概要……123
第1節　遺跡の概観……123
第2節　調査の方法……124
第3節　調査の経過……124
第4章　調査の記録……124
第1節　遺構と遺物……124

(1)　溝状遺構……124
(2)　土器埋設遺構……124
(3)　炭焼窯状遺構……125
第２節　出土遺物……125
第５章　まとめ……125

挿　図　目　次

（真壁地遺跡）

第１図　遺跡周辺地形図・遺跡位置図……２
第２図　①　米代川下流域の段丘分布図　②　調査地点東側壁…６
第３図　③　大きさによる分類　④　円磨度による分類
⑤　礫種による分類　⑥　火山ガラス出現数
⑦　秋田市寺内層中に発見された海綿ウニの骨針……９
第４図　真壁地遺跡地形・グリッド配置・調査区位置図……10
第５図　真壁地遺跡Ａ調査区・Ｂ調査区の地層断面図……11
第６図　真壁地遺跡Ｃ調査区・Ｄ調査区・Ｅ調査区の地層断面図…13
第７図　真壁地遺跡Ａ調査区遺構分布図……14・15
第８図　ＳＩ01実測図……16
第９図　ＳＫ01～ＳＫ04・ＳＫ07実測図……17
第10図　ＳＫ05・ＳＫ06実測図……18
第11図　ＳＤ01～ＳＤ04実測図……19
第12図　ＳＮ01焼土遺構実測図……20
第13図　Ａ調査区遺構外出土遺物(弥生土器)……21
第14図　Ａ調査区出土遺物(土師器・須恵器)……22
第15図　Ｂ調査区遺構分布図……24
第16図　ＳＫ01実測図……25
第17図　ＳＤ01・ＳＸ01・02・03・05・06実測図……25
第18図　Ｂ調査区遺構外出土遺物(縄文時代)……26
第19図　真壁地遺跡Ｃ調査区遺構分布図……27
第20図　ＳＫ01実測図……28
第21図　ＳＤ01実測図……28
第22図　真壁地遺跡Ｄ調査区遺構分布図……29

第23図　ＳＫＩ01・ＳＫ02実測図……32
第24図　ＳＫＩ03実測図……33
第25図　ＳＫＩ04・05実測図……34
第26図　ＳＫＩ06・ＳＤ02・03実測図……35
第27図　ＳＫＩ07・08実測図……36
第28図　ＳＫ01～04実測図……38
第29図　ＳＫ05～08実測図……39
第30図　ＳＫ09～14実測図……40
第31図　ＳＫ15～20実測図……42
第32図　ＳＫ21～26実測図……43
第33図　ＳＫ27～31実測図……44
第34図　ＳＫ32～37実測図……46
第35図　ＳＫ38～42実測図……47
第36図　ＳＫ43～46実測図……49
第37図　ＳＫ47～51実測図……50
第38図　ＳＫ52～55実測図……51
第39図　ＳＫ56～59実測図……52
第40図　ＳＫ60～65実測図……53
第41図　ＳＫ66～67実測図……54
第42図　ＳＸ01実測図……55
第43図　ＳＩ01・ＳＫ40実測図……56
第44図　ＳＩ02実測図……57
第45図　ＳＤ01・04実測図……57
第46図　文様の施文順序……59
第47図　鐸形土製品の各部位の名称と計測位置……60
第48図　鐸形土製品の分類(模式図)……60
第49図　Ｄ調査区出土遺物(縄文土器１)……62
第50図　Ｄ調査区出土遺物(縄文土器２)……63
第51図　Ｄ調査区出土遺物(縄文土器３)……64
第52図　Ｄ調査区出土遺物(縄文土器４)……65
第53図　Ｄ調査区出土遺物(縄文時代－土偶・土板・鐸形土製品)…66
第54図　D調査区出土遺物(縄文時代－鐸形土製品・三脚土製品・有孔

土製品・板状多孔土製品・円盤状土製品・ミニチュア土器……67
第55図　石器出土分布図……70
第56図　D調査区出土遺物(石器1)……71
第57図　D調査区出土遺物(石器2)……72
第58図　D調査区出土遺物(石器3)……73
第59図　D調査区出土遺物(石器4)……74
第60図　D調査区出土遺物(石器5)……75
第61図　D調査区出土遺物(土師器，須恵器)……76
第62図　E調査区遺構分布図……78
第63図　SI01実測図……79
第64図　SK01～03実測図……80
第65図　E調査区出土遺物(土師器，須恵器)……81

(蟻ノ台遺跡)
第1図　蟻ノ台遺跡地形，調査区位置図……122
第2図　蟻ノ台遺跡の地層……123
第3図　蟻ノ台遺跡遺構分布図……124
第4図　SD01実測図……124
第5図　SR01実測図……125
第6図　SX01実測図……125

表　目　次

(真壁地遺跡)
第1表　鐸形土製品観察表……61
第2表　出土石器組成及び遺構内出土石器表……69

図　版　目　次

(真壁地遺跡)
図版1　遺跡遠景
図版2　A調査区全景　　SI01住居跡

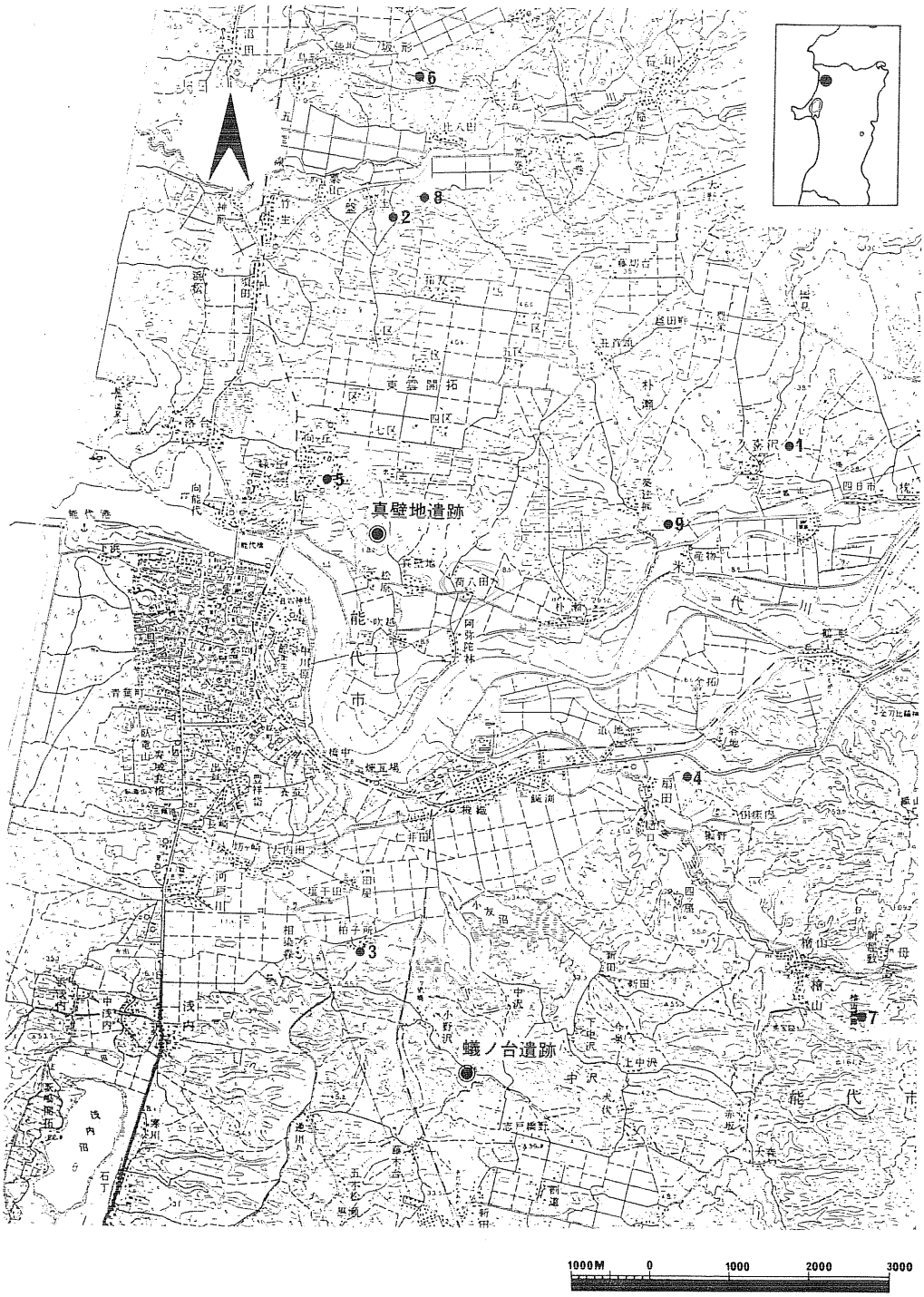
図版３　ＳＫ05・06土壙　ＳＫ06土壙
図版４　ＳＫ01土壙　ＳＫ02土壙　ＳＤ01溝状遺構
図版５　Ａ調査区遺構外出土遺物(弥生土器)
図版６　Ｂ調査区全景　ＳＸ06風倒木痕
図版７　Ｃ調査区全景　ＳＫ01土壙
図版８　Ｄ調査区発掘前　調査風景
図版９　Ｄ調査区全景
図版10　Ｄ調査区土壙群
図版11　ＳＫＩ01竪穴状遺構
図版12　ＳＫＩ03竪穴状遺構
図版13　ＳＫＩ04竪穴状遺構　ＳＫＩ04土器出土状況
図版14　ＳＫＩ02竪穴状遺構　ＳＫＩ02石器出土状況　ＳＫＩ05竪穴状遺構
図版15　ＳＫＩ06竪穴状遺構　ＳＫＩ06土器出土状況　ＳＫＩ08竪穴状遺構
図版16　ＳＫ01・02・05土壙　ＳＫ01土器出土状況　ＳＫ03土壙
図版17　ＳＫ04・ＳＫ05・ＳＫ07土壙
図版18　ＳＫ09・ＳＫ11・ＳＫ10・ＳＫ12土壙
図版19　ＳＫ14土壙　ＳＫ14土器出土状況　ＳＫ15・ＳＫ16土壙
図版20　ＳＫ17・ＳＫ45・ＳＫ21・ＳＫ25・ＳＫ26土壙
図版21　ＳＫ27・ＳＫ28・ＳＫ30・ＳＫ32土壙
図版22　ＳＫ33・ＳＫ37土壙　ＳＫ37土器出土状況
図版23　ＳＫ40・ＳＫ43・ＳＫ44土壙
図版24　ＳＫ45・ＳＫ47・ＳＫ48土壙
図版25　ＳＫ48・ＳＫ49・ＳＫ51・ＳＫ52土壙
図版26　ＳＫ63・ＳＫ64・ＳＫ66土壙
図版27　ＳＤ02・ＳＤ03溝状遺構
図版28　ＳＩ01竪穴住居跡
図版29　ＳＩ02竪穴住居跡
図版30　鐸形土製品　土器出土状況
図版31　石斧，石皿，石棒出土状況
図版32　Ｄ調査区出土遺物(縄文時代)
図版33　Ｄ調査区出土遺物(土偶，鐸形土器品)
図版34　Ｄ調査区出土遺物(鐸形土器品　三脚土製品　有孔土製品

板状多孔土製品　円盤状土器品　ミニチュア土器
図版35　Ｂ調査区出土遺物(縄文土器)　Ｄ．Ｅ調査区出土遺物(土師器)
須恵器
図版36　Ｅ調査区全景　ＳＩ01竪穴住居跡

（蟻ノ台遺跡）

図版１　発掘調査前　調査区全景
図版２　ＳＸ01炭焼窯状遺構　ＳＲ01土器埋設遺構

真　壁　地　遺　跡



第１図　遺跡周辺地形図・遺跡位置図

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

昭和51年度以来東北農政局により行われている国営能代開拓建設事業は，米代川右岸及び左岸を対象に，山林，畑地を開発する事業である。このため工事該当地域内に所在する遺跡は工法で破壊をまぬがれる場合を除き事前に緊急発掘調査が実施されてきた。昭和53年から54年にかけて行われた遺跡分布調査によると，事業区内に73ヶ所の遺跡が所在する事が判明しており，蟻ノ台遺跡はこの際に発見されたものである。真壁地遺跡は昭和56年度の範囲確認調査により，約60000㎡の広さを持つ遺跡と確認された。

本年度は真壁地遺跡が開発工事により約6000㎡，蟻ノ台遺跡が関連事業として導水管工事のため約600㎡それぞれ破壊されるため，記録保存を目的に発掘調査を実施する事になったものである。

第２節　調査の組織と構成

真壁地遺跡

遺跡所在地	能代市真壁地字野畑50他
調査期間	昭和58年９月６日～12月４日
調査対象面積	6,000㎡
調査面積	5,180㎡

蟻ノ台遺跡

遺跡所在地	秋田県能代市中沢字蟻ノ台４他
調査期間	昭和58年９月１日～９月14日
調査対象面積	600㎡
調査面積	465㎡

調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	熊谷太郎　秋田県埋蔵文化財センター　社会教育主事
調査補佐員	大高博康　米川一郎　桧森好広
調査作業員	工藤鉄夫　菊地浩晃　大高甚之助　工藤清一　成田芳道　佐藤敬作　鈴木喜代治　大高吉夫　工藤利一　大高豊影　秋元正人　佐藤清八郎　工藤甚七　工藤兵八郎　工藤孝記　工藤竜市　佐藤長一郎　小林萬助　小林和一

成田幸一郎　大高勝蔵　大高甚七　松島琢磨　清水力蔵　桜井清　桜井惣十郎　清水芳八郎　清水六郎　清水堅五郎　清水政雄　加藤清三郎　清水孫幸　渡辺吉治　渡辺広　渡辺勲　落合三之助　小野金義　渡辺エイ　渡辺富子　渡辺美津　渡辺ハルエ　小沼ツヤ　小沼セツ　小沼房　小沼淑子　小沼ヒデ子　小野マサエ　三浦烈子　大高栄子　大高ミヨ　大谷れい子　工藤テツ　工藤ハナ　小林三重子　村岡キクエ　伊藤イマ子　浅野好子　藤田トキ子　成田セツ　清水カチ子　小林信子　大高信子　清水容子　小林都　佐藤チセ　赤塚節子　塚本則子　佐々木キヨ子　工藤優子　工藤文子　工藤イワ子　大高栄子　大高ハナ　大高チエ　大高久子　大高ミナ子　大高祐子　小林マサ子　大高多智子　大高誠子　清水ミエ　桜井ヨシ　原田セキ　清水リツ　桜井コト　清水マサヨ　清水八重子　清水キサ　清水シゲ　清水邦子　桜井ツサ

整理作業員　鈴木光子　竹嶋厚子　納谷鈴子　木藤哲子　高橋チエ子　室谷孝子　小松睦子　岡本龍子　松本幸子　土屋ひさ子　山田美喜子　阿部義行　高橋一則　熊谷恵子　大野甲子　三ヶ田達也　大信田学　進藤妗子　藤倉寿枝　長澤廣子　田中まき子　茂木マイ子　竹村純子　草彌弘子　大西英子　佐々木アイ子　後藤正子　新田律子　越後谷晴美　茂木イサ　茂木祐子　黒沢ゆり子　越後谷洋子　小松郁子　風登絹子　森川照子　大河貞子　渡辺節子　佐々木京子　高柳良子　菅原恵子　小林弘　大河洋子　長渕厚子　斉藤恭子　池田マサ子　高柳三枝子　原輝子　佐々木フクエ　新田光晴　高階恵子　佐藤せい子　武田美智子

調査協力機関　東北農政局能代開拓建設事業所
秋田県能代地区土地改良区
能代市教育委員会
峰浜村教育委員会
真壁地地区自治会

第2章　遺跡の立地と環境

第１節　立地と環境

真壁地遺跡は秋田県の北部を流れる米代川の北岸に位置し，その位置は東経140度３分―140度４分，西経40度２分―40度３分である。遺跡の背後は北能代一帯に広がる東雲台地で，標高30～40ｍの低位な段丘が続く。南には，はるか岩手との県境に源を発する米代川が蛇行して流れ対岸に沖積平野を形成，やがて日本海にそそぐ。遺跡はこの海と川を望む東雲台地の南縁部に位置し，米代川までの距離は0.8㎞，日本海までは約4.5㎞である。

蟻ノ台遺跡は米代川の南岸に迫まる出羽山地西端，丘陵内陸に約２㎞入った山間部に位置し，周囲は山林及び田地となっている。

両遺跡は米代川をはさんでそれぞれ右岸，左岸に位置しており，遺跡間の直線距離は約７㎞である。

第２節　歴史的環境

米代川の両岸に広く発達する台地には数多くの遺跡が存在する。遺跡は特に台地縁辺部に集中しており，生活，立地面から河川に望む比較的平坦な台地上を選択した事がうかがえる。

真壁地遺跡が所在する米代川右岸では，昭和51年発掘調査の行われた館下Ｉ遺跡（第１図の１）から杉久保型ナイフ形石器が出土しており，この地域では既に旧石器時代から人々が生活を営んでいた事がうかがえる。

縄文時代になると遺跡数は増加する。昭和56年度調査の杉沢台遺跡（第１図の２）では前期円筒下層Ｂ，Ｃ式土器を出土する遺構が約170確認された。中でも大型住居跡は長軸推定31ｍ面積222㎡と全国でも現在の所例を見ない大きさである。中期については上記館下Ｉ遺跡で，円筒上層Ｂ～Ｄ式土器を出土する住居跡が20棟検出され，合わせて中期末から後期初頭に至る住居跡も14棟みられた。晩期は昭和30年調査が行われた柏子所貝塚が（第１図の３）注目される。検出された８基の土壙にはいずれも人骨が認められ，頭部には赤色顔料が塗られていた。

弥生時代の遺跡としては，現在の所明確な確認はなされていなかったが，今回行われた真壁地遺跡Ａ調査区で比較的多くの弥生土器が出土した。

平安時代になると遺跡数は増加する。サシトリ台遺跡（第１図の８）古館Ⅱ遺跡（第１図の９）等があり土師器，須恵器を出土する。又昭和46年に開始された大館遺跡（第１図の４）発掘調査は，「日本三代実録」元慶二年四月二十八日条に書かれてある「溢口能代営」擬定地として行われ，空濠，柵列跡，土塁，竪穴住居跡等が検出された。「営」跡の結論は得られなかったが，昭和55年３月２日付けで「檜山安東氏城館跡」の一部として国指定史跡となっている。

中世に入ると資料が乏しく郡名さえ明らかでないが，昭和50年に調査された中田面遺跡は，室町期を中心とした集落遺跡と考えられ，珠洲系土器や中国陶磁が出土している。又桧山城は能代山本地方に勢力を誇った桧山安東氏の居城として築かれ，周辺の地域は長く近世に至るまでその支配下におかれた。各所にみられる小規模な館跡は，この支配下の地侍層が主体となって構築したものが多い。

第３節　真壁地遺跡付近の地形，地質

１．調査にあたって

これは真壁地遺跡（Ａ区～Ｅ区）を中心に東西方向11km，南北方向12kmにわたる方形の地域を調査したものであり，段丘区分は白石，工藤ら（1977）の分類にもとづいた。

また，能代山本地域に分布する段丘群には火山灰層が存在するか，ということが近年話題になっているが，当遺跡下に火山灰層が含まれているかどうかについても検討を加えた。

２．地形概要

当調査地域は米代川下流に広がる広大な能代平野のほぼ中央に位置し，その大部分は沖積平野と数段の段丘から構成されている。西方の海岸近くには能代砂丘が分布し，東方には新第三紀層からなる山地、丘陵が連なる。

３．段丘群

当地域にみられる段丘群は米代川第９段丘，第７段丘，第６段丘，第５段丘，第４段丘，第３段丘の６段丘であり，他の段丘は調査地域からはずれている。

米代川第３段丘は高位段丘の１つであり，当地域では米代川左岸の山麓に断続的に分布するもので，段丘面の高度は100ｍほどである。構成層は砂，礫を主とし，上部に２ｍほどの粘土層をたい積させる。なお，当段丘は東方においては大台野を形成している。また，丑首頭付近に同段丘が棒状に分布するが，高度50ｍほどで砂，礫よりなる。これは，同段丘の残丘ではないかと考えられているものの，成因等も含めてまだ明らかにされていない。

米代川第４段丘は，第５段丘とともに中位段丘にあたり，中川（1961）による段丘区分のⅢにあたる。第４段丘は40～45ｍの面高度を持ち，調査地域の南と北に分布する。段丘面はなだらかに起伏しており，構成層は砂および砂礫からなる。上部の砂層は若美町，潟西地域における本内砂部層に，下部の砂礫層は松木沢砂礫部層に対比される。なお，この段丘は最終間氷期のたい積物と考えられている。

米代川第５段丘は，米代川の両岸に分布し，面高度は40ｍである。構成層は河川性の砂礫よりなり，10数ｍとかなり厚い。これは第４段丘の構成層が海浜性のよく円磨された礫を含む砂

礫からなり，層厚も数ｍ未満と薄いこととは対照的である。米代川第６段丘は，第７段丘，第８段丘とともに低位段丘にあたり，これらはいずれも現河川沿いに分布する特徴を持つ。第６段丘は面高度25～30ｍを保ち，段丘面の保存状態は良好である。構成層は多量の花崗岩礫を含む厚い礫層からなり，最上部には２ｍ前後の細砂層および粘土層をのせる。当遺跡はこの段丘面上にある。

米代川第７段丘は第６段丘よりわずかに低い面高度を持ち，小河川が米代川に流入する近くに分布する。段丘面の状態や構成層とも第６段丘とほぼ同じ特徴をしめす。

米代川第９段丘は完新世段丘（沖積段丘）ともよばれ，完新世に形成されたものである。この段丘は米代川沿いに分布し，面高度は８～10ｍである。構成層は砂，礫よりなるが上部に細粒の浮石が広く分布していることが多数の試錐結果から判明した。このことから，米代川上流の鷹巣盆地の洪水シラスのたい積面（平山，市川1966）に対比されている。

４．地質

当遺跡直下の地質については露頭にめぐまれず直接観察できなかったが，同時代に形成された段丘構成層を付近の露頭で観察するかぎりでは次のように想定される。新第三紀層の上に不整合で20ｍ以上にもおよぶ砂礫層が重なり，さらに上位には整合に細砂，粘土よりなる地層が重なっているのであろう。上位の細砂，粘土層については当遺跡Ａ区およびＥ区に壕を掘り(試壕と仮称）詳細に調査した。また，砂礫層の最上部からは礫を採取した。

(1)　砂礫層中の礫について

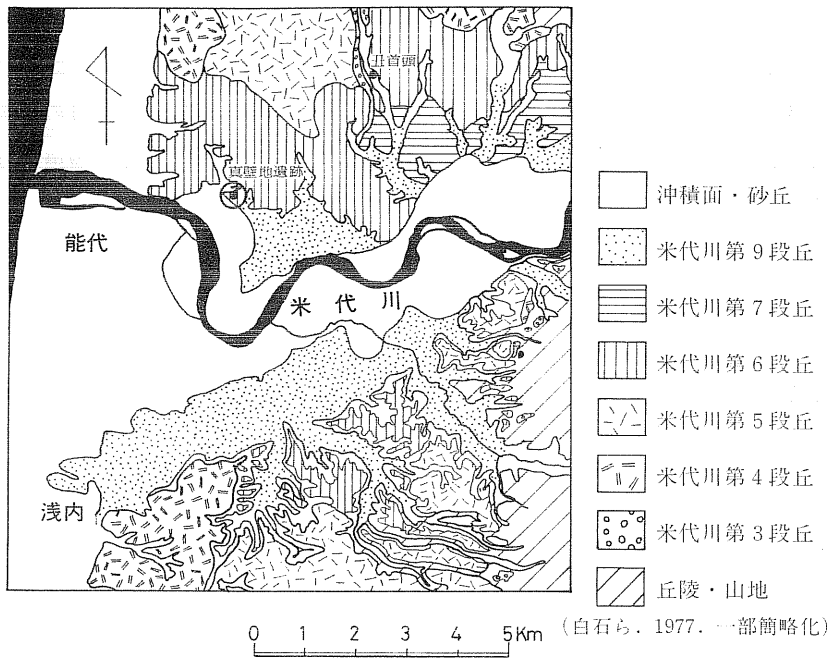
試壕の底部には多数の礫が出現し，216 個の礫を任意に採取した。礫の分析にあたっては昭和56年に行った杉沢台遺跡の直下から出現した礫の分析方法と同じであるので詳細について省略した。

大きさ：礫の大きさは長径を測定し，水野（1969）の分類表を用いて分類した（図③)。この図からわかる通り，礫の９割が中礫（４mm～64mm）でしめられ，杉沢台の礫とほぼ同じ傾向を示す。

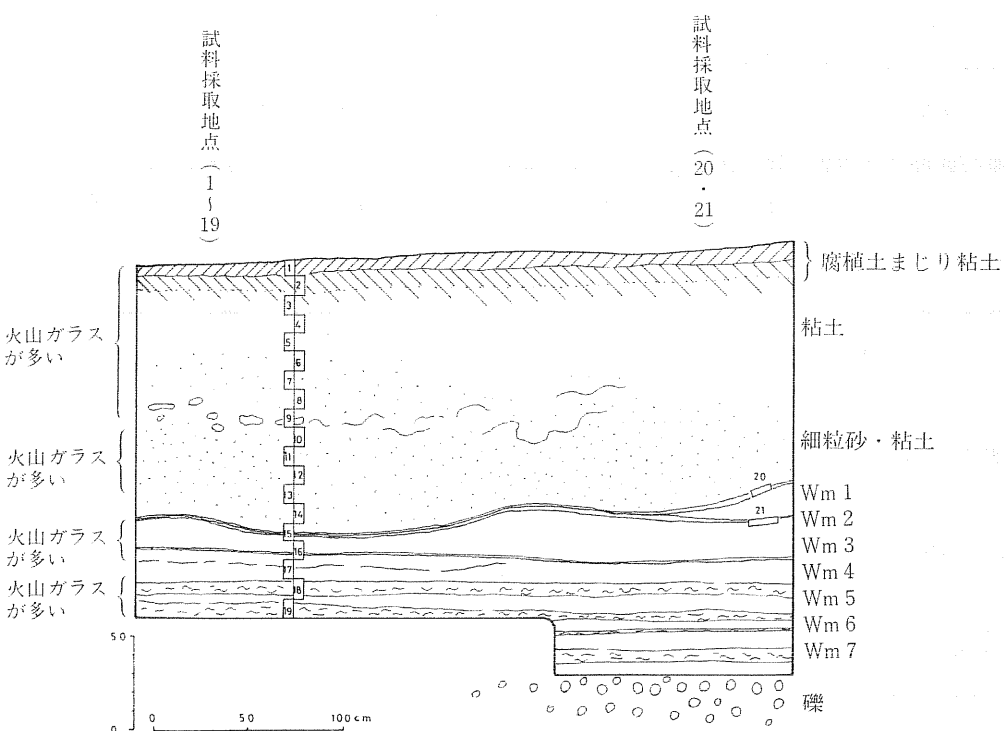
円磨度：礫を１つずつ円磨度モデル図に照合してそれぞれの円磨度を求め，これらをもとに４区分にまとめた。図④は各区分別の頻度を表わしたものである。杉沢台の場合と比較すると亜角礫が大幅に増加しているのが特徴的である。

礫種：礫種の分類にあたっては礫を岩石カッターで切断し，その断面をルーペで観察し分類した（図⑤）杉沢台の礫種と比較すると変質安山岩類が減少し，流紋岩類が増加し，硬質泥岩類もやや増加する。また，花崗岩類がほぼ同じ比率をしめすのは興味深い。なお，角礫が含まれているが，大部分は凝灰岩であった。

(2)　粘土層について



①米代川下流の段丘分布図



②調査地点東側壁

第2図　① 米代川下流域の段丘分布図　② 調査地点東側壁

この地層に火山灰層が含まれているか否か調査するために，まず，試壕の東側壁を上から順に肉眼観察をおこなった。地上から20cmまでは腐植土および腐植土まじりの粘土，続いて60cmまでは褐色粘土，90cmまでは細粒砂がわずかに混じる粘土，140cmまでは粘土質の細粒砂でありこれらの境は判然としない。

150cmから230cmまでには細粒砂と粘土が混合した層中に黄白色粘土層（Ｗｍ１～Ｗｍ７）が７枚挟まれる。薄い層で約１cm，厚い層で約10cmである。なお，右下には多数の砂管が観察された。西側壁はほぼ東側壁と同じであるが，90cmの位置に厚さ１cmの黄白色粘土層が約１ｍの長さで挟まれており，その両端は消えていた。

試料採取

Ｅ調査区北端部付近，地山上面より80cmの深さの地点で，壁面に直方体（10cm×５cm×５cm）の子穴を掘りながら試料を採取した。採取にあたっては，よくふいた移植ベラを用い試料番号順に上から採取した（試料１～19）。また，試料20～22までは黄白色粘土のみを取り出すようこころみたが，ある程度，当層の上下にある粘土の混入はさけられなかった。

試料処理

試料
↓
水洗　　ポリ容器に試料を入れ，水を加えながら手で洗い，泥質物を洗い流す。
↓　　残渣を蒸発皿に移す。
乾燥　　電気恒温器（90度Ｃ）で５～８時間。
↓
篩い分け　　120メッシュと250メッシュを通す。
↓
塩酸処理　　希塩酸に約12時間浸す。
↓
水洗　　10回おこなう
↓
乾燥　　電気恒温器（90度Ｃ）で約１時間。
↓
封入　　スライドグラスにカナダバルサムで封入する。
↓
試料薄片

薄片の検鏡

偏光顕微鏡を用いて薄片（24mm×24mm）中の全鉱物を観察し，その中から火山ガラスを数えた。また，各薄片中の鉱物粒子数は８千から１万５千と数がばらついたので，図⑥の数は定性的意味しか持たないことをあらかじめことわっておく。

火山ガラスはほとんど全試料に含まれ，その形状は破片状のものが多く，中には気泡に富むものもみられた。また，地表下1.5mより下位では火山ガラスの角がすり減ったものや，やや脱したものが目立った。黄白色粘土（ｗｍ１～wm７）と，火山ガラス出現数とには強い相関々係は認められない。火山ガラスの出現数が比較的多い部分は４ヶ所あり，上から順に地表から70cmまでの部分（西側壁では90cmのところに１本ある）。130cmから140cmまでの部分，160cmの部分，190cmの部分である。

なお，ほぼ全資料にわたって，海綿骨針ともウニの骨針ともいわれる化石が含まれていたことを報告しておく。

小結

以上のことから，当遺跡の直下においては，地表から１ｍ以内に降下火山灰があったことが推定できる。また，礫層直上の黄白色粘土については，さらに試料分析してみる必要があろう。

参考文献

白井哲之（1961）　能代付近の段丘地形，地理学評論，第34巻，487―497

中川久夫（1961）　本邦太平洋沿岸地方における海水準静的変化と第四紀編年，東北大学理学部地質学古生物学教室報告，第54号，１―61

平山次郎・市川賢一（1966）　1000年前のシラス洪水―発掘された十和田湖伝説，地質ニュース，No.140，10―28

内藤博夫（1977）　秋田県能代平野の段丘地形，第四紀研究，第16巻，２号，57―70

白石建雄・工藤英美・秋田第四紀研究グループ（1977）　秋田県北部日本海沿岸地帯の段丘群，秋田大学教育学部研究紀要（自然科学），第27集，86―96

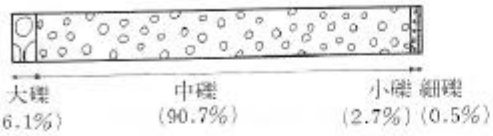
秋田第四紀研究グループ米代班（1977）　秋田県能代平野から藤里地域にかけての段丘群について，秋田地学，No.27，１―９

秋田県教育委員会（1979）　秋田県文化財調査報告書第62集，館下Ｉ遺跡発掘調査報告書。

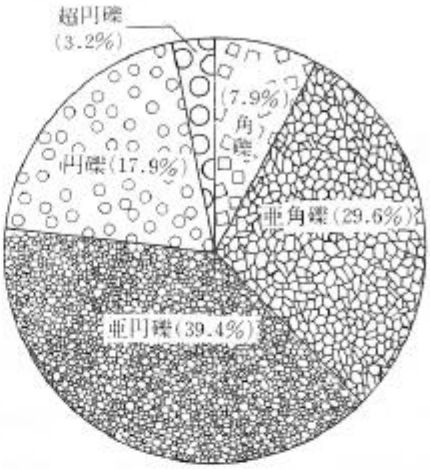
高橋文夫（1980）　東雲地区の地質教材の資料作成と活用，研修集録，第11集，秋田県教育センター。

秋田県教育委員会（1981）　秋田県文化財調査報告書第83集，杉沢台遺跡，竹生遺跡発掘調査報告書。

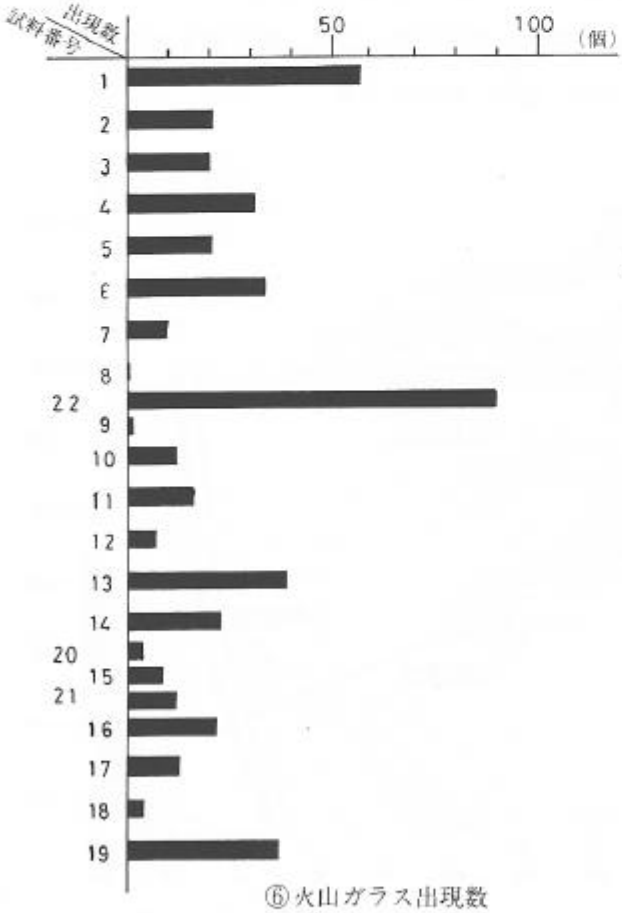
潟西層団体研究グループ（投稿中）　男鹿半島北東部潟西地域における潟西層。



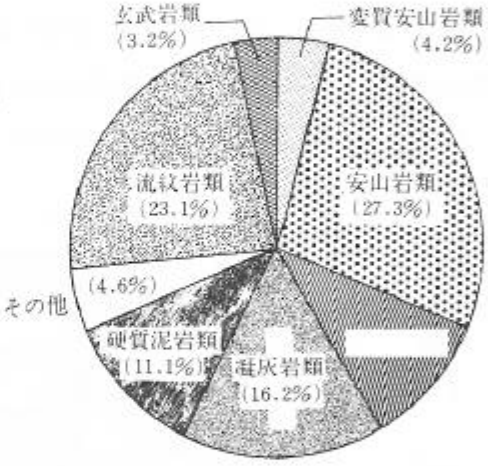
③大きさによる分類



④円磨度による分類



⑥火山ガラス出現数



⑤礫種による分類

⑦秋田市寺内層中に発見された海綿ウニの骨針

第３図　③ 大きさによる分類　④ 円磨度による分類
⑤ 礫種による分類　⑥ 火山ガラス出現数
⑦ 秋田市寺内層中に発見された海綿ウニの骨針

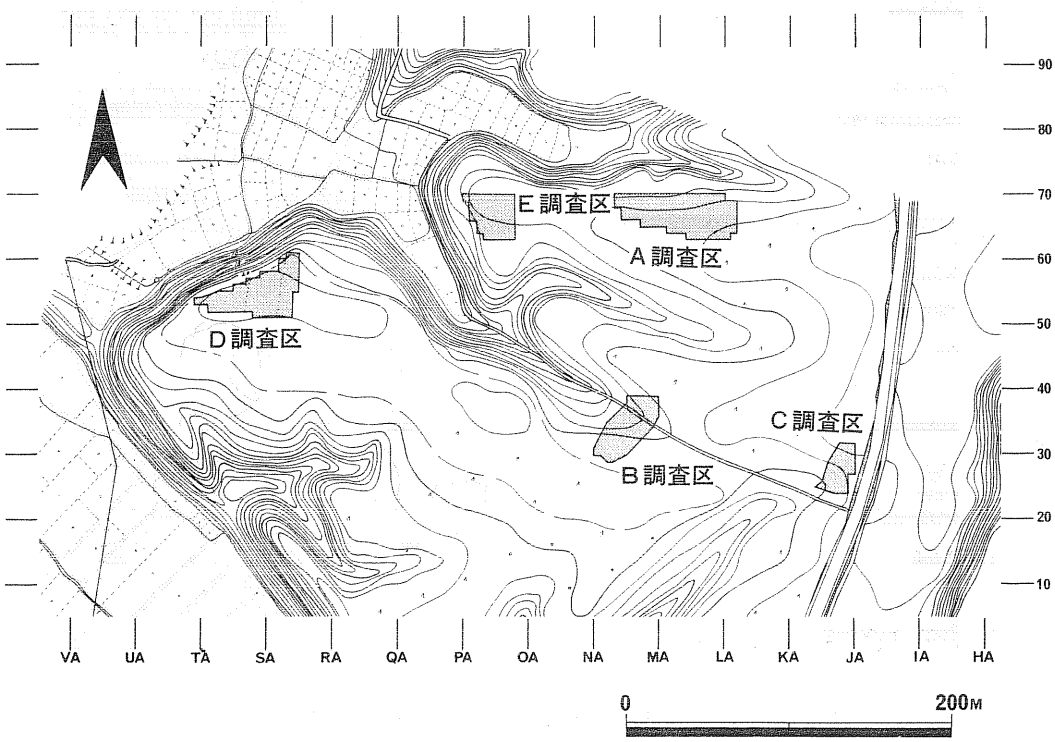
第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

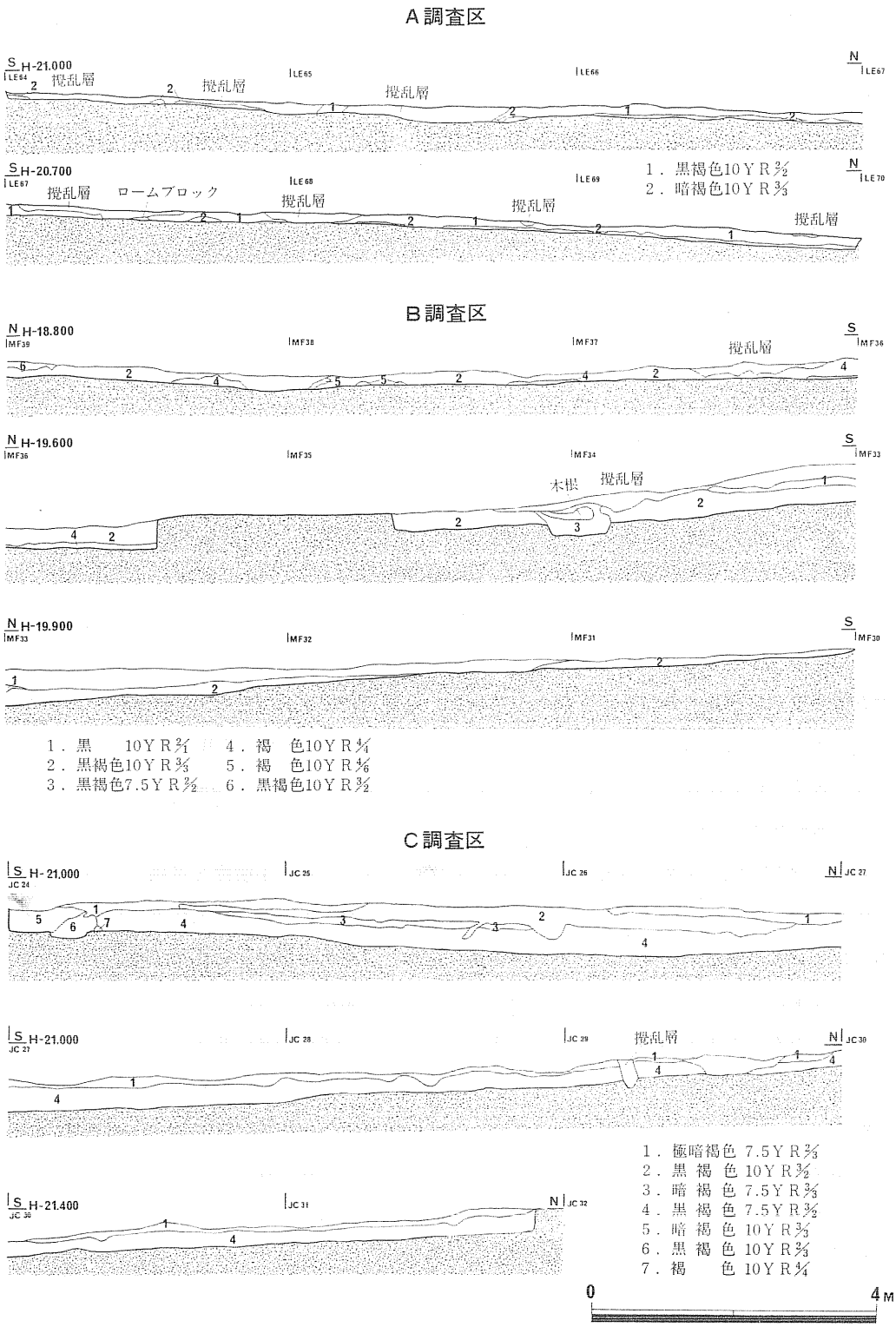
昭和55年10月に範囲確認調査が行われ，遺跡の総面積は約60,000㎡と判明した。

遺跡は東雲台地の南縁部，米代川に向かい舌状に張り出した台地上に位置する。標高は18～20ｍで沖積地との比高差は約12ｍ。遺跡の南方には沖積平野がひらけ，西方は深く入りくんだ小谷により分断されている。付近には湧水があり近年まで飲料水として用いられていた。遺跡周辺の現況は山林で，一部は過去に畑地として耕作されていたが今は松や杉が一面に生い茂る。調査区は二つの並列する舌状台地先端部から中央部にかけてのＡ調査区～Ｅ調査区，５地点である。

遺跡の基本土層は１層が黒褐色土，２層が暗褐色土で，深さはＣ調査区を除き20～30cmである。Ｃ調査区は凹地である事から一部では50cmと厚いが基本層序は変らない。表土層下は褐色のローム土で約10～12cm続き，その下はローム土＋砂層，砂層，礫層となる。



第４図　真壁地遺跡地形・グリッド配置・調査区位置図



第５図　真壁地遺跡Ａ調査区・Ｂ調査区・Ｃ調査区の地層断面図

第２節　調査の方法

グリッド方式を用い調査した。

グリッドは範囲確認調査時の遺跡範囲約60,000㎡を40ｍ×40ｍの大グリッドで分割し，加えて各調査区部分には４ｍ×４ｍの小グリッドを設定した。グリッドはいずれも南北方向に算用数字，東西方向にアルファベットを順列させ，東南隅部の合致記号をそのグリッド名称とした。名称は大グリッドの場合東西方向がＨＡ，ＩＡ，ＪＡ……，南北方向は10，20，30となる。小グリッドは大グリッドを10×10に分割し設定することから，東西方向はＨＡ，ＨＢ……ＨＪ，南北方向は１，２，３……10となる。

第３節　調査の経過

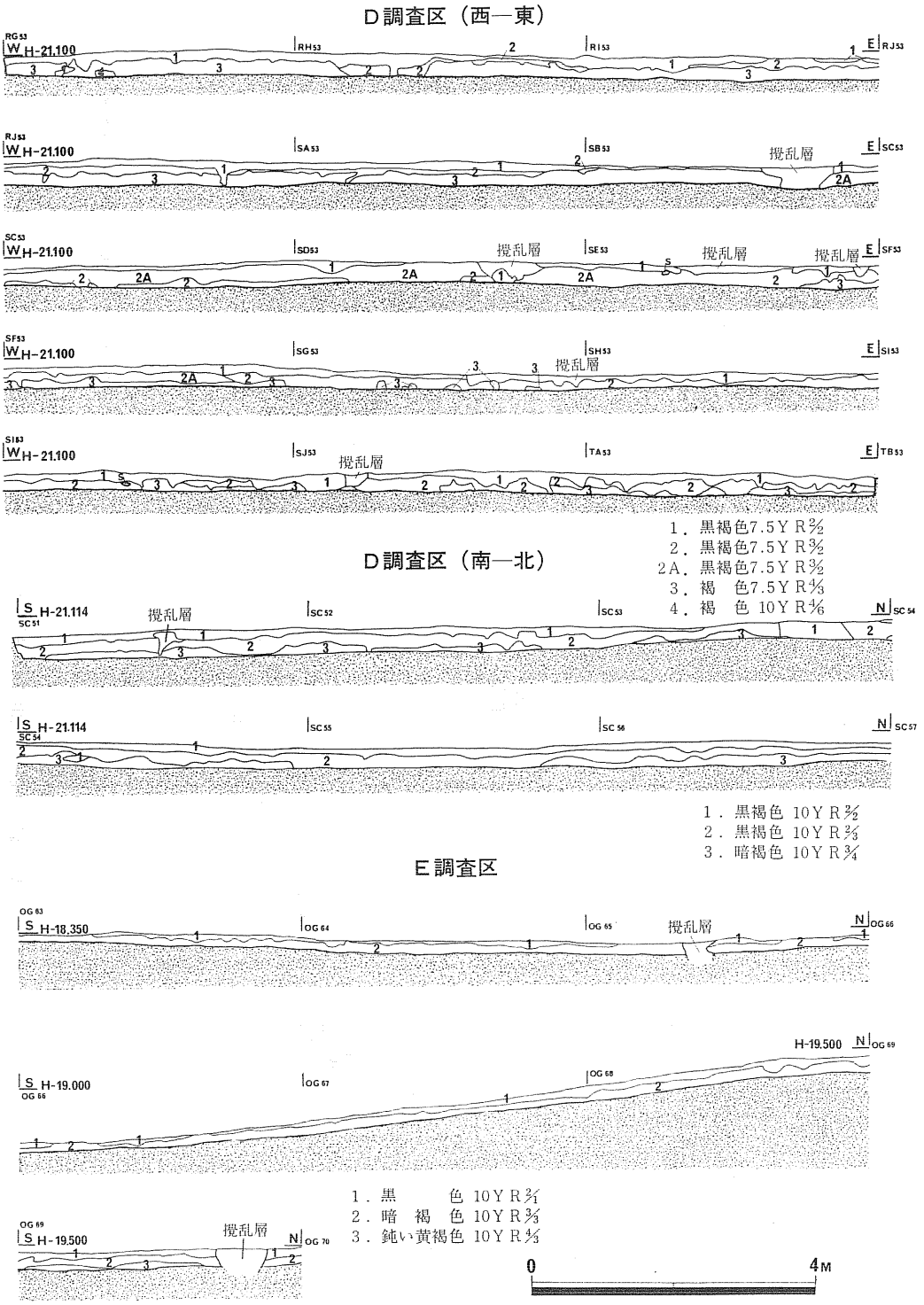
調査期間は昭和58年９月６日～12月４日である。調査区域は五ヶ所に分散しており，農政局との打合わせにより調査可能なＡ調査区から開始した。

９月４日，Ａ区調査開始。現場プレハブにて作業員と打ち合わせ。調査の目的，方法，遺構遺物の調査事例等をスライドで説明した後，勤務時間等諸連絡を行う。午後粗掘開始。５日，調査区西側及び東側の両端部から調査を進める。14日，Ａ区と並行しＢ区も調査開始，作業員を２分する。17日，Ａ区。ＳＫ01，02，03土壙検出。いずれも上面に多量の炭化物堆積。24日，Ａ区。ＳＩ01住居跡検出。壁部は明確でない。調査区東南部で弥生土器検出。３グリッドにわたり土器が集中。

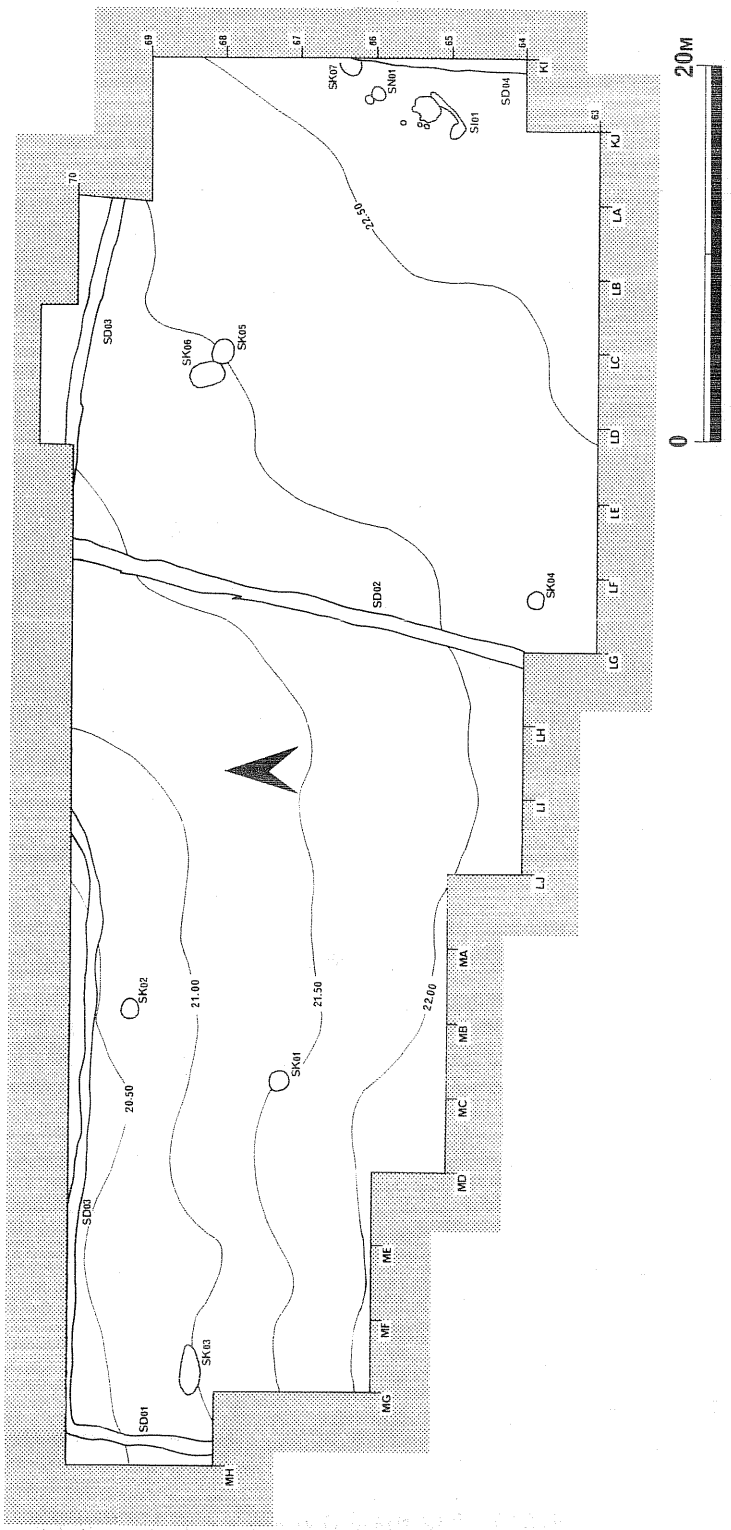
10月１日，Ｂ区で４基の落ち込みを確認。いずれも掘り込みは不明瞭で遺構とは確認し難い。風倒木痕と考えられる。８日，国学院大学助教授小林達雄先生，県教委文化課富樫泰時学芸主事来跡。12日，Ｃ区の調査開始，表土層が厚く粗掘りは時間を要す。Ｂ区の実測を行う。遺物の出土は極めて少ない。22日，Ｂ区調査終了。Ｄ区調査開始。23日，Ｅ区の調査開始。Ａ区北東部で土師器片が集中して出土。Ｄ区で縄文時代後期の土器が多量に出土。

11月12日，Ｃ区の調査終了。Ｄ区で多くの遺構検出。土壙が主で住居跡は平安時代のものが２棟である。14日，Ｅ区の粗掘り作業を終了。検出遺構はＳＫ01竪穴住居跡，ＳＫ01土壙に留まる。20日，Ａ区の調査終了。25日，県教委文化課中谷雅昭課長補佐，県埋蔵文化財センター岩見誠夫副所長来跡。26日，風雪激しくなる。遺構精査続行。

12月４日，遺構の精査終了。写真撮影を行い調査を完了する。



第６図　真壁地遺跡Ｄ調査区・Ｅ調査区の地層断面図



第７図　真壁地遺跡Ａ調査区遺構分布図

第４章　調査の記録

第１節　Ａ調査区

１．遺構と遺物

(1)　平安時代

①　住居跡

ＳＩ01住居跡　（第８図　図版２）　壁部は検出されなく，壁溝の一部が東面に検出された事から，南北辺長2.6ｍの長方形を呈すると考えられる。柱穴はカマドに隣接して２本認められる。カマドは北東寄りに構築され，燃焼部は地山を約７cm掘りくぼめ多量の焼土堆積をみる。煙道部は崩壊が激しく痕跡を留めない。

出土遺物　（第14図３，７）　カマド燃焼部内及び周辺より土師器杯，甕破片出土。

(2)　その他の時代

①　土壙

ＳＫ01土壙　（第９図　図版４）　上壙幅1.1ｍの円形，壁は垂直に立ち上がり，底面とも熱を受け赤褐色に硬化している。深さ13cm。

ＳＫ02土壙　（第９図　図版４）　上壙幅1.2ｍの円形。壁は垂直に立ち上がり，一部に白色粘土が貼付されている。底面とも熱を受け赤褐色化している。深さ38cm。

ＳＫ03土壙　（第９図）　上壙幅2.5ｍ×0.6ｍの楕円形，壁は外傾して立ち上がる。堆積土下層に炭化物混入。深さ20cm。

ＳＫ04土壙　（第９図）　上壙幅1.2ｍ×0.7ｍの楕円形。壁は外傾して立ち上がる。堆積土全層にローム細粒混入，深さ13cm。

ＳＫ05土壙　（第10図　図版３）　上壙幅1.3ｍの円形，壁は外傾して立ち上がる。底面は熱を受け赤褐色に硬化している。深さ26cm。西面でＳＫ06と重複しており，ＳＫ05が新しい。

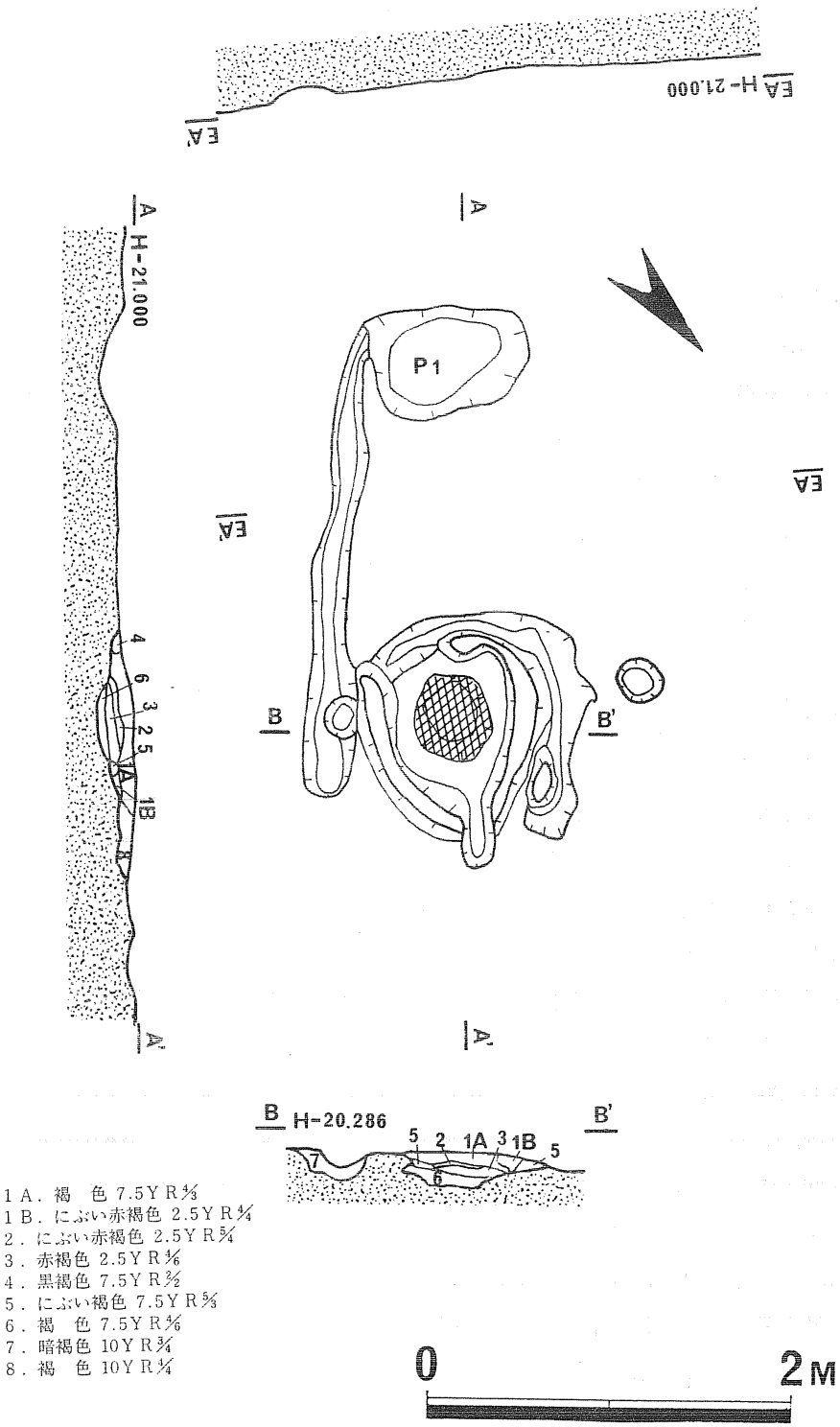
ＳＫ06土壙　（第10図　図版３）　上壙幅1.9ｍ×1.2ｍの楕円形。壁は外傾して立ち上がる。底面とも熱を受け赤褐色に硬化。深さ26cm。土壙内に多量の炭化物が残存している。

出土遺物　２層より土師器杯の細片２点出土。

ＳＫ07土壙　（第９図）　上壙幅1.0ｍの円形。底面に多量の炭化物が残存している。

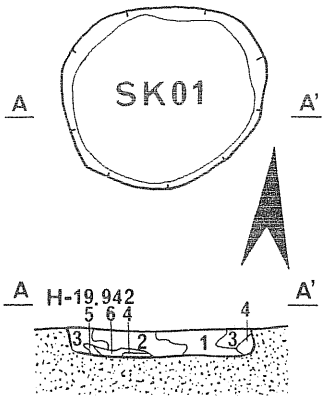
②　溝状遺構　４条検出。東一西（ＳＤ03）及び南一北（ＳＤ01，02，04）にのびている。ＳＤ03は西端でＳＤ01と接続する。堆積土はいずれも軟質の暗褐色土を主体とする。

ＳＤ01溝状遺構　（第11図）　上面幅は52～78cm，深さは10～16cmである。断面は鍋底状を

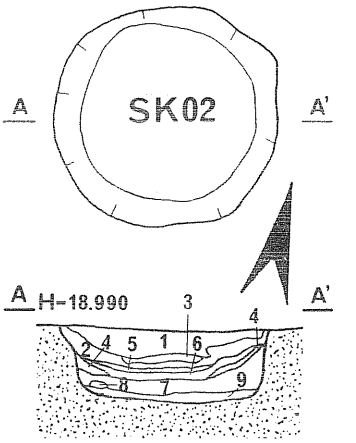


1 A．褐　色 7.5Y R 3/3
1 B．にぶい赤褐色 2.5Y R 4/4
2．にぶい赤褐色 2.5Y R 5/4
3．赤褐色 2.5Y R 4/6
4．黒褐色 7.5Y R 2/2
5．にぶい褐色 7.5Y R 5/3
6．褐　色 7.5Y R 5/6
7．暗褐色 10Y R 3/4
8．褐　色 10Y R 4/4

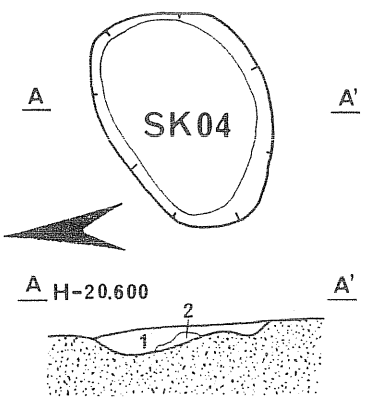
第８図　SI 01実測図



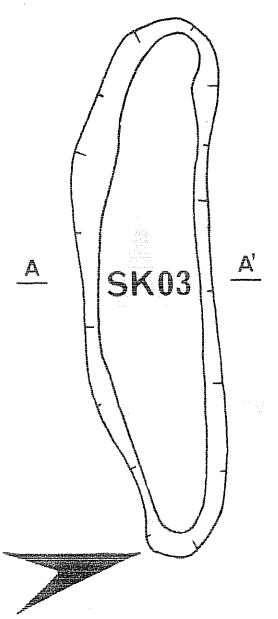
１．黒褐色 10Ｙ Ｒ 2/2
２．褐　色 10Ｙ Ｒ 4/4
３．黒褐色 10Ｙ Ｒ 3/2
４．黒　色 10Ｙ Ｒ 2/1
５．褐　色 10Ｙ Ｒ 4/6
６．黄褐色 10Ｙ Ｒ 5/6

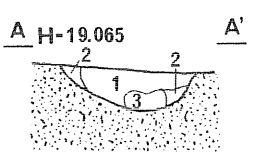


１．黒 褐 色 10Ｙ Ｒ 3/2
２．暗 褐 色 10Ｙ Ｒ 3/3
３．赤 褐 色 10Ｙ Ｒ 3/4
４．暗 褐 色 10Ｙ Ｒ 3/4
５．明黄褐色 10Ｙ Ｒ 6/6
６．黒　　色 10Ｙ Ｒ 2/1
７．褐　　色 10Ｙ Ｒ 4/4
８．褐 灰 色 10Ｙ Ｒ 5/1
９．黒　　色 10Ｙ Ｒ 1.7/1

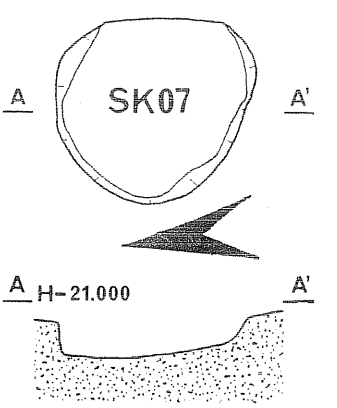


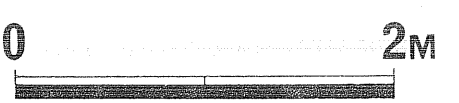
１．黒褐色 10Ｙ Ｒ 3/4
２．黒褐色 10Ｙ Ｒ 3/2





１．黒褐色 10Ｙ Ｒ 3/2
２．暗褐色 10Ｙ Ｒ 3/4
３．褐　色 10Ｙ Ｒ 3/4





第９図　SK01～SK04・SK07実測図

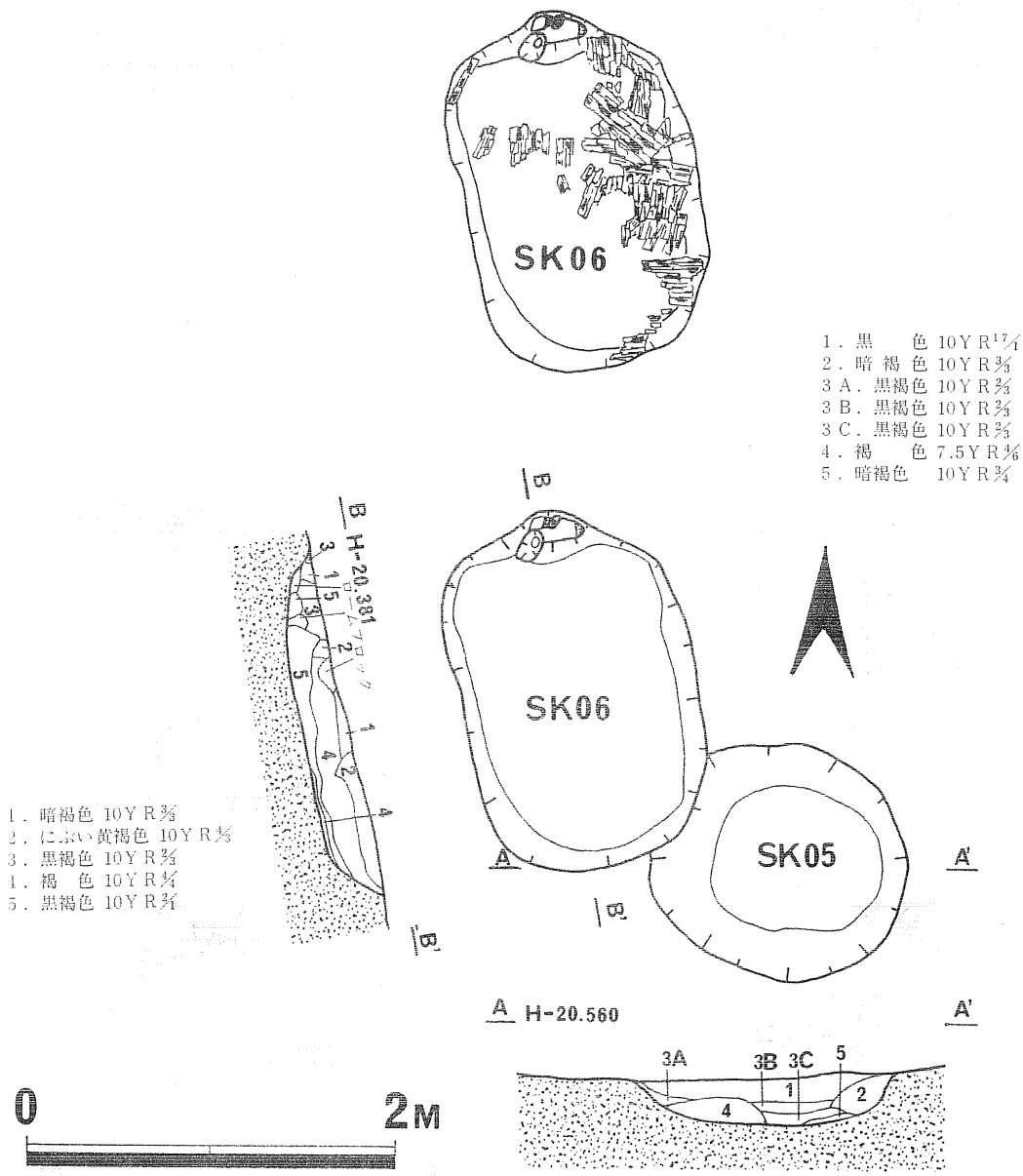
呈する。

SD02溝状遺構　（第11図　図版４）　上面幅36～55cm，深さ25～37cm。断面は鍋底状を呈する。

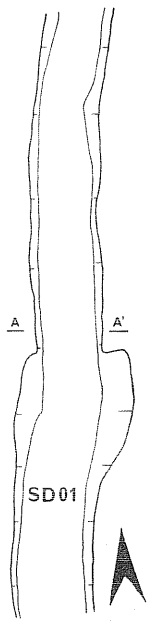
SD03溝状遺構　（第11図）　上面幅52～90cm，断面は逆台形を呈する。深さ８～18cm。

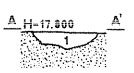
SD04溝状遺構　（第11図）　上面幅60～70cm，断面は逆台形を呈する。深さ18cm。

出土遺物　南面部ＳＩ01に隣接する地点で堆積土上面より土師器杯の小破片が出土。

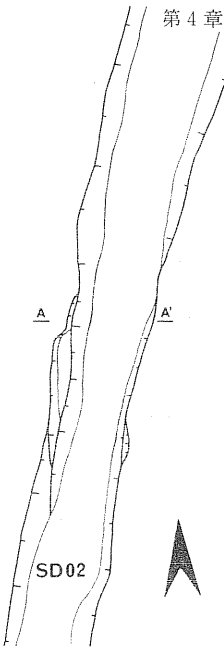


第10図　SK05・SK06実測図

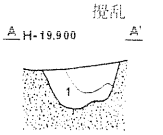




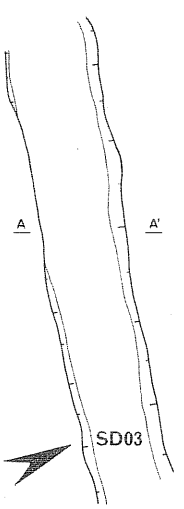
1．黒褐色 10Y R 3/2

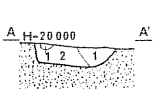


撹乱

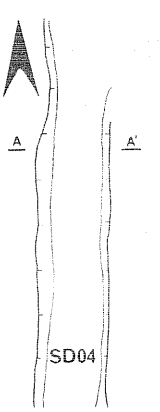


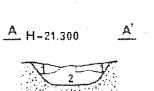
1．黒褐色 10Y R 2/3





1．黒褐色 10Y R 2/3
2．黒褐色 10Y R 2/2



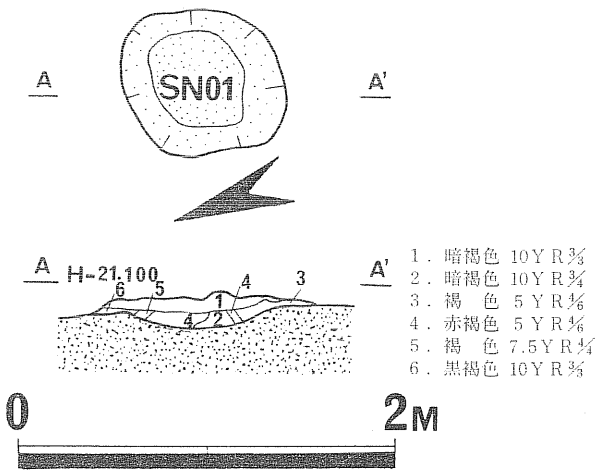


1．暗褐色 10Y R 3/3
2．黒褐色 10Y R 2/3

第11図　SD01～SD04実測図

③　焼土遺構（第12図）

SN01焼土遺構　楕円形の範囲で焼土が堆積。焼土下は深さ10cmの浅い凹状を呈し，壁底面とも火熱により赤褐色に硬化している。



第12図　SN01焼土遺構実測図

2．出土遺物

(1)　弥生時代

①　**土器**　調査区南側の第2層から集中的に出土した。数量は少ない。破片のみであるため，器形は確定できないが，深鉢形土器が主体を占めるようである。口縁部の文様を中心に，分類してみた。

1類　（第13図1～6）　変形工字文風の沈線文が施文される類。縄文は認められない。1，3は，口縁部内面にも沈線文が認められる。

2類　（第13図7～13）　沈線文が口縁部に平行に施文される類。9・11～13の口縁部は，「く」字状に外反する。7・8・12の口縁部のつくりは，波状口縁を呈するようであり，口縁部内面には沈線文が認められる。

3類　（第13図14～17）　口縁部に数条の沈線文を施文する類。15・16は，地文である斜行縄文（LR）上に2・3条の沈線文を施文している。また，14・17は，地文を幅1.5～2.7cm磨消し，それから沈線文を施文している。17の口縁部内面には，沈線文が認められる。15～16の口縁部は，わずかに外反する。

4類　（第13図18・19）　口縁部に刷毛目状文が認められる類。地文である斜行縄文（LR）の上に幅約3cmの刷毛目文を施文している。いずれも，口縁部がわずかに外反する。

5類　（第13図20）　口縁部の斜行縄文（LR）を幅1.5cmほど磨消すが，沈線文や刷毛目文は認められない。口縁部はわずかに外反する。

6類　（第13図21～26）　縄文（RL）を縦位に施文した類。23は，頂部が凹む突起を有する。いずれも，口縁部はわずかに外反する。

そのほかに，高台部分（第13図27・28）が出土している。いずれも，平行沈線文が施文されている。

第13図　Ａ調査区遺構外出土遺物(弥生土器)

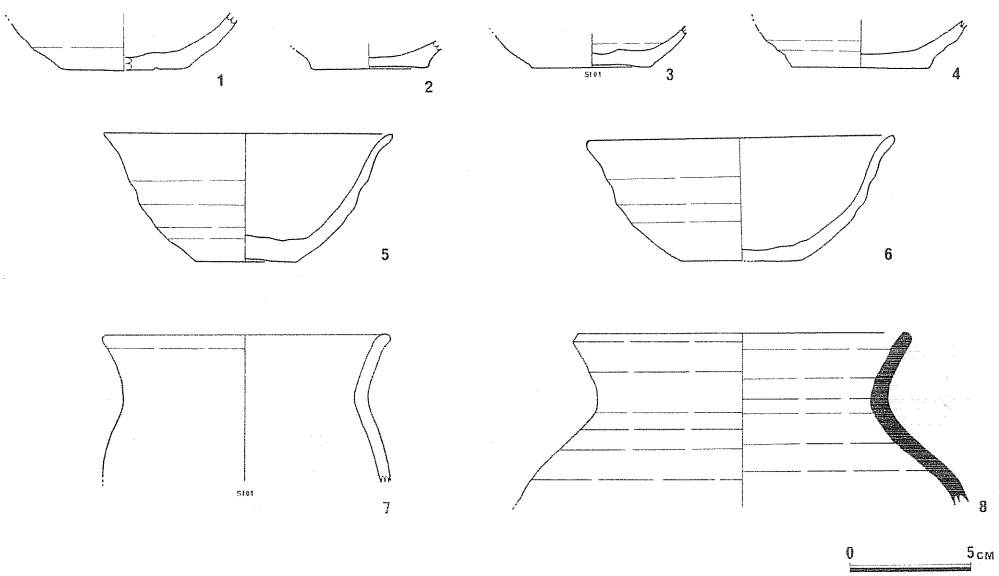
(2) 平安時代

① 土師器　須恵器　（第14図）　調査区北西部，及びＳＩ01住居跡より出土。

１．土師器　杯及び甕が出土。杯はいずれも底部に回転糸切り痕を留める。５，６は体部下半が内湾して立ち上がり口縁部は外傾する。５は口底径比が0.33で，底部は回転糸切りの後へラナデ調整を施している。３はＳＩ01カマド周辺より出土。

甕は口縁部から胴部にかけての破片が主で，器表面にロクロ調整痕を留めているものと，粗いヘラケズリを施しているものがある。７はＳＩ01カマド周辺より出土したもので，比較的小さく口縁部はくの字状に立ち上がる。器表面の一部にはロクロ調整痕を留めている。

２．須恵器　甕が出土している。出土量は少ない。８は口縁部で大きくくの字状に外反するもので，胎土は緻密だが，焼成は不良でややもろい。



第14図　Ａ調査区出土遺物(土師器・須恵器)

３．小結

調査区は舌状台地の縁部から約500ｍ台地内部に入った所に位置する。地形はほぼ平坦であり，北面部には小谷が入りこんでいる。検出された遺構は住居跡，土壙及び溝である。住居跡は出土遺物から平安時代後期のもので，調査区南東端に１棟のみ検出された。土壙は調査区内に分散して６基，内５基は内壁が加熱されている。遺物はわずかに１基の土壙内から土師器片が３点出土したに留まる。堆積土中には多量の焼土，炭化物が含まれ，ＳＫ06の場合は特に多く一部は未炭化の木材片である。類例は，竹生遺跡[註１]，腹鞍の沢遺跡[註２]にもみられる。竹生遺跡では少量の土師器片が出土している。性格は不明である。遺構外の出土遺物は弥生土器と土師器及び須恵器である。弥生土器は調査区南西端で３グリッドにわたり集中して出土。遺物はさらに南方向の台地中央部にも分布していると考えられる。平安時代の遺物で遺構外のものは北端部に集中している。しかしその周辺に関連する遺構は検出されなかった。

註１．秋田県教育委員会　「杉沢台遺跡，竹生遺跡発掘調査報告書」　1981年

註２．秋田県教育委員会　「腹鞍の沢遺跡発掘調査報告書」　1982年

第２節　Ｂ調査区

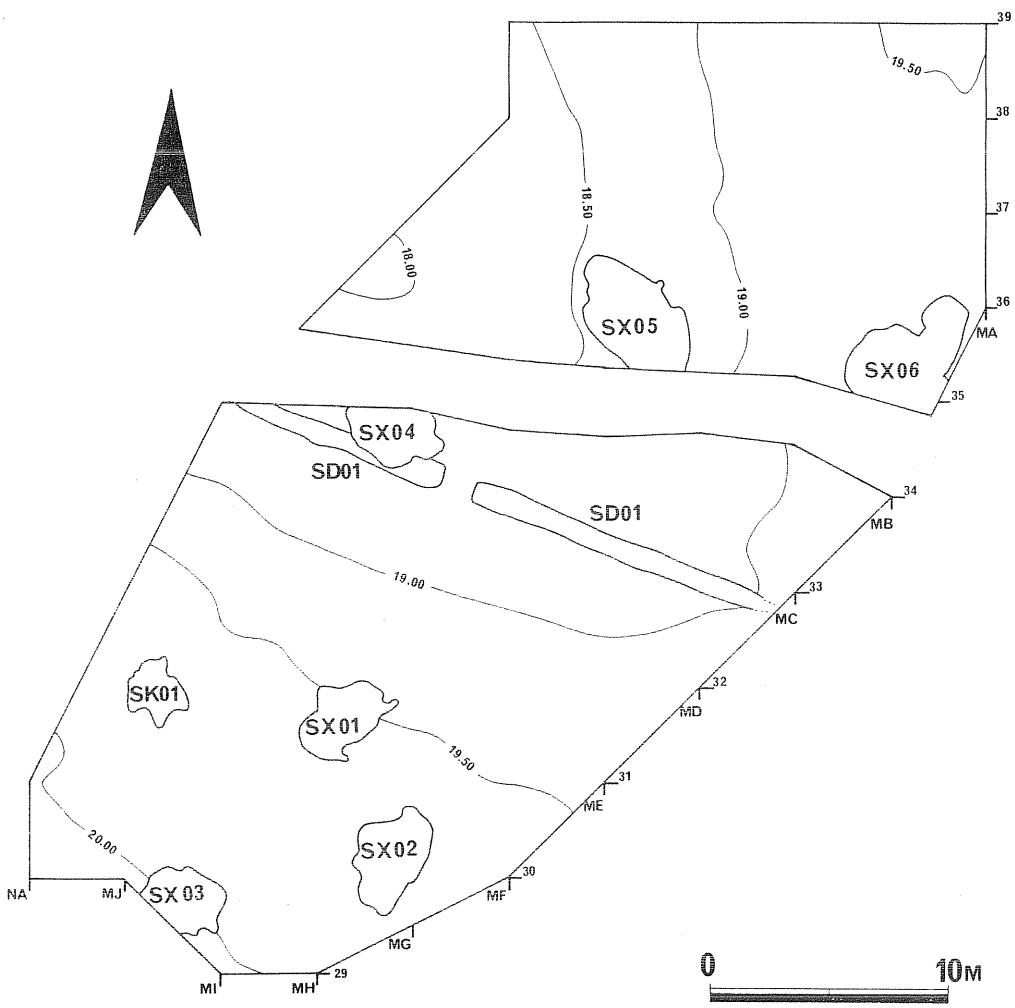
１．遺構と遺物

(1)　土壙

ＳＫ01土壙　（第16図）　平面形は2.2ｍ×1.5ｍの不整方形を呈する。底面は平坦で硬くしまっている。

(2)　溝状遺構

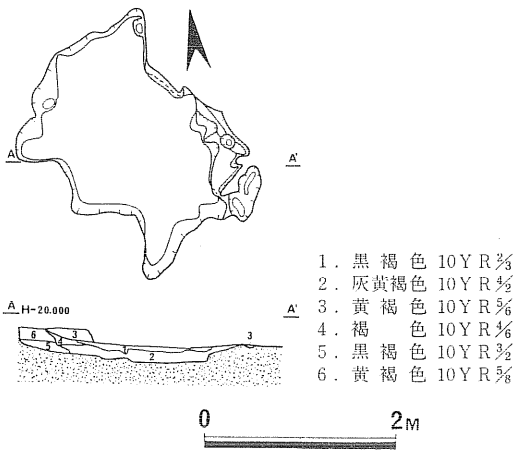
ＳＤ01溝状遺構　（第17図）　上面幅0.8ｍ～１ｍ，深さ20cm。断面形は鍋底状を呈し東から西へ傾斜している。



第15図　Ｂ調査区遺構分布図

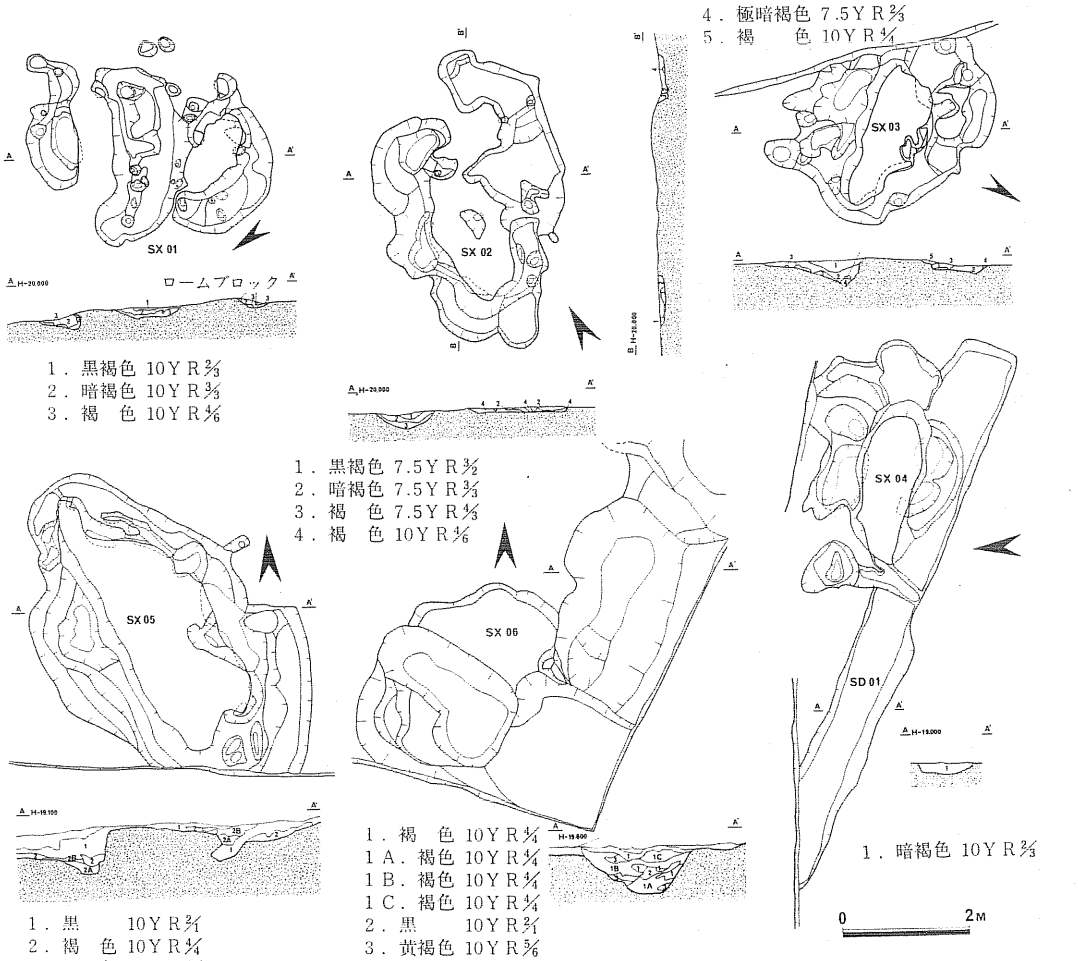
２．風倒木痕

ＳＸ01～ＳＸ05　（第17図）　自然作用の所産による風倒木痕と考えられるもので不定の落ち込みがリング状に巡る。リング内部はマウンド状に隆起したローム土である。落ち込みの幅，深さとも一定していないが，幅は30cm～１ｍ，深さは浅く10～30cmで一部が凹状に深くなる場合もある。マウンドは長軸が0.5ｍ～2.0ｍの不整楕円形を呈す。



第16図　SK01実測図

ＳＸ06　（第17図）　方形及び円形の掘り込みが重複してあり，堆積土に地山褐色土を多量に含む事から，人為的な埋め戻しがなされたと考えられる。堆積土より近世の硬貨が出土。



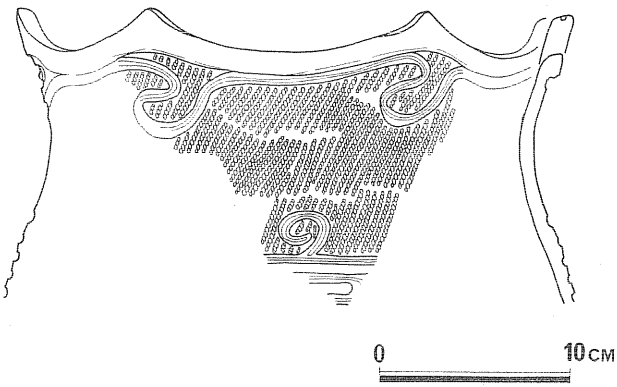
第17図　SD01・SX01・02・03・05・06実測図

3．出土遺物

(1) 縄文時代

① 土器 （第18図 図版35）

調査区中央部より単体で出土。深鉢形土器で，胴部下半にかけ丸く張る器形とおもわれる。口縁部は波状を呈し肥厚している。器表面は斜行縄文を地文とし，比較的太い沈線で波状の曲線文様を施す。

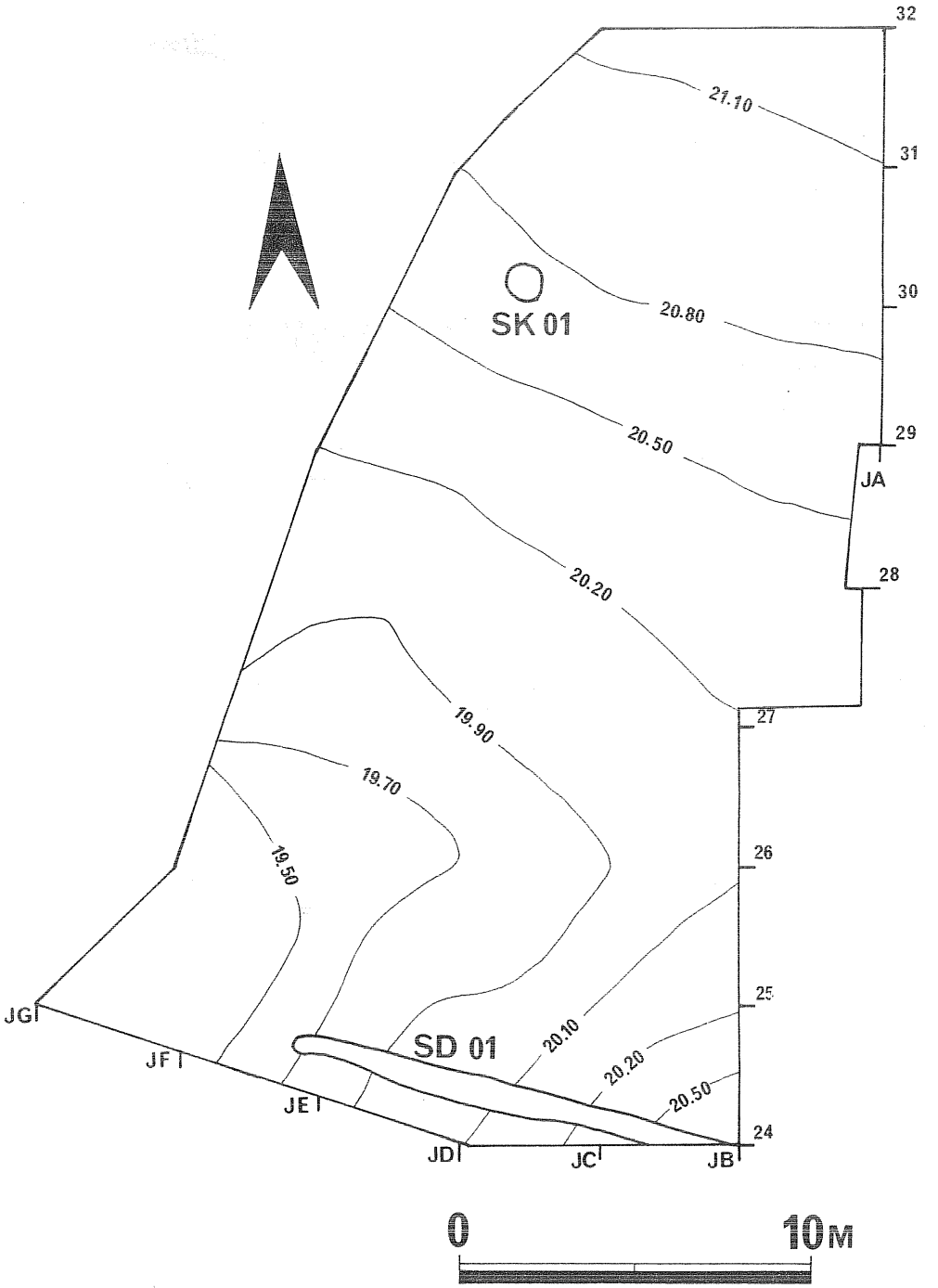


第18図 B調査区遺構外出土遺物(縄文時代)

縄文時代後期で所謂前十腰内式に属するものと考えられる。

4．小結

調査区舌状台地先端から約600 m台地内に入った所に位置し，台地北面を区切る小谷が間近にせまっている。検出されたものは，1条の溝と6基の特格不明の落ち込みである。この落ち込みはいずれも次の様な特徴を示している。規模は一定しないが長軸1 m～2 mの不整楕円形を呈す。落ち込みの中心部はローム土で，その周囲を幅20～50cmの黒色土がリング状に入っている。黒色土除去後の掘り込みは凹凸が激しくリング幅も一定でない。深さは20～40cmと比較的浅く一部は凹状に深くなる所もある。遺物は一部から微量の縄文土器片数点がみられたが，他の多くは出土していない。これらの事から自然作用により形成された所謂風倒木痕と考えられる。



第19図　真壁地遺跡Ｃ調査区遺構分布図

第３節　Ｃ調査区

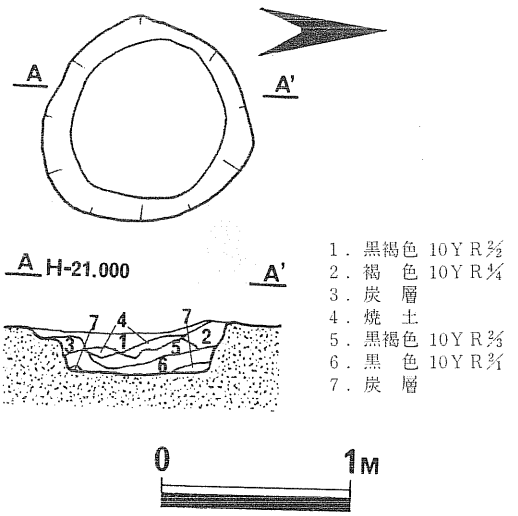
１．遺構と遺物

(1)　土壙

ＳＫ01土壙　（第20図　図版７）　平面形は上壙幅1.0ｍの円形。壁は外傾して立ち上がる。深さ20cm。全層に炭化物を多量に混入，４層は焼土を含む。

(2)　溝状遺構

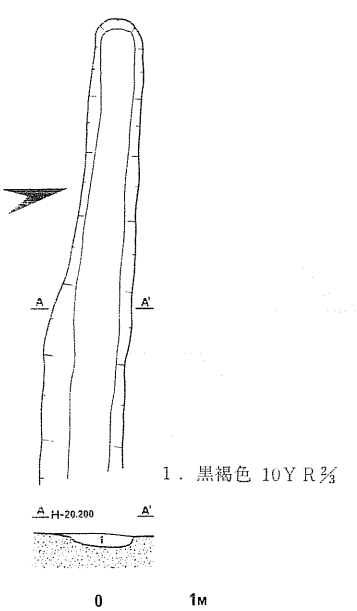
ＳＤ01溝状遺構　（第21図）　上面幅50～90cm。深さ６～11cm。断面は逆台形を呈し，東から西へ傾斜している。



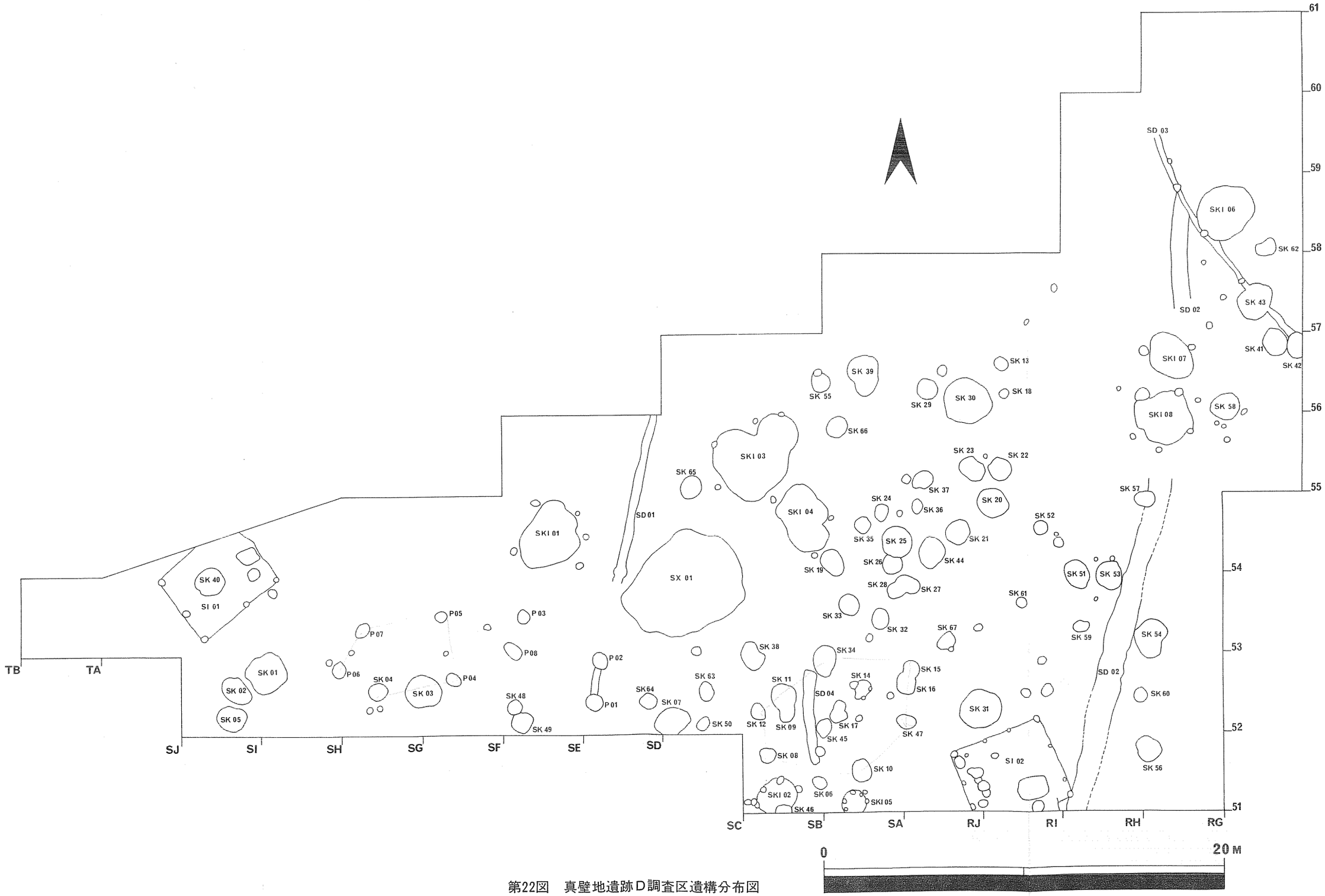
第20図　ＳＫ01実測図

２．小結

本調査区は，Ｂ調査区からさらに東方向へ約400ｍ入った台地中央部に位置する。地形は凹状を呈しているため，表土層は深く一部では70cmにも達する。検出された遺構は土壙１基と溝１条であり，いずれも時期は明確でない。遺物は遺構外から少量の縄文土器片が検出されたにとどまった。



第21図　ＳＤ01実測図



第22図　真壁地遺跡Ｄ調査区遺構分布図

第４節　Ｄ調査区

１．遺構と遺物

検出された遺構は縄文時代後期と平安時代に属するもので，調査区のほぼ全域にわたり認められた。出土遺物については，遺構内，遺構外出土とも後述する出土遺物の項で一括分類する。したがって縄文時代の遺構内出土遺物については，土器がその分類形式を用いて記述され，石器については，第２表に明示している。

(1)　縄文時代

①　竪穴状遺構

遺構内外に関連柱穴を巡らすもの，及び底面に明確な焼土堆積を見る類である。８基検出し中でも隣接するＳＫＩ01，03，04は形態が類似している。２～３個の円形もしくは楕円形の土壙を周縁部で重ね合わせた様相を呈し，それらの形態に応じ底面は深さが異なるが，１ヵ所だけは極立って高い。これらは調査時に土壙が重複しているものと考えたが，堆積土及び遺構確認面の状況等から時期的差異は認められず，１遺構と断定した。

ＳＫＩ　01竪穴状遺構　（第23図　図版11）　底面は３分割され，南面の最深部で深さ１ｍ。西面部は１段高く平坦で，深さ40cm，壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面共硬くしまっている。遺構外周辺を５本の柱穴が巡る。堆積土下位面で多量の焼土検出，遺構内全面に及んでいる。

出土遺物　（第51図13，23，32，35，40，　4，69，74）　全層にわたり多量の土器出土。その多くは鉢形土器である。深鉢形土器Ⅰ，Ⅲ，Ⅴ類，壺形土器Ⅰ，Ⅱ類，鉢形土器Ⅰ類。遺構内南西壁付近の堆積土３層より土偶出土。

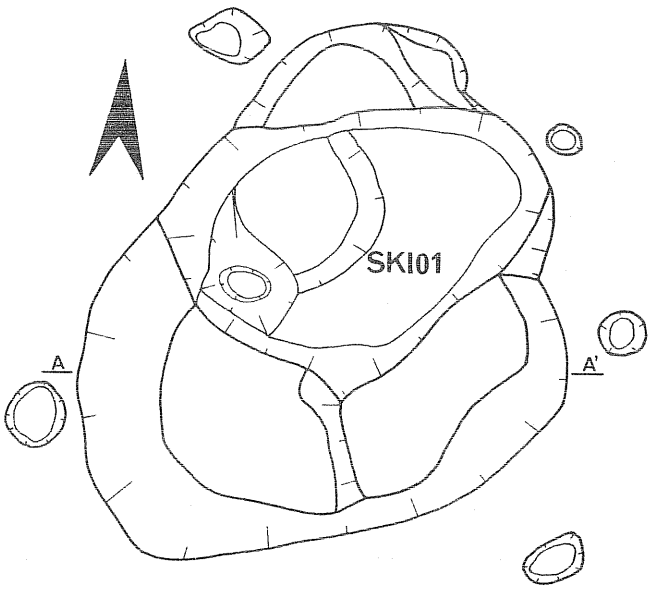
ＳＫＩ　02竪穴状遺構　（第23図　図版14）　平面形状は直径２ｍの円形，南面部でＳＫ46と重複，ＳＫ46が新しい。壁部に接し４本の柱穴が巡る。底面は硬くしまりほぼ平坦。壁は垂直に立ち上がり，深さ15cm。

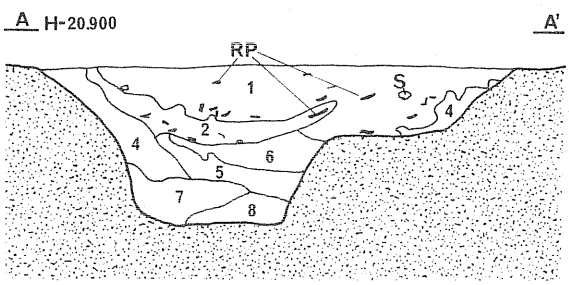
出土遺物　（第51図24，70，76，90）　深鉢形土器Ⅲ類及び鐸形土製品。

ＳＫＩ　03竪穴状遺構　（第24図　図版12）　底面は３分割され，中央部でさらに１段円形状に深く掘り凹む。最深部で深さ１ｍ。北面部は張り出し状を呈し，１段高く平坦で，深さ60cm壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺構外周辺に４本の柱穴。遺構内全面にわたり，堆積土中位に多量の焼土検出。

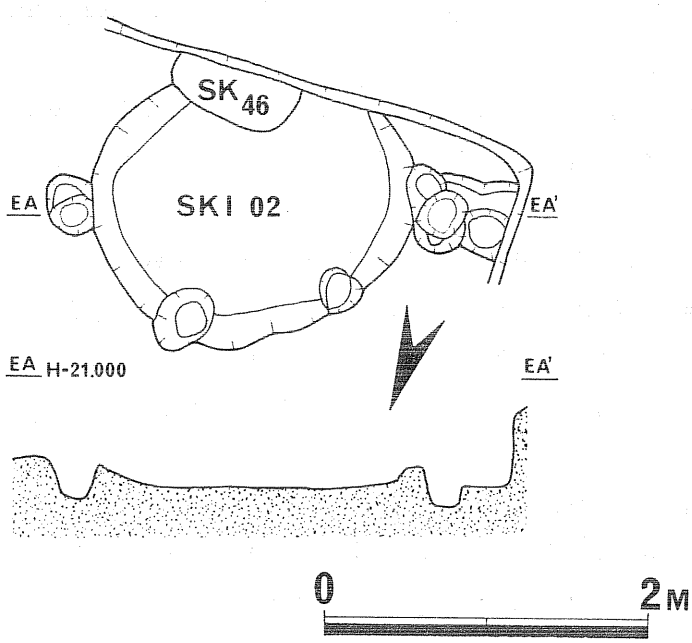
出土遺物　（第49図１，９，20，29，41，42，53，57，68，77，89）　全層にわたり出土。深鉢形土器を主とする。深鉢形土器Ⅰ，Ⅲ，Ⅴ類，鉢形土器Ⅰ類，壺形土器Ⅰ類及び土偶，鐸形土製品。三脚石器。土偶は遺構内西面壁付近の堆積土４層より出土。

ＳＫＩ　04竪穴状遺構　（第25図　図版13）　底面は３分割され，北面部で円形状に１段深く





1．黒褐色 10YR3/2
2．黒褐色 10YR3/3
3．黒褐色 10YR3/2
4．暗褐色 10YR3/4
5．黒　色 10YR2/1
6．暗赤褐色 5YR3/4
7．暗褐色 7.5YR3/3
8．黒褐色 7.5YR3/2



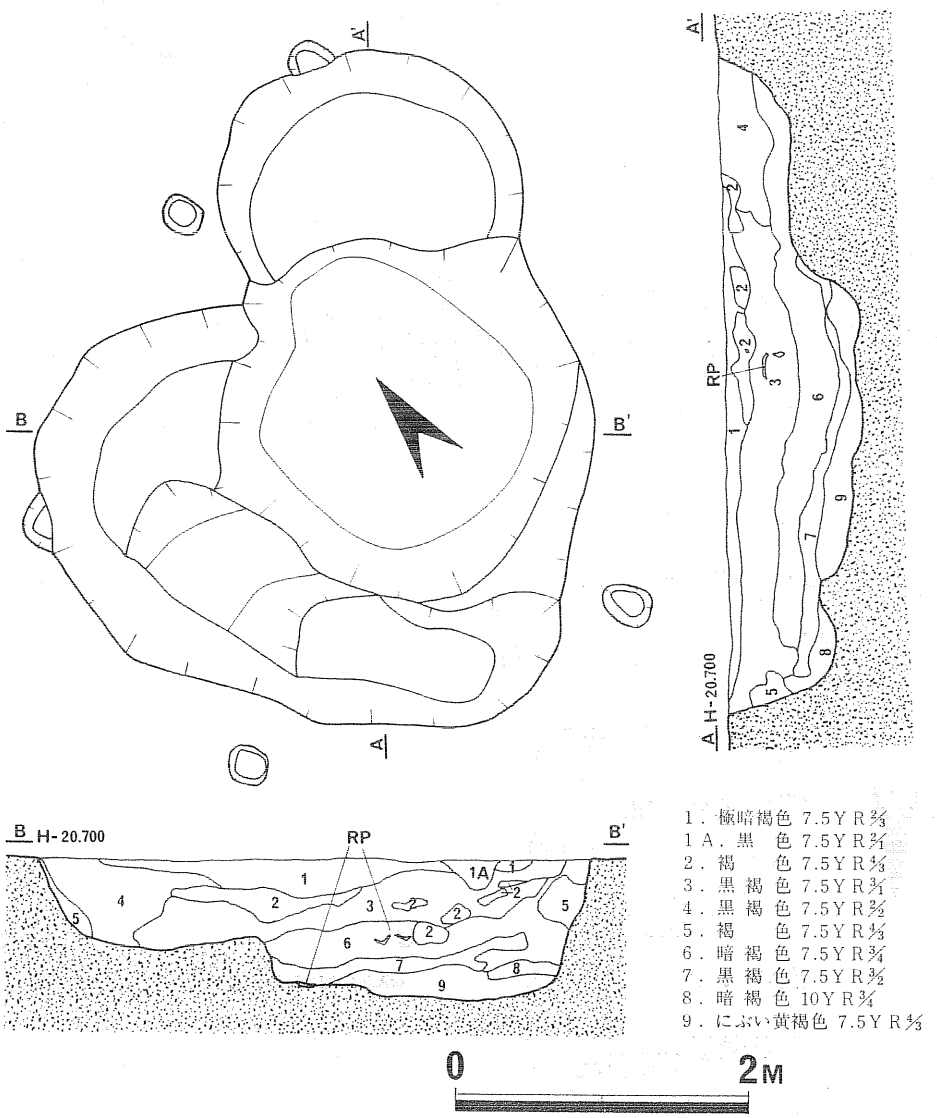
第23図　SKI 01・SK02実測図

掘り凹んでいる。深さ１ｍ。南西部は張り出し状を呈し，円形状に１段高く，深さ35cm。底面は平坦。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺構外に２本の柱穴。堆積土中層に多量の焼土を含む。

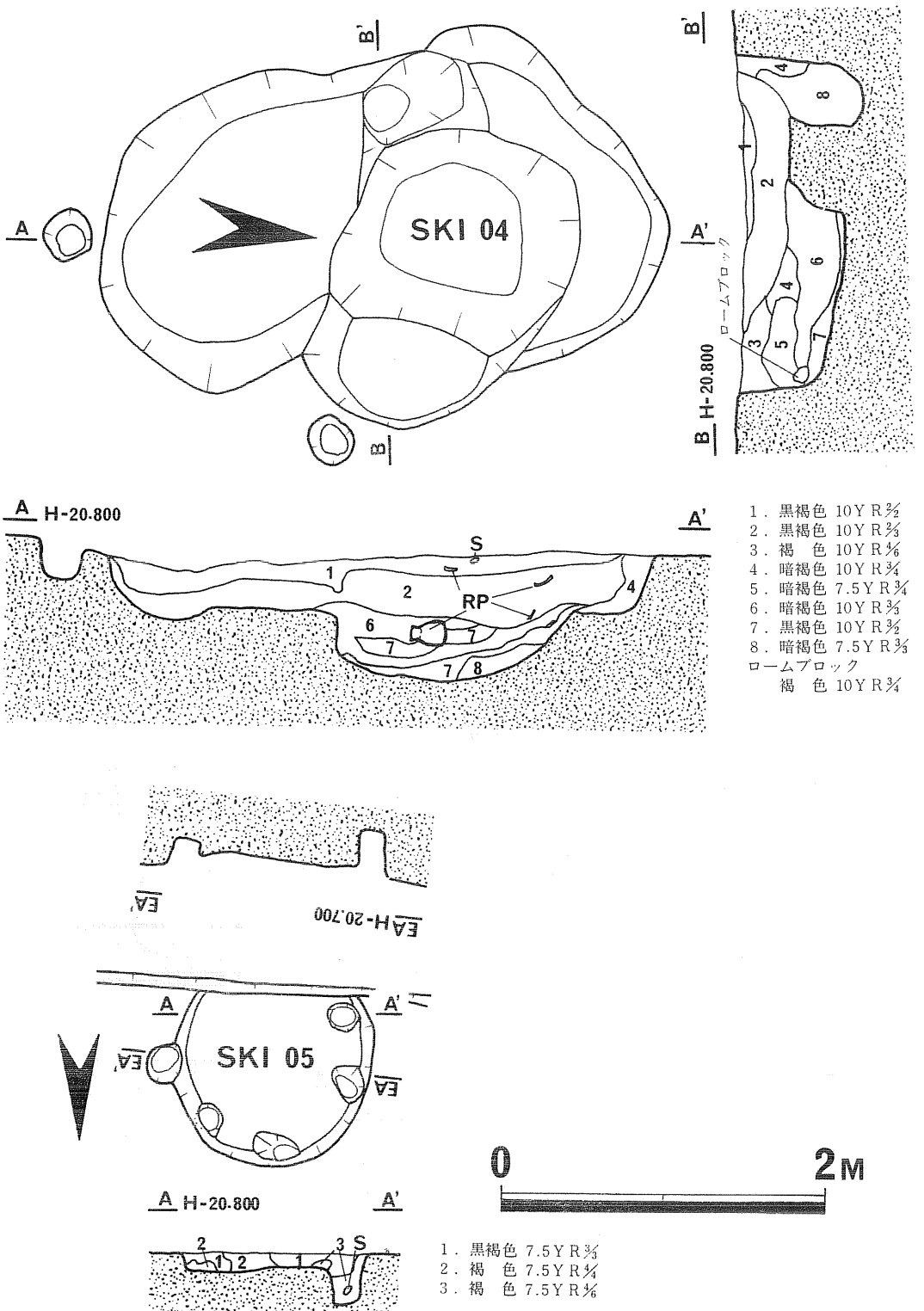
出土遺物　（第50図11，49）　全層にわたり比較的多量の土器出土。深鉢形土器Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ類。壺形土器Ⅰ類。

SKI 05竪穴状遺構　（第25図　図版14）　平面形状は直径1.2ｍの円形。壁部に接し５本の柱穴が巡る。底面はほぼ平坦で硬くしまり，壁は垂直に立ち上がる，深さ10cm。

出土遺物　（第52図55，78）　遺構内南西部より集中して出土。深鉢形土器Ⅰ類，壺形土器Ⅱ類及び鐸形土製品。



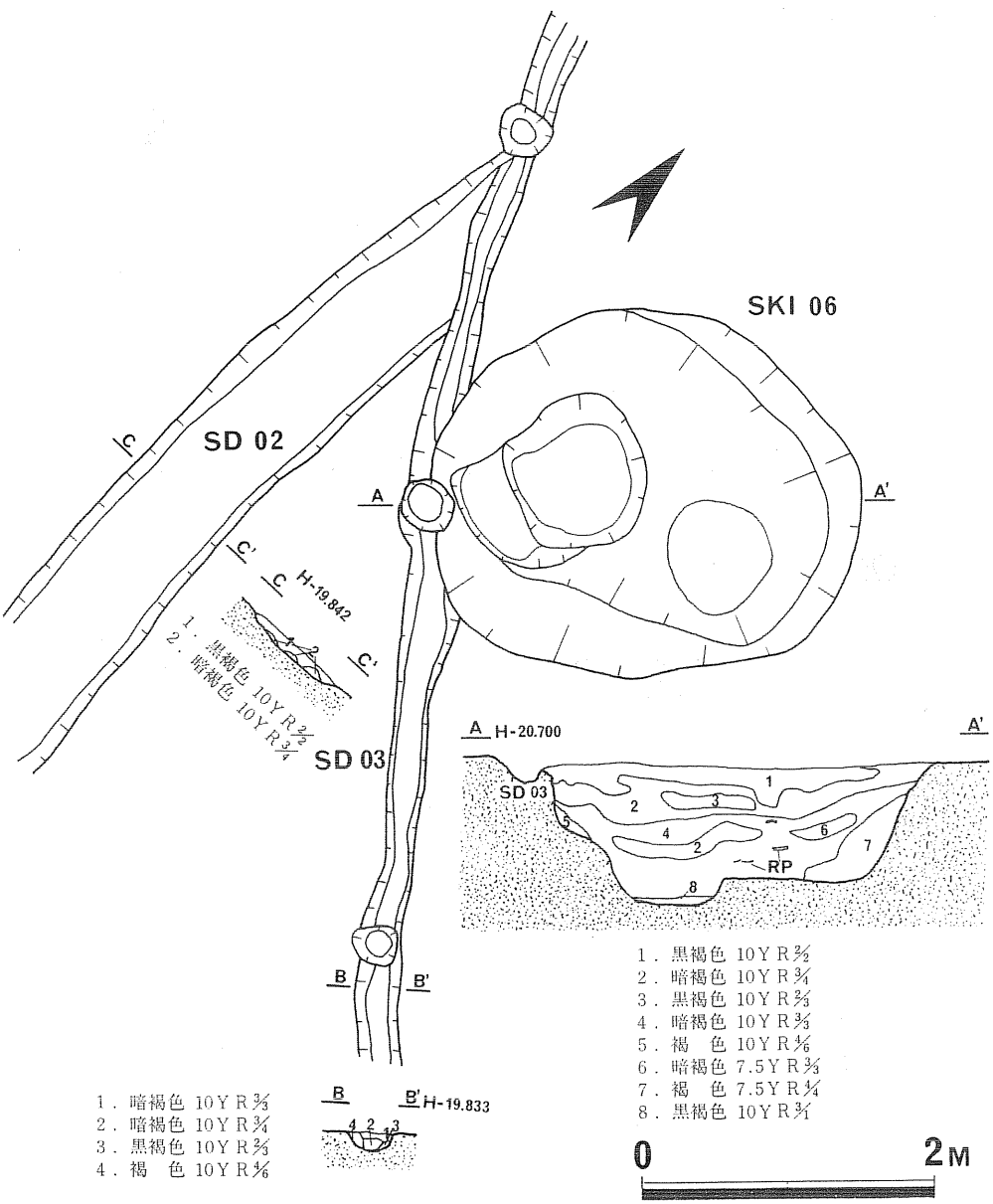
第24図　SKI 03実測図



第25図　SKI 04・05実測図

SKI 06竪穴状遺構　（第26図　図版15）　平面形状は2.8m×3.2mの楕円形。底面は硬くしまり，東寄りに焼土の分布をみる。西面部に径60cmの凹状ピット。南西部でSD03と重複し，溝が新しい。

出土遺物　（第49図３，61，63，66）　４層から比較的多量に出土。深鉢形土器Ⅰ類，鉢形土器Ⅰ類，壺形土器Ⅰ，Ⅱ類及び土偶。土偶は遺構内西面部の堆積土２層より出土。

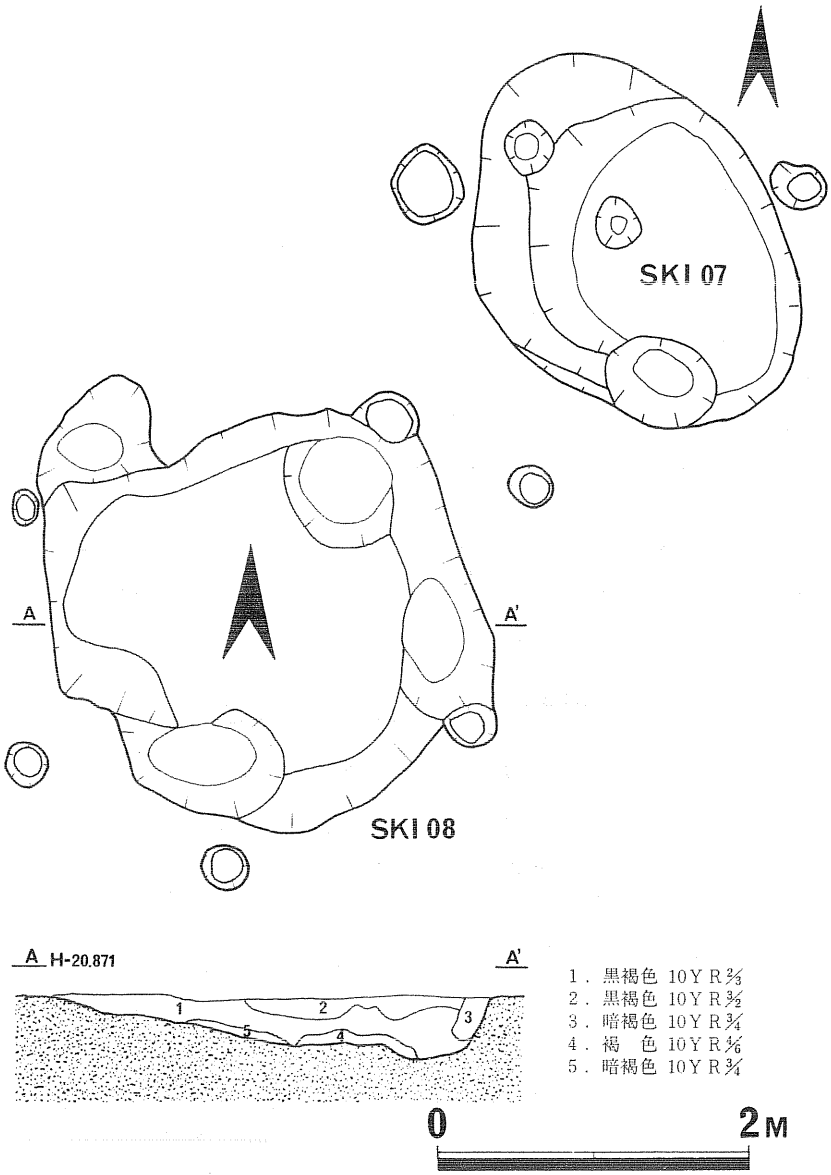


第26図　SKI 06・SD02・03実測図

SKI 07竪穴状遺構　（第27図）　平面形状は2.6m×2mの楕円形。底面はやや凹凸を呈し中央部から南西部にかけ1段深く掘り凹められている。深さ55cm。堆積土全層にわたり少量の焼土混入。遺構内外に5本の柱穴。

出土遺物　ほぼ底面直上より出土。深鉢形土器Ⅰ，Ⅱ類。壺形土器Ⅰ類。

SKI 08竪穴状遺構　（第27図　図版15）　平面形状は直径2.6mの円形。底面は平坦だが西方向に緩く傾斜し，少量の焼土分布がみられる。壁部に隣接し柱穴状ピット4本と遺構外周辺に5本の柱穴。



第27図　SKI 07・08実測図

② 土壙

ＳＫ01土壙　（第28図　図版16）　上壙幅2.1ｍ×1.7ｍの楕円形。壁はほぼ垂直に落ち込むが，底面付近でやや広がる。深さ1.1ｍ。堆積土は軟質の黒褐色土を主体にし，８層に焼土含有。

出土遺物　（第51図13・22）　７層より深鉢形土器Ⅰ，Ⅲ，Ⅴ類と壺形土器Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ類。

ＳＫ02土壙　（第28図　図版16）　上壙幅1.6ｍ×1.1ｍの楕円形。深さ49cm。

出土遺物　全層にわたり土器出土。深鉢形土器Ⅰ・Ⅱ類及び壺形土器Ⅱ類。

ＳＫ03土壙　（第28図　図版16）　上壙幅1.8ｍ×1.6ｍの楕円形。深さ15cm。底面は凹凸を呈し，西面部ではもろい。

ＳＫ04土壙　（第28図　図版17）　上壙幅0.9ｍの円形。深さ52cm。堆積土３層に焼土混入。

出土遺物　３層より深鉢形土器Ⅰ類。

ＳＫ05土壙　（第29図　図版17）　上壙幅1.4ｍ×1.1ｍの不整楕円形。深さ20cm。壁は外傾して立ち上がる。堆積土２層に焼土粒を含む。

出土遺物　２層より深鉢形土器Ⅰ類。壺形土器Ⅱ類，出土量は少ない。

ＳＫ06土壙　（第29図）　上壙幅0.7ｍ×0.5ｍの楕円形。深さ35cm。堆積土中に褐色土ブロック混入。底面は凹凸を呈す。

ＳＫ07土壙　（第29図　図版17）　南面部は調査区外のため未確認だが上壙幅1.8ｍ×1.3ｍの楕円形を呈すると思われる。深さ26cm。底面は鍋底状を呈し，中央部に深さ20cmの凹状ピットを有す。

ＳＫ08土壙　（第29図）　上壙幅0.8ｍの円形，深さ60cm。底面は平坦で硬くしまっている。

ＳＫ09・11土壙　（第30図　図版18）　重複しておりＳＫ11が新しい。ＳＫ09は上壙幅0.7ｍの円形。ＳＫ11は1.3ｍ×1.2ｍの不整楕円形。底面はいずれも凹凸を呈す。

ＳＫ10土壙　（第30図　図版18）　上壙幅1.1ｍの円形。掘り込みは円筒状になされ，深さ1.1ｍ。堆積土は軟質の黒褐色土を主体とし，３層に焼土が混入。底面は平坦で硬くしまっている。

出土遺物　底面直上より深鉢形土器Ⅰ類。出土量は極めて少ない。

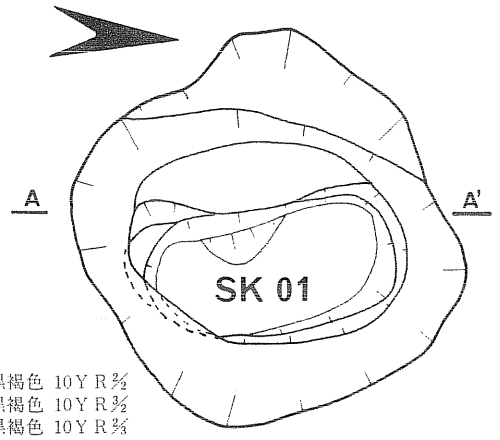
ＳＫ12土壙　（第30図　図版18）　上壙幅0.8ｍの円形。掘り込みは擂鉢状になされ，底面は硬くしまっている。深さ41cm。

出土遺物　堆積土上面より深鉢形土器Ⅰ類の破片５点。

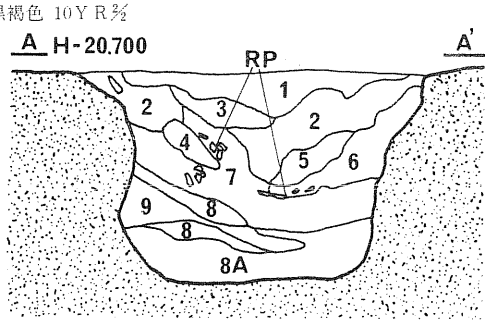
ＳＫ13土壙　（第30図）　上壙幅0.7ｍの円形，深さ９cm。底面は平坦で硬くしまっている。

ＳＫ14土壙　（第30図　図版19）　上壙幅1.0ｍ×0.7ｍの不整楕円形。深さ25cm。底面中央及び遺構周囲を巡り２本の柱穴状ピット。

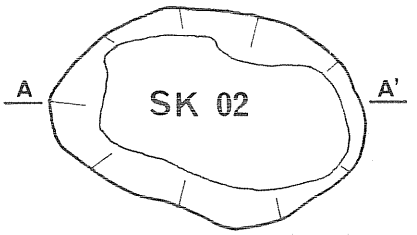
出土遺物　１層及び３層より深鉢形土器Ⅰ・Ⅲ類，鉢形土器Ⅰ類，壺形土器Ⅱ・Ⅳ類。

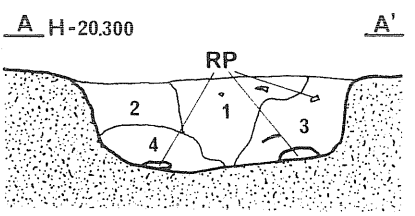


1．黒褐色 10YR 3/2
2．黒褐色 10YR 3/2
3．黒褐色 10YR 2/3
4．褐　色 10YR 4/6
5．黒褐色 10YR 2/2

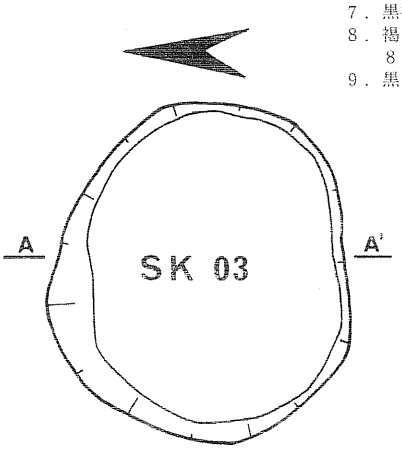


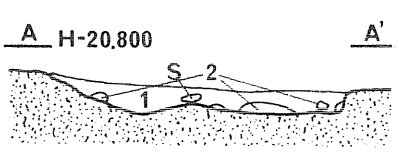
6．暗褐色 10YR 3/3
7．黒褐色 7.5YR 3/2
8．褐　色 7.5YR 4/4
8A 7.5YR 4/4
9．黒　　7.5YR 1.7/1



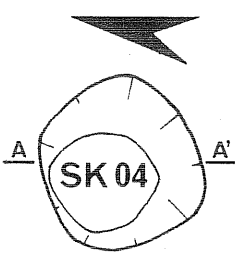


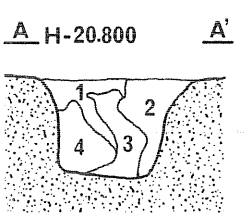
1．黒褐色 10YR 3/2
2．黒褐色 10YR 3/3
3．暗褐色 10YR 3/3
4．黒褐色 10YR 1/3



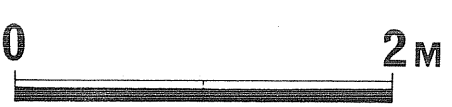


1．黒褐色 7.5YR 3/2
2．褐　色 7.5YR 4/6

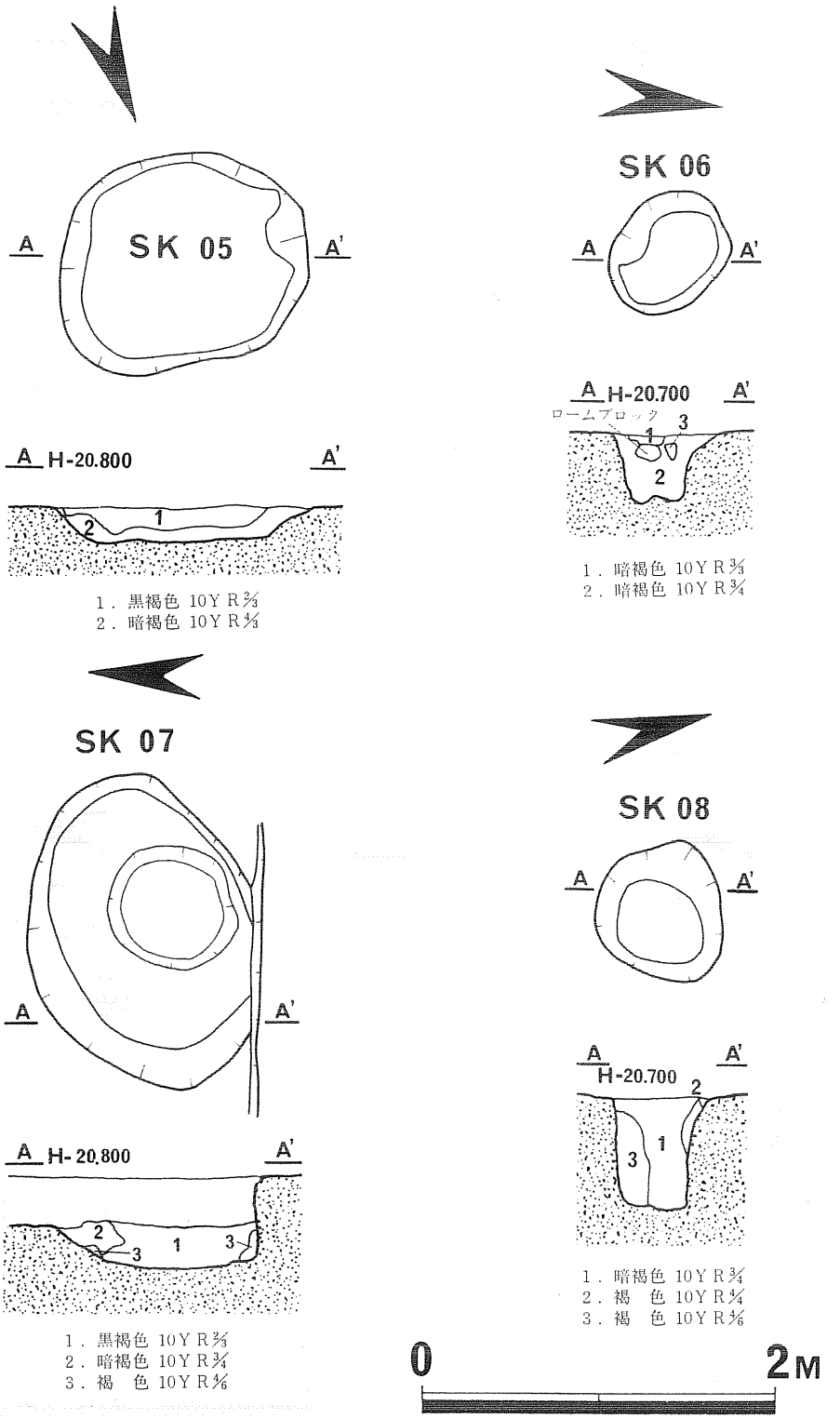




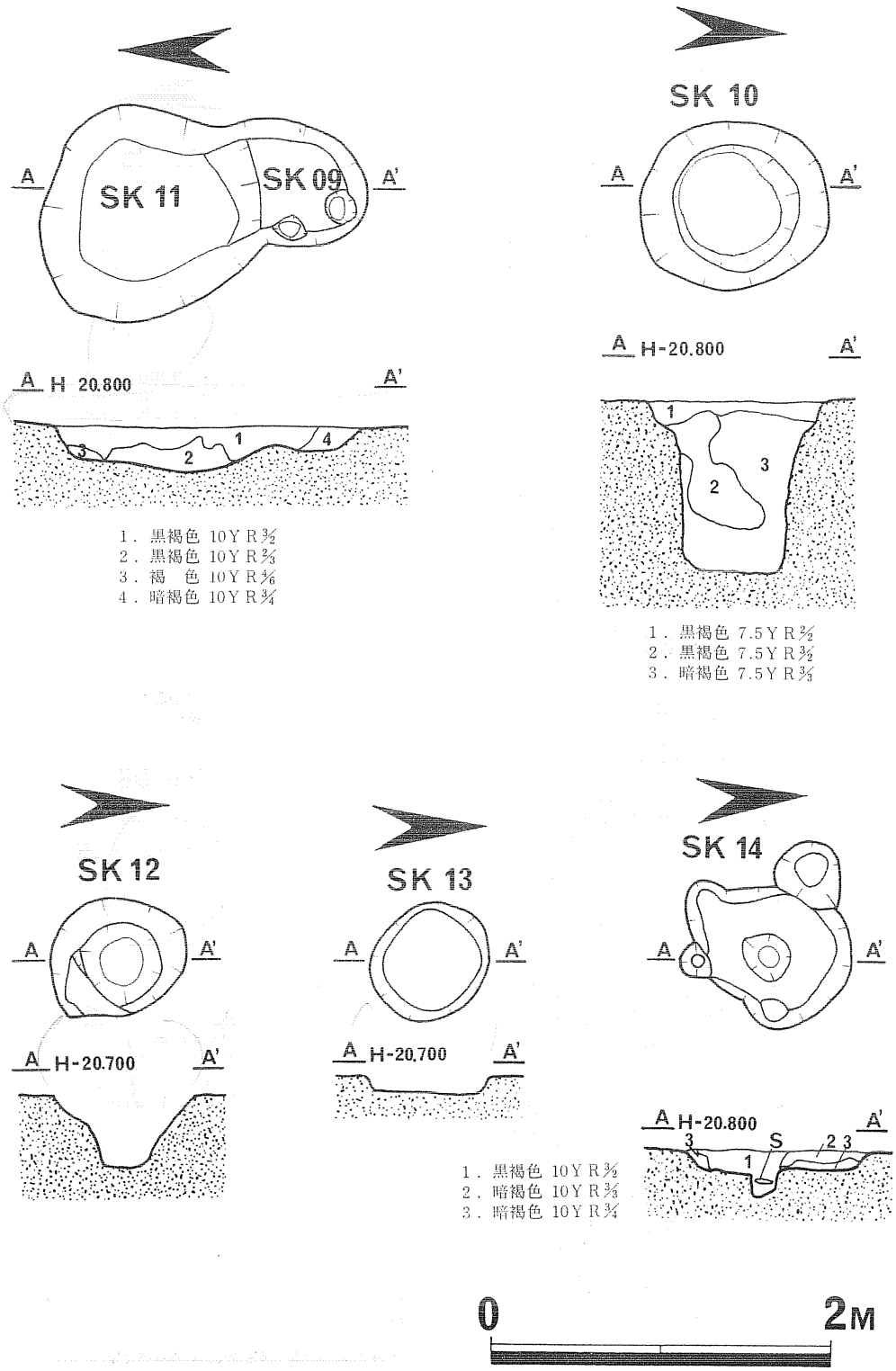
1．黒褐色 10YR 3/2
2．暗褐色 10YR 4/3
3．暗褐色 10YR 3/3
4．褐　色 10YR 4/4



第28図　SK01～04実測図



第29図　SK05～08実測図



第30図　SK09～14実測図

ＳＫ15・16土壙　（第31図　図版19）　重複しているが新旧は明確でない。上壙幅０.８ｍ及び1.1ｍでいずれも円形。深さは15cm及び10cmと浅い。

出土遺物　３層より壺形土器Ⅰ類。

ＳＫ17土壙　（第31図　図版20）　上壙幅1.1ｍ×0.5ｍの楕円形。深さ28cm。堆積土は２層が壁崩落土と考えられる褐色土。

出土遺物　１層より深鉢形土器Ⅰ類，壺形土器Ⅰ類。出土量は少ない。

ＳＫ18土壙　（第31図）　上壙幅0.5ｍの円形，深さ14cm。壁は垂直に立ち上がる。

ＳＫ19土壙　（第31図）　上壙幅1.4ｍ×１ｍの楕円形，深さ27cm。底，壁面ともなめらかで硬くしまっている。

出土遺物　底面付近より深鉢形土器Ⅰ類。出土量は破片４点。

ＳＫ20土壙　（第31図）　上壙幅1.6ｍ×1.4ｍの不整楕円形，深さ37cm。底，壁面とも凹凸を呈す。南面壁に焼土散布。

出土遺物　３層～４層にかけて深鉢形土器Ⅰ・Ⅲ類，壺形土器Ⅲ類，鉢形土器Ⅰ類。

ＳＫ21土壙　（第32図　図版20）　上壙幅1.2ｍでほぼ円形。深さ33cm。全層に焼土細粒混入。

出土遺物　２層～３層にかけ深鉢形土器Ⅰ類。出土量は多い。

ＳＫ22土壙　（第32図）　上壙幅1.1ｍ×１ｍの不整楕円形。深さ28cm。北壁は一部崩落。底面は凹凸が激しい。

出土遺物　４層より深鉢形土器Ⅰ類。

ＳＫ23土壙　（第32図）　上壙幅1.3ｍ×1.0ｍの不整楕円形。深さ18cm。堆積土全層にわたり褐色土ブロックを含む。

出土遺物　１層より深鉢形土器Ⅰ類。

ＳＫ24土壙　（第32図）　上壙幅0.9ｍ×0.6ｍの楕円形。深さ20cm。

ＳＫ25・26土壙　（第32図　図版20）　重複しており，ＳＫ25が新しい。上壙幅は１.５ｍ及び1.0ｍでいずれも円形。深さはＳＫ25が37cm，ＳＫ26が20cm。

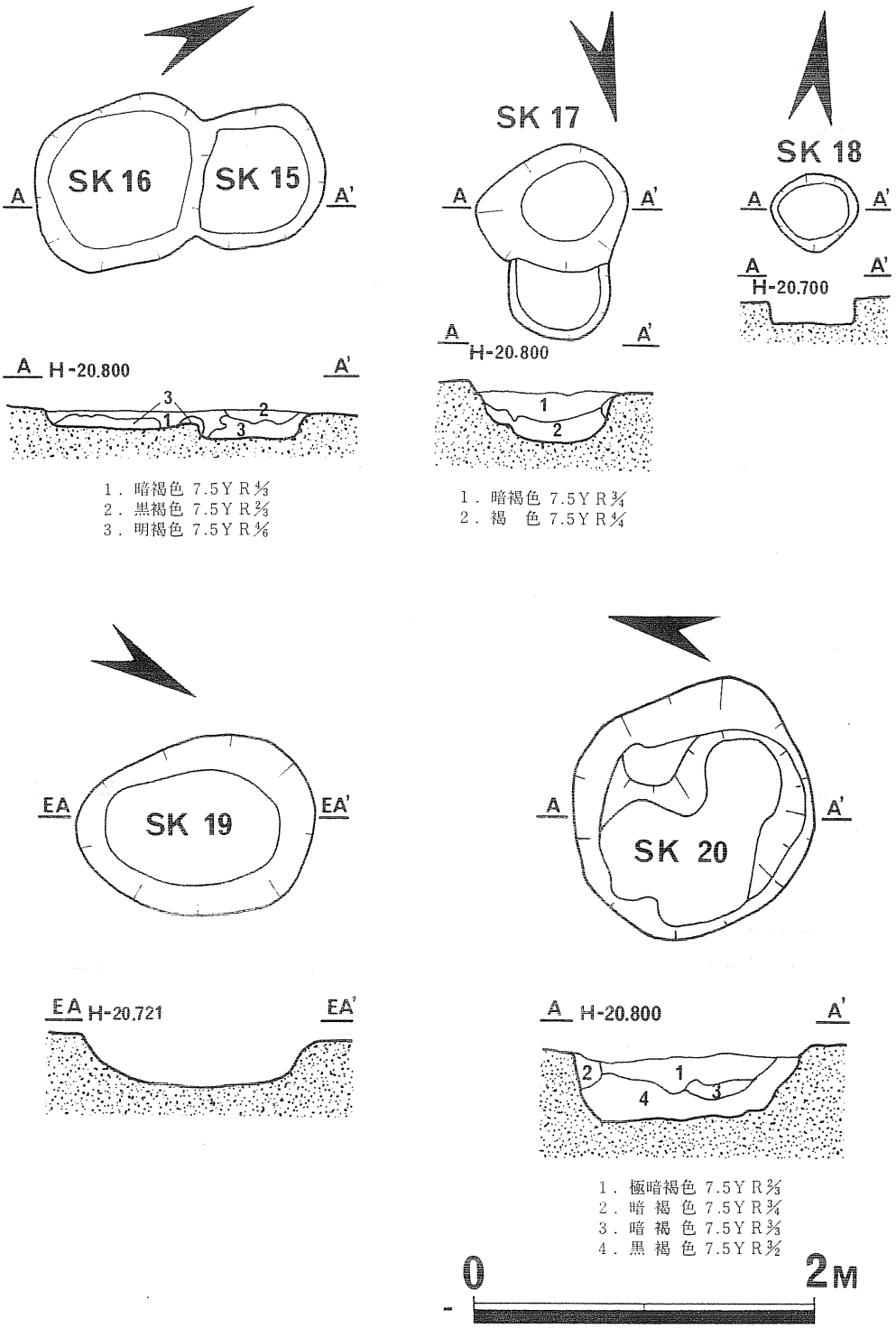
出土遺物　２層，４層から深鉢形土器Ⅰ，Ⅴ類，壺形土器Ⅰ類。

ＳＫ27・28土壙　（第33図　図版21）　重複しているが新旧関係は不明。いずれも上面形は楕円形を呈すると思われ，ＳＫ27が長軸1.1ｍ，ＳＫ28は短軸0.8ｍ。深さはいずれも浅く15cm。

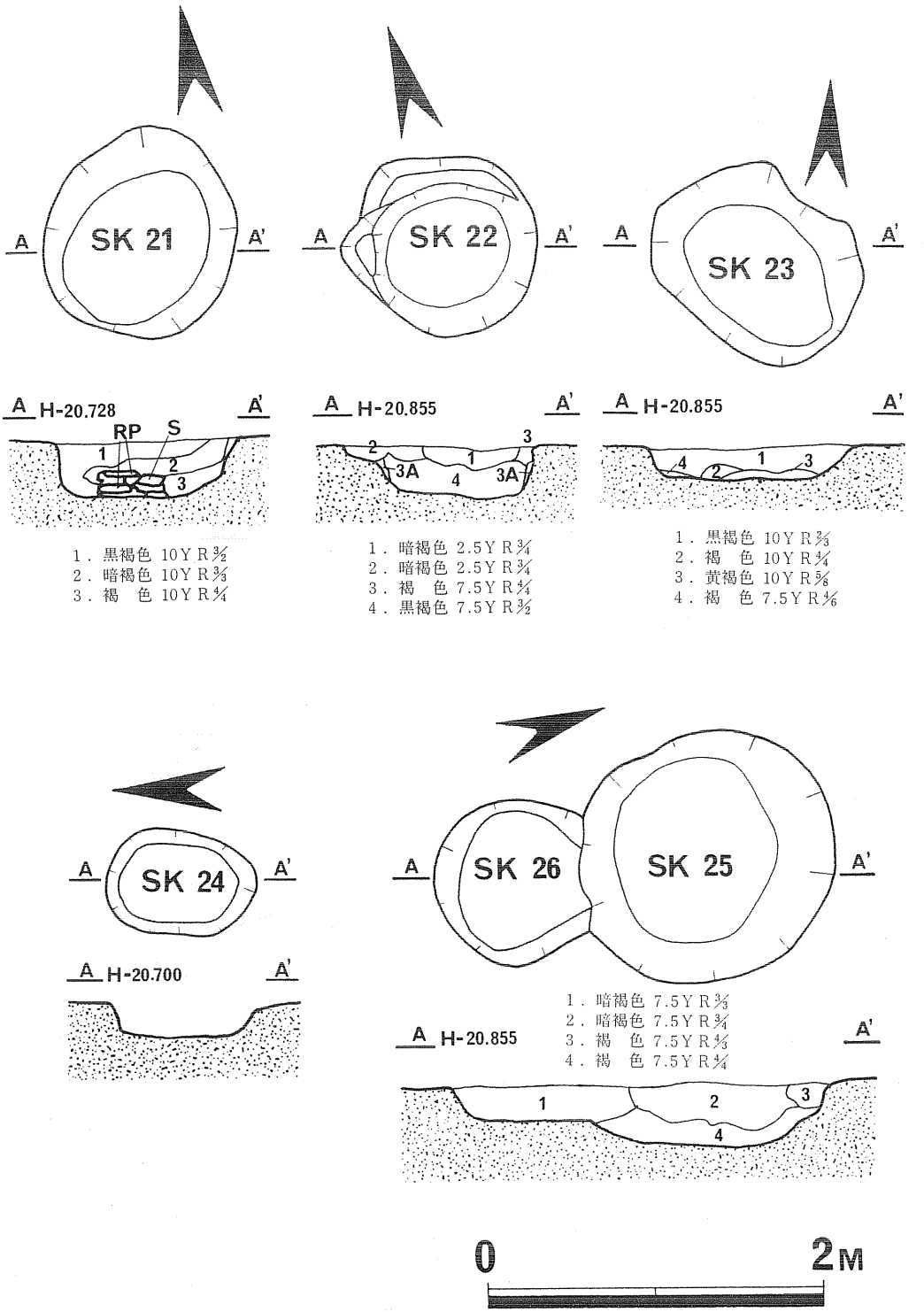
出土遺物　２層より深鉢形土器Ⅰ類。

ＳＫ29土壙　（第33図）　上壙幅１ｍの円形。深さ25cm，底面は南方向に傾斜し，中央部に少量の焼土痕跡。

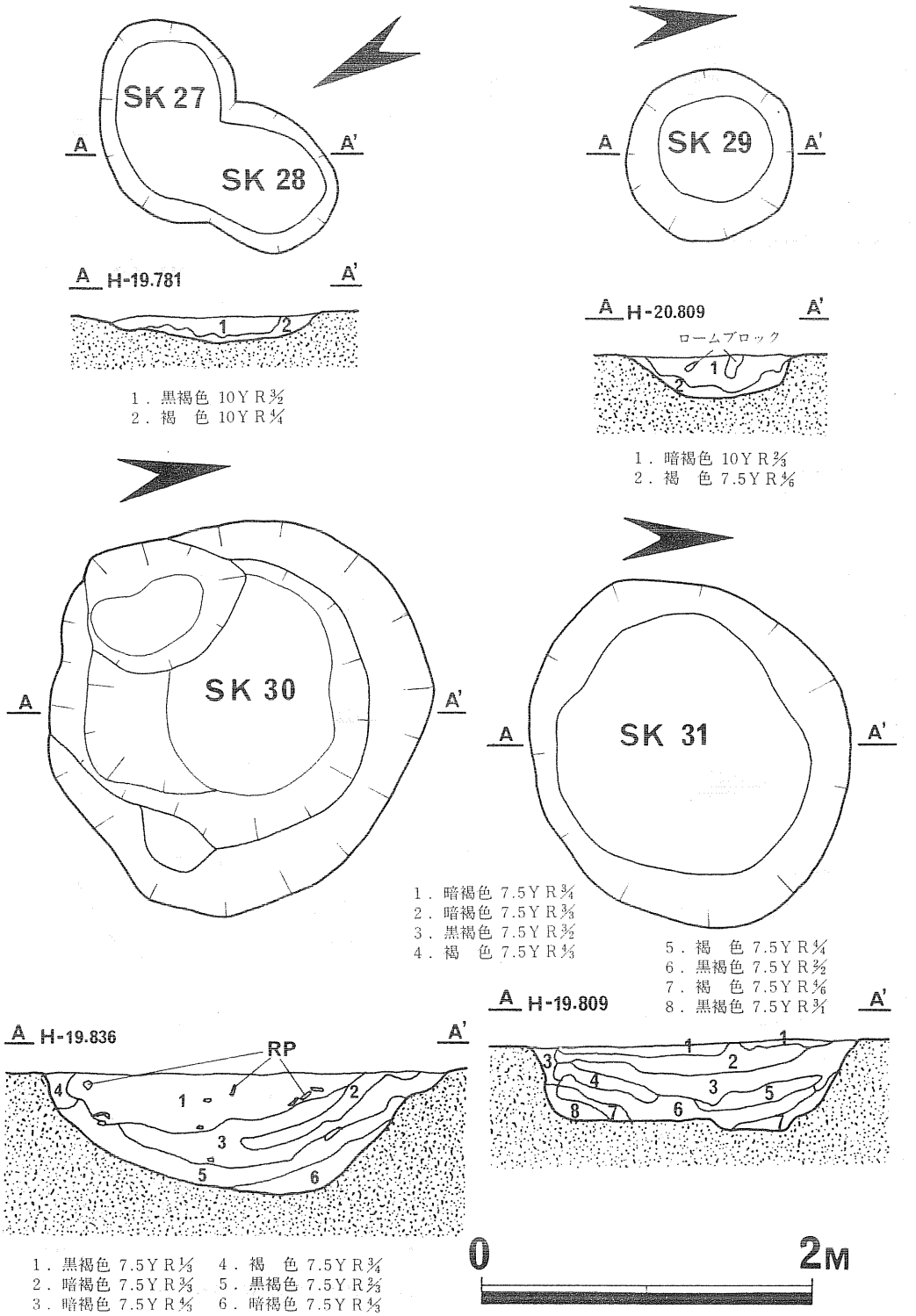
出土遺物　底面直上より壺形土器Ⅱ類。



第31図　SK15～20実測図



第32図　SK21～26実測図



第33図　SK27～31実測図

ＳＫ30土壙　（第33図　図版21）　上壙幅2.4ｍ×2.3ｍでほぼ円形。底面は北一南に向かいゆるやかに傾斜，最深部で71cm。南西部に幅１ｍ，深さ30cmの凹みを有す。底面，壁面ともなめらかで硬くしまっている。堆積土５層に焼土を含む。

出土遺物　（第51図34・36）　１，２層から深鉢形土器Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ類。出土量は多い。

ＳＫ32土壙　（第34図　図版21）　上壙幅1.0ｍ×0.8ｍの楕円形。深さ34cm。

出土遺物　１層より深鉢形土器Ⅰ類。

ＳＫ33土壙　（第34図　図版22）　上壙幅1.0ｍ×0.9ｍの楕円形。深さ32cm。堆積土下位部に少量の焼土は含む。

出土遺物　１Ａ層より深鉢形土器Ⅰ類。

ＳＫ34土壙　（第34図）　上壙幅1.5ｍ×1.1ｍの楕円形。底面は北一南に傾斜し，南面部で一段深くピット状を呈す。最深部で58cm。

出土遺物　（第52図59・102）　２層より鉢形土器底部及び土版。

ＳＫ35土壙　（第34図）　上壙幅0.8ｍの円形，底面は平坦でしまっている。深さ24cm。

ＳＫ36土壙　（第34図）　上壙幅0.7ｍ×0.5ｍの楕円形。深さ24cm。

ＳＫ37土壙　（第34図　図版22）　上壙幅1.1ｍ×1.3ｍの楕円形。壁は北面部が垂直に立ち上がるが，南面部は底面からなだらかな傾斜で立ち上がる。深さ35cm。

出土遺物　１層より深鉢形土器Ⅰ，Ⅱ類。

ＳＫ38土壙　（第35図）　上壙幅1.5ｍ×1.3ｍの不整楕円形。壁面は凹凸が激しい。深さ27cm。

出土遺物　１層より深鉢形土器Ⅰ類。出土量は少ない。

ＳＫ39土壙　（第35図）　上壙幅2.1ｍ×1.5ｍの不整楕円形。深さ19cm。

出土遺物　全層にわたり深鉢形土器Ⅰ類，壺形土器Ⅱ類。

ＳＫ40土壙　（第35図　図版23）　上壙幅1.5ｍ×1.3ｍの不整楕円形。底面は東一西に向かい傾斜，西面部で一段深く掘り凹められている。最深部で60cm。

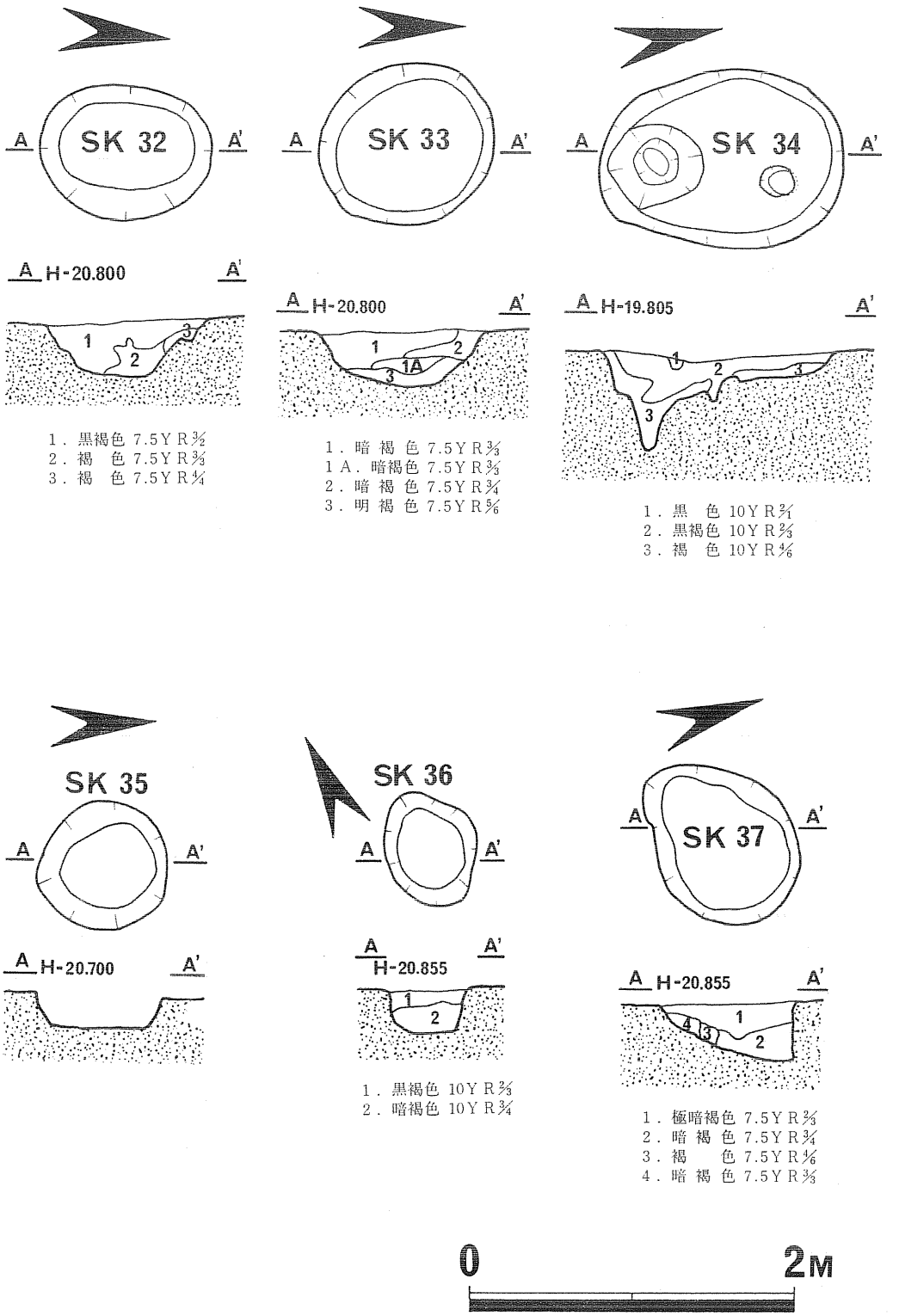
ＳＫ41土壙　（第35図）　上壙幅1.3ｍ×1.2ｍ。深さ64cm。ほぼ円筒状に掘り込まれている。ＳＫ42土壙と形態，及び掘り込み状況が類似している。

出土遺物　２層より深鉢形土器Ⅰ類。

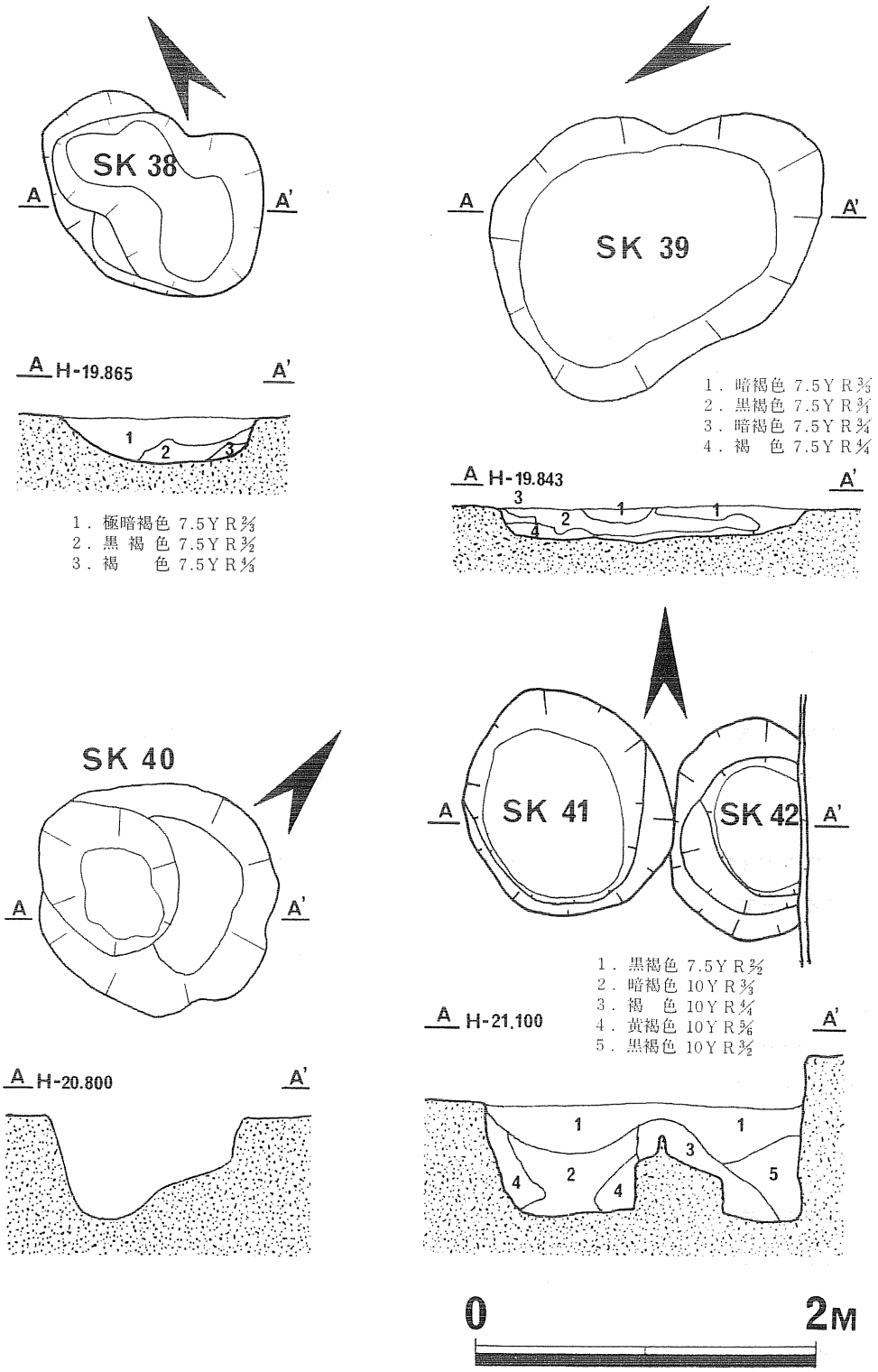
ＳＫ42土壙　（第35図）　ＳＤ03と重複し，溝が新しい。上壙幅1.3ｍ×0.6ｍの楕円形。深さ66cm。東面部は調査区外のため未確認。

ＳＫ43土壙　（第36図　図版23）　ＳＤ03と重複，溝が新しい。上壙幅1.8ｍ×1.4ｍの不整楕円形。底面は起伏が激しく，３個の凹みを有す。最深部で74cm。

出土遺物　２，３層より深鉢形土器Ⅰ類，鉢形土器Ⅰ類，壺形土器Ⅰ・Ⅱ類。



第34図　SK32～37実測図



第35図　SK38～42実測図

SK44土壙　（第36図　図版23）　上壙幅1.5m×1.2mの不整楕円形。底面は起伏があり，北面部に少量の焼土散布。深さ22cm。

出土遺物　1層より深鉢形土器Ⅰ・Ⅲ類。

SK45土壙　（第36図　図版24）　上壙幅0.9m×0.7mの不整楕円形。深さ26cm。

出土遺物　（第53図75）　主として2層より深鉢形土器Ⅰ・Ⅲ類及び鐸形土製品，1層よりアスファルト塊検出。

SK46土壙　（第36図）　SKI02と重複し，土壙が新しい。北面部は調査区外のため未確認だが，長軸0.8mの楕円形と思われる。深さ71cm。

SK47・48土壙　（第37図　図版24）　壁部で重複している。新旧関係は不明。上壙幅1m及び0.7mでいずれも楕円形。深さはSK47が23cm，SK48が44cm。

出土遺物　（第53図80）　SK47 2層より深鉢形土器Ⅰ類及び鐸形土製品。

SK49土壙　（第37図　図版25）　上壙幅1.0m×0.7mの楕円形。深さ15cm。

出土遺物　1層より深鉢形土器Ⅰ類。

SK50土壙　（第37図）　上壙幅0.7m×0.5mの楕円形。深さ27cm。

SK51土壙　（第37図　図版25）　上壙幅1.5m×1.1mで楕円形。堆積土は軟質の黒褐色土で下層部に炭化物細粒を含む。深さ35cm。

SK52土壙　（第38図　図版25）　上壙幅0.7mで円形。深さ24cm。底面は平坦で硬い。

出土遺物　2層より深鉢形土器Ⅰ・Ⅴ類。出土量は極めて少ない。

SK53土壙　（第38図）　SK52と隣接し，形状，掘り込み状況とも類似している。上壙幅1.4mでほぼ円形。底面は南－北へ緩やかに傾斜している。深さ44cm。

SK54土壙　（第38図）　上壙幅1.9m×1.4mで中央部で屈曲気味の不整楕円形。底面は鍋底状を呈し，南面部に一段深い凹みを有す。深さ44cm。堆積土全層にわたり，炭化物細粒を含む。

出土遺物　3層，4層から深鉢形土器Ⅰ・Ⅱ類。

SK55土壙　（第38図）　上壙幅1.1m×0.9mの不整楕円形。底面は南－北に向かい緩やかに傾斜，北面部で2個の柱穴状ピットを有す。深さ22cm。

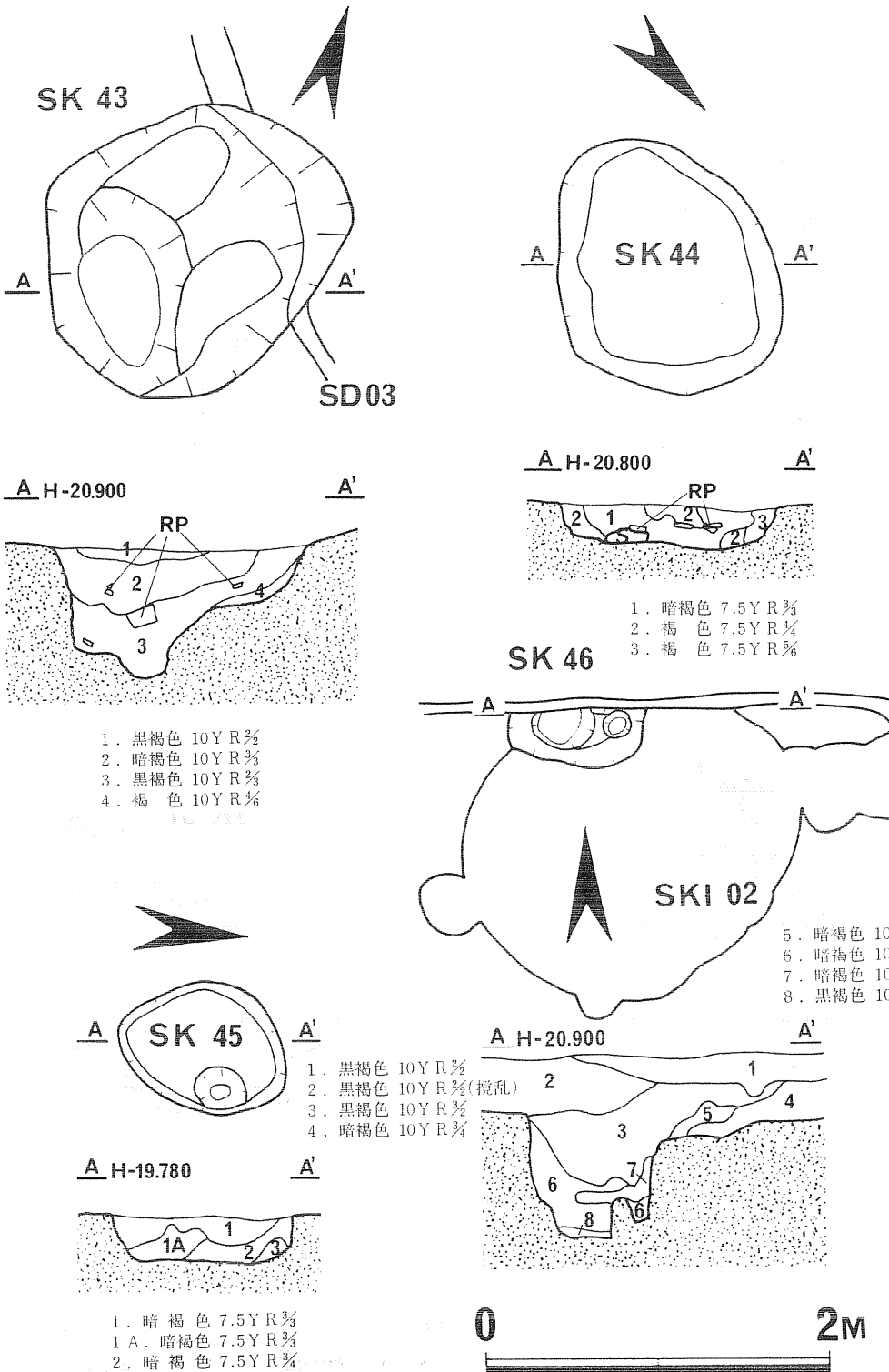
出土遺物　（第51図14・88）　全層にわたって出土。深鉢形土器Ⅰ・Ⅲ類，鉢形土器Ⅰ類，壺形土器Ⅰ類及び鐸形土製品。

SK56土壙　（第39図）　上壙幅1.2m×1.1mの不整楕円形。底面に2個の凹み。深さ24cm。

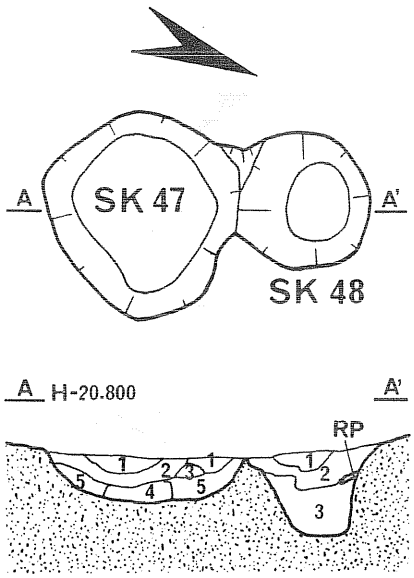
SK57土壙　（第39図）　上壙幅1.0m×0.8mの楕円形。1層に少量の焼土を含む。深さ12cm。

出土遺物　2層より深鉢形土器Ⅰ類，出土量は少ない。

SK58土壙　（第39図）　上壙幅1.4m×1.3mの不整楕円形。底面は鍋底状を呈し，堆積土全層に炭化物細粒を混入する。深さ27cm。

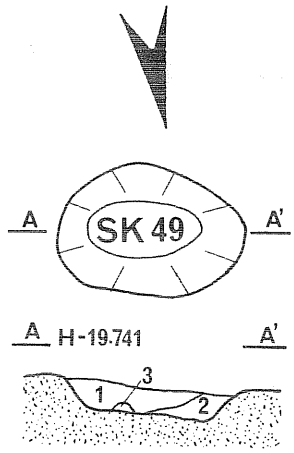


第36図　SK43～46実測図

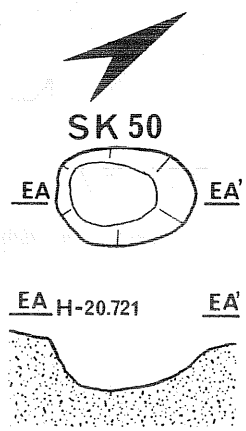


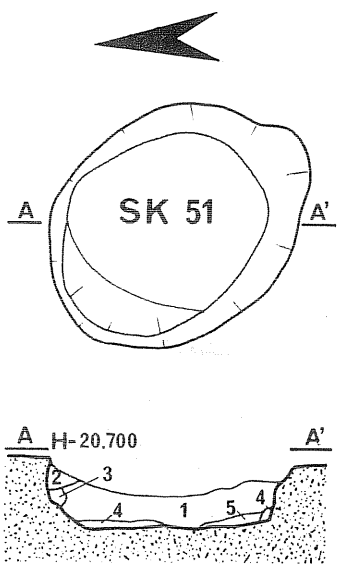
1．暗褐色 7.5YR3/3
2．黒褐色 7.5YR2/3
3．暗褐色 7.5YR4/3
4．黒褐色 7.5YR2/2
5．褐　色 7.5YR3/4

1．褐　色 7.5YR4/4
2．黒褐色 7.5YR3/2
3．暗褐色 7.5YR4/3



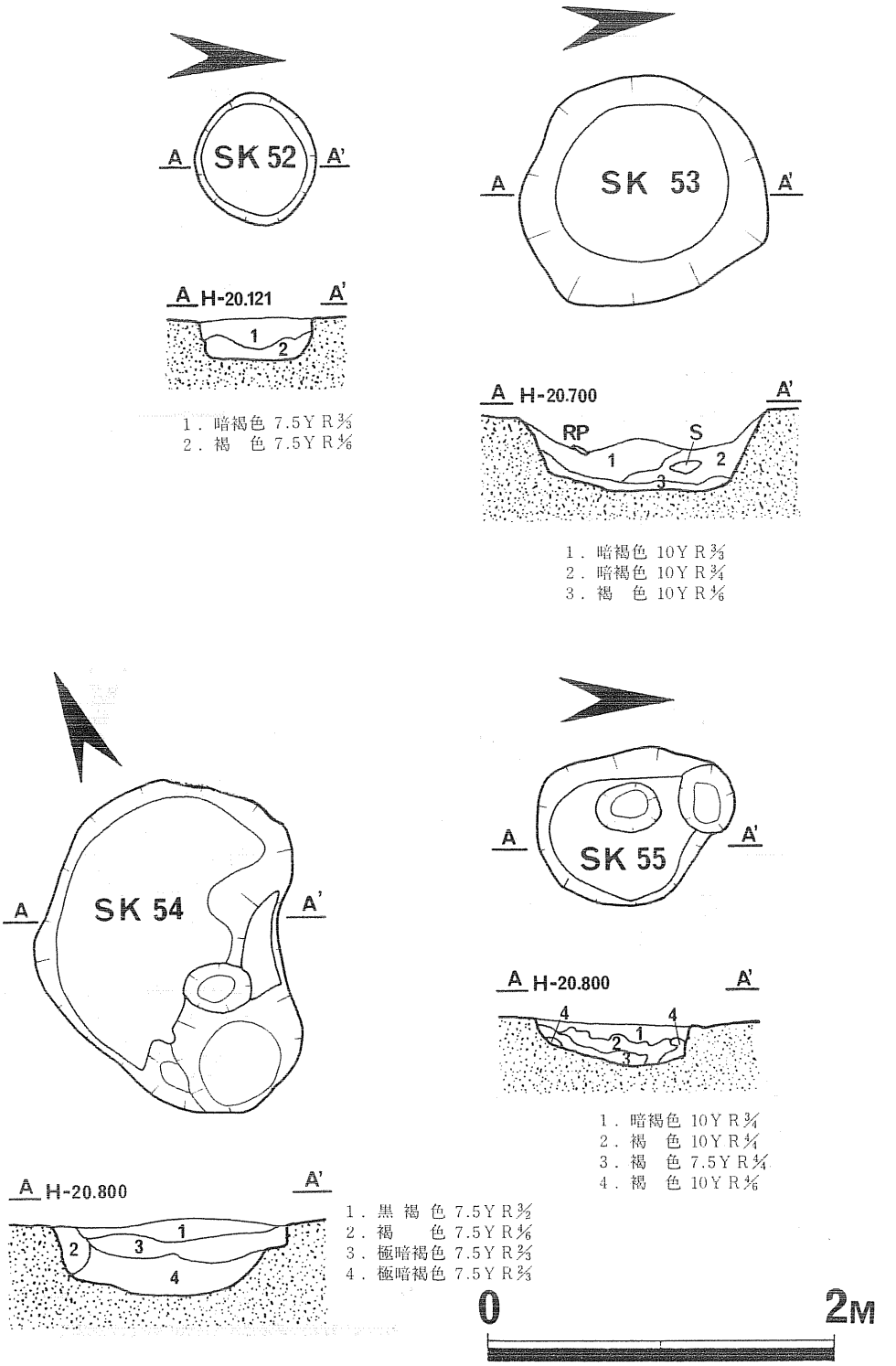
1．暗褐色 10YR3/4
2．褐　色 10YR4/6
3．黄褐色 10YR5/8



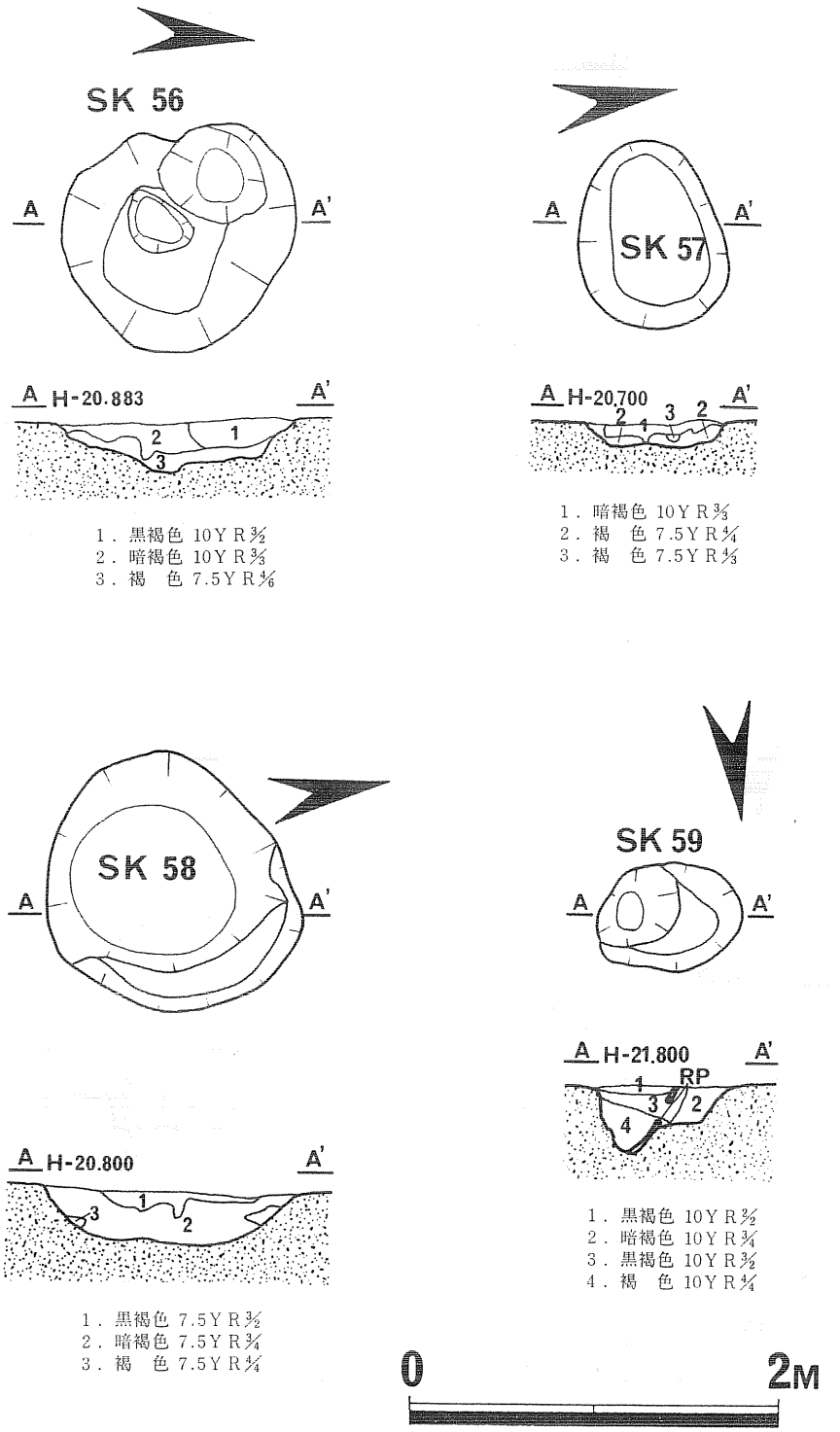


1．黒褐色 10YR3/2
2．暗褐色 10YR3/4
3．褐　色 7.5YR3/4
4．褐　色 10YR4/6
5．暗褐色 10YR3/3

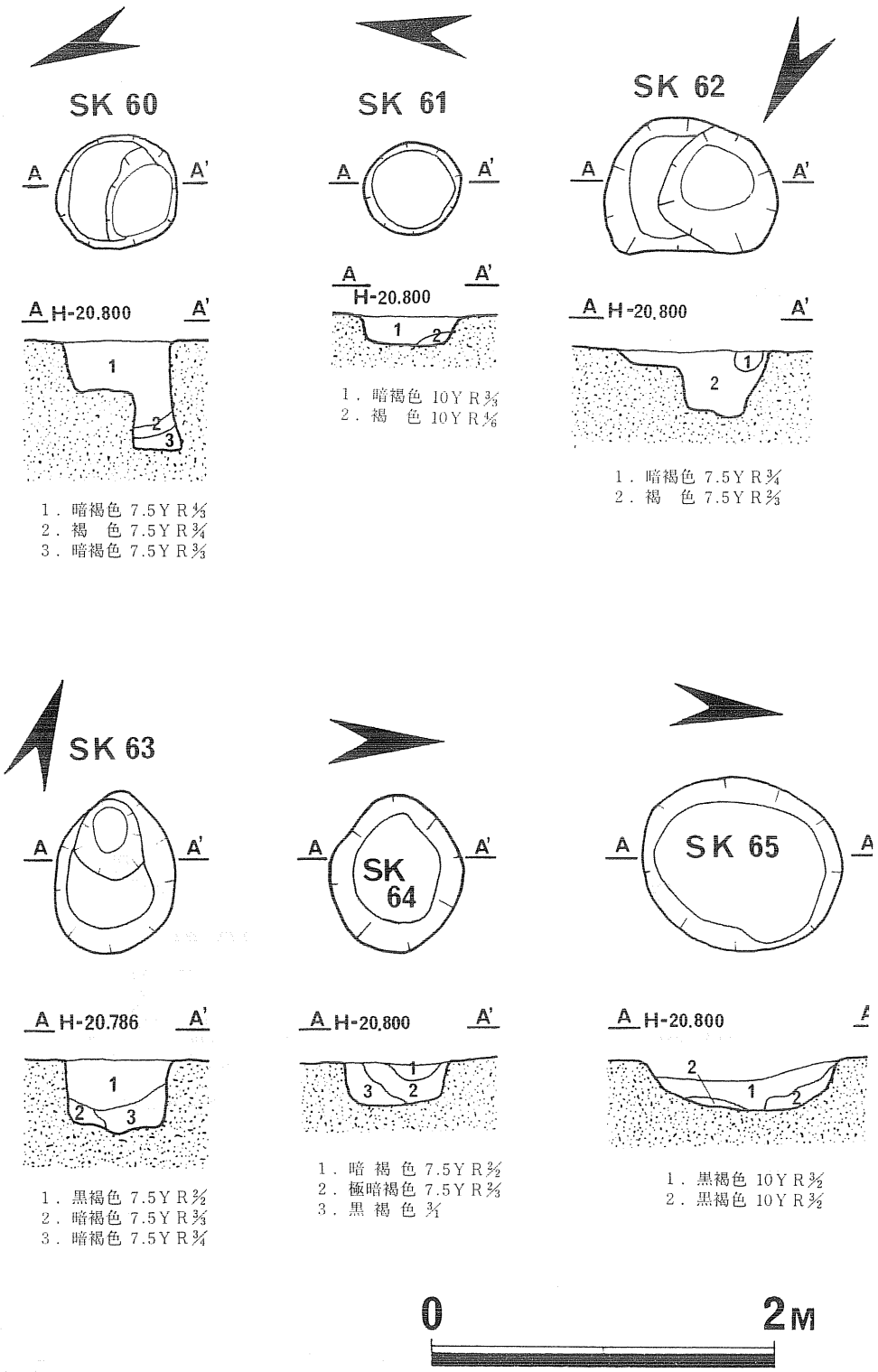
第37図　SK47～51実測図



第38図　SK52～55実測図



第39図　SK56～59実測図



第40図　SK60～65実測図

出土遺物　2層より深鉢形土器Ⅰ・Ⅴ類。

SK59土壙　（第39図）　上壙幅0.8m×0.6mの楕円形。底面は北面部に柱穴状の凹みを有す。

SK60土壙　（第40図）　上壙幅0.7mの円形，堆積土は軟質の暗褐色土からなり，焼土を少量含む。南面部で1段深く凹み，最深部は62cm。

SK61土壙　（第40図）　上壙幅0.5mの円形。深さ17cm。

SK62土壙　（第40図）　上壙幅1.0m×0.7mの楕円形。東面部で1段深く凹み，深さ38cm。

SK63土壙　（第40図　図版26）　上壙幅0.9m×0.7mの楕円形。深さ23cm。

出土遺物　1層より深鉢形土器Ⅰ・Ⅲ類。

SK64土壙　（第40図　図版26）　上壙幅0.9m×0.7mの楕円形。堆積土3層に少量の炭化物と焼土を含む。深さ23cm。

出土遺物　（第53図72・85）　2層，3層より深鉢形土器Ⅰ類及び土偶，鐸形土製品。

SK65土壙　（第40図）　上壙幅1.1m×1.0mの楕円形。底面は鍋底状を呈す。深さ32cm。

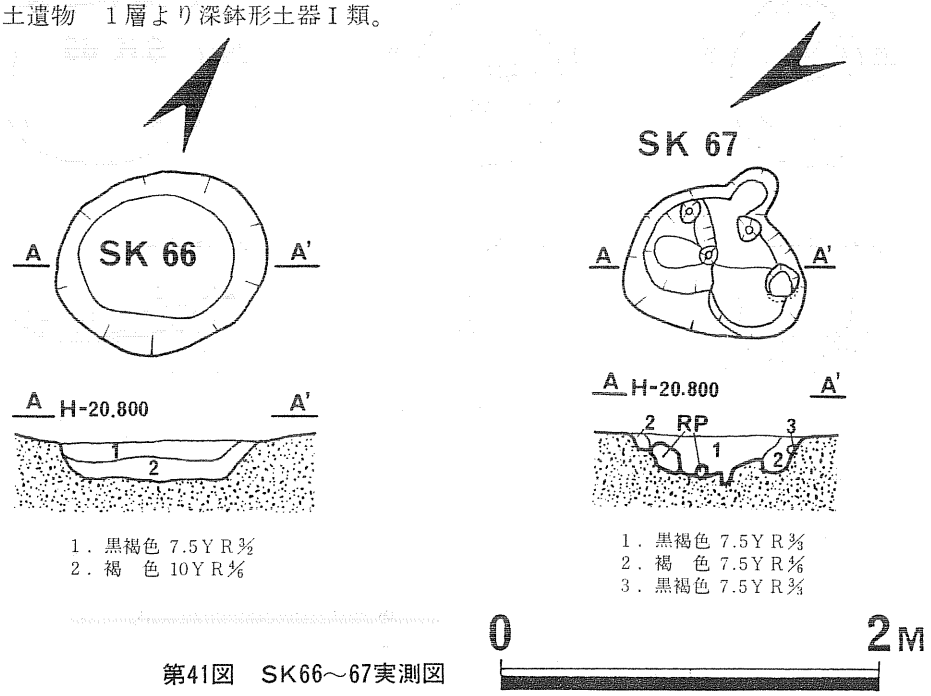
出土遺物　（第50図6）　1層より深鉢形土器Ⅰ・Ⅴ類。

SK66土壙　（第41図　図版26）　上壙幅1.1m×0.9mの楕円形。底面は平坦でしまっており，深さ21cm。

出土遺物　2層より深鉢形土器Ⅴ類。

SK67土壙　（第41図）　上壙幅0.9m×0.7mの不整楕円形。底面は凹凸が激しく，西面部ではもろい。深さ24cm。

出土遺物　1層より深鉢形土器Ⅰ類。



第41図　SK66～67実測図

③　その他の遺構

SX 01（第42図）　溝状の落ち込みが，リング状に巡る，溝は幅が30cm～70cm，深さ20cm～80cmで底面壁面共凹凸が激しい。南面部は１段深く，堆積土に焼土混入。リング内部の地山面は周囲より１段高い。自然的作用によるものか，人工的所産によるものか明確でない。

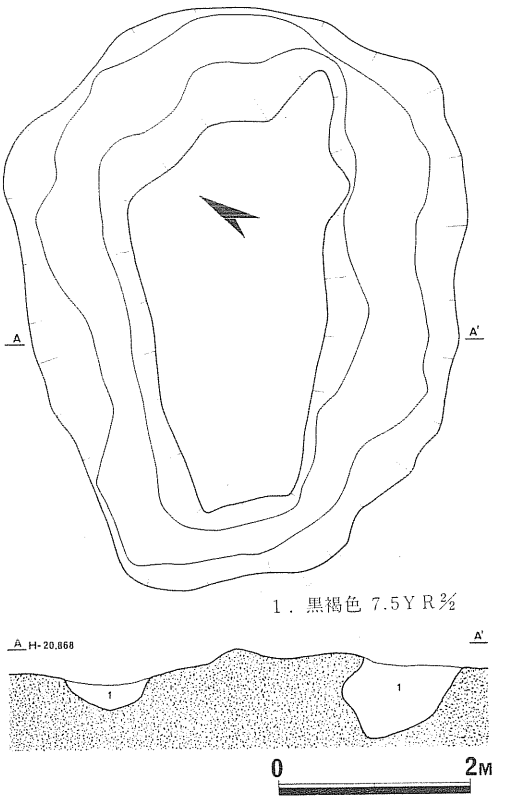
出土遺物　南面部溝内より比較的多量の縄文土器片出土。土器は鉢型土器を主とさ小量の壺形土器で，混在している。

(2)　平安時代

①　竪穴住居跡

SI 01竪穴住居跡　（第43図　図版28）

北面部は調査区外のため未確認である。平面形状は南東辺長4.9ｍ，南西辺長3.8ｍで長方形を呈すると思われる。壁部に接っし，遺構内各隅部及び各辺の中央部に柱穴を有す。壁はほぼ垂直に立ち上り，壁高は８cm～10cm，底面は平担だが南面部は比較的軟い。カマドは北西壁のほぼ中央に構築され，燃焼部は地山を約30cm掘り凹み小量の焼土堆積，煙道部及び煙り出し部は検出されなかった。カマド南面に隣接してピット検出，深さ20cm。小屋の土師器杯片検出。遺構中央部で，ＳＫ40土壙と重複しており，土堀が新しい。



第42図　SX01実測図

出土遺物　（第61図）　カマド燃焼部内，及びＰ１と遺構内南西面より出土。遺物は土師器が杯及び甕で，杯はほぼ形体を計れるものが４点出土，内１点は内面に黒色処理を施す。甕は４点出土。内２点はロクロ整形痕を留める。須恵器は２点出土，いずれも杯で，内１点は高台を付す。

SI 02竪穴住居跡　（第44図　図版29）

南西部は調査区外の為未確認である。平面形状は北辺長4.5ｍで,東辺長4.5ｍで,ほぼ正方形を呈すると思われる。壁部に接し，遺構内の各隅部及び各辺に２本づつ柱穴を有す。壁は緩く外傾して立ち上り，深さ８～20cm。床面は平担で，カマド周辺は硬くしまっている。カマドは南西壁東寄りに構築され，燃焼部のみを検出。燃焼部は地山を約28cm掘り凹んでなされ，多量の焼土と粘土が堆積している。隣接して，一面が熱化した拳大の石２個が検出されており，カマド本体は石組を芯とした粘土構築であったと考えられる。遺構内に６基のピットが検出され，

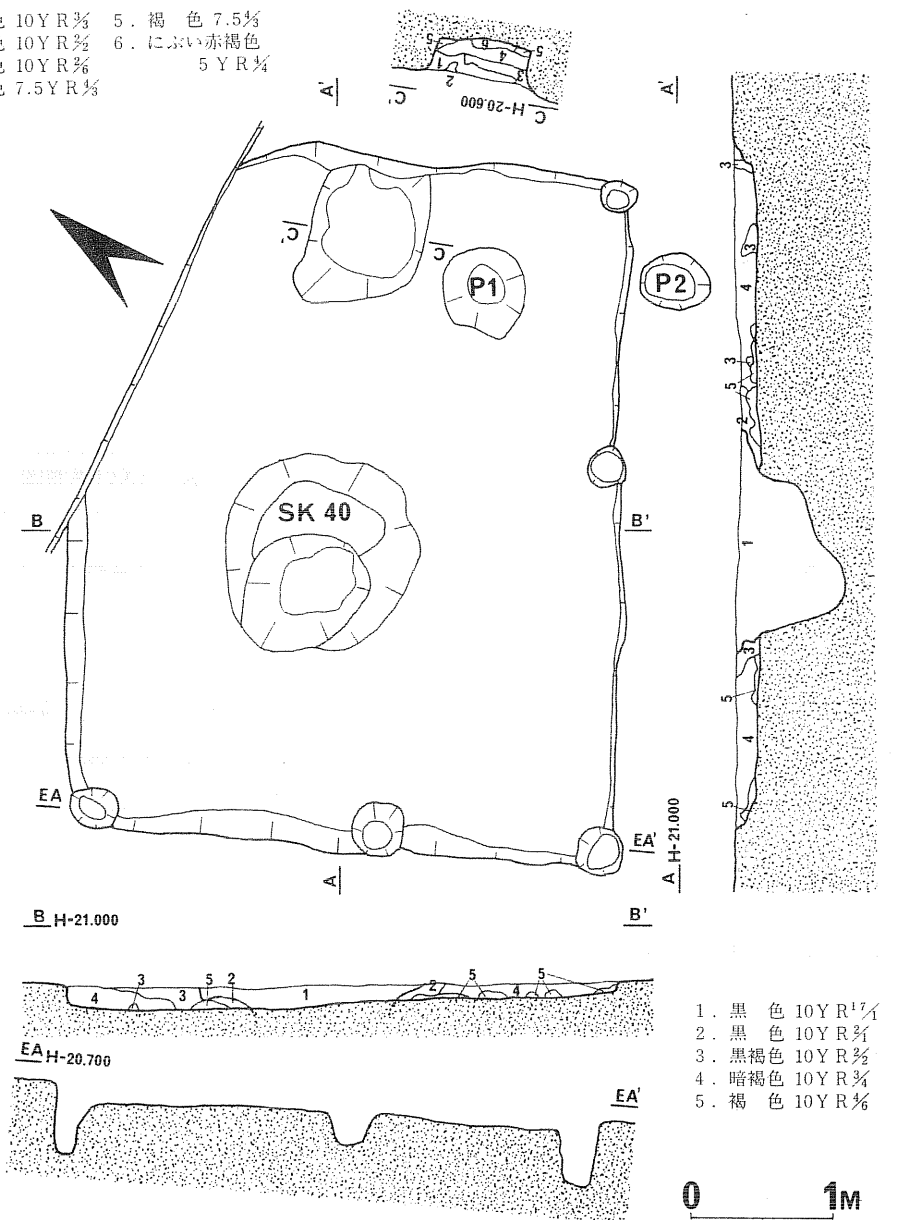
Ｐ１には多量の焼土堆積，他は堆積土全体に褐色土細粒を含む。

出土遺物　（第61図）　カヤド燃焼部内とＰ.2　Ｐ.4及び遺構内北面部から土師器杯，甕片出土。

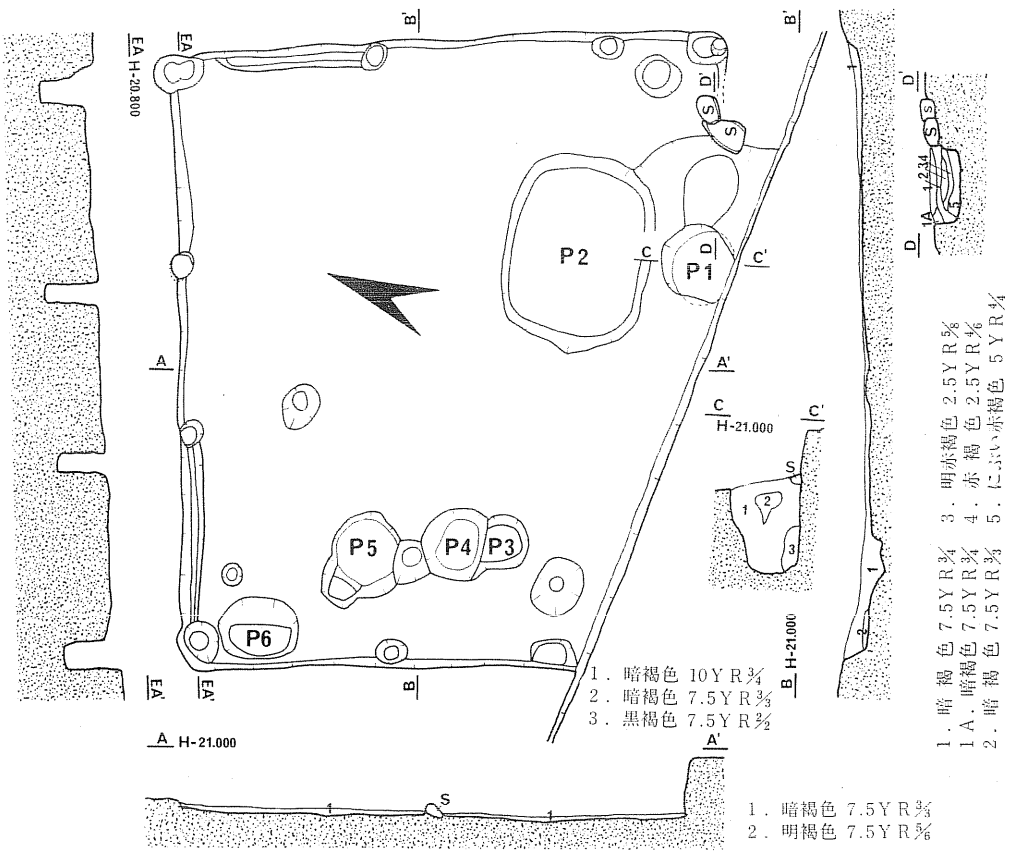
② 土壙

ＳＫ31土壙　（第33図）　平面形状は直径2.5ｍの円形を呈する。底面は擂鉢状を呈し，壁部は緩やかに外傾する。深さ72cm。堆積土は全層に褐色土を混入。

出土遺物　堆積土１層，３層より小量の土師器杯片及び須恵器甕片出土。



第43図　SI 01・SK40実測図



第44図　SI 02実測図

0　2M

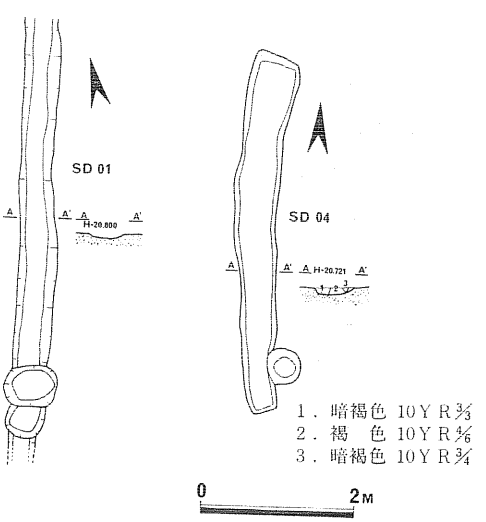
(3)　その他の時代

①　溝状遺構

４条検出された。いずれも台地を横断するように，南－北方向にのびている。SD04を除き縄文時代遺構と重複しているが，時期は溝が新しい。遺構の確認面は縄文遺構確認面より上層である。

SD01溝状遺構　（第45図）　調査区を南北に横断する。上面幅40～60cm。深さ10～15cm。一部で底面に焼土痕跡がみられる。

SD02溝状遺構　（第26図　図版27）　調査区北面部で中断しているが，表土層断面では継続延長している



第45図　SD01・04実測図

のが確認された。確認面は表土1層で，2層中位面では消滅する。上面幅60～75cm。深さ15～20cm。

SD03溝状遺構　（第26図　図版27）　調査区北東部で，南東－北西方向にのびる。SD02と重複し03が新しい。上面幅20～30cm。深さ15～20cm。

SD04溝状遺構　（第45図）　東西にのびるが南，北端部分は途切れている。上面幅55～70cm。深さ15～20cm。

2．出土遺物

(1)　縄文時代

①　**土器**　土器の器形は，深鉢形・壺形・鉢形であり，深鉢形がもっとも多い。これらの土器は，十腰内Ⅰ式に比定されるものである。

A．深鉢形土器　深鉢形土器には，大小・口縁のつくり・文様などバラエティに豊むが，施文された文様によって，5類に分類した。

1類　（第49図1～4・第51図12～43）　沈線文を直線的・曲線的に施文する類。第49図3は，小型で高さ13.5cm，口径13.8cm，底径6.0cmを測る。この土器は平縁であるが，口唇部を指で上から押し，凹みを作出している。口縁部はわずかに外反する。文様は，「の」字風の入組文を主体とする沈線文である。第51図12～14も平縁の土器である。第49図1・2と第51図15～28は，波状口縁の土器である。波頂部が凹むものや，波頂部に刺突文のあるものもある。また波頂部に短い隆帯を縦位に貼付する土器もある。文様は大型土器の場合，多段化する傾向を窺うことができる。第49図2は，「の」字風の入組文を主体とする沈線文を横位に施文する例であり，第49図1は，沈線による楕円形文や三角形文を施文する例である。

2類　（第51図27・29）　磨消縄文を施文する類。この類は僅少である。全体的には平縁であるが，低い突起を有する。文様は，地文である斜行縄文（LR）を沈線で区画し，内部を磨消している。「の」字風の入組文が主体をなすものと考えられる。

3類　（第49図5・第51図30～34）　網目状撚糸文を施文する類。撚糸文が沈線文のものもある。口縁部のつくりは，隆帯を貼付し折り返し風に肥厚させるものと，そうでないものがある。第49図5は，頸部がすぼみ，口縁部が外反する器形である。口縁部は，6単位の頂部を有する波状口縁であり，肥厚する。文様は沈線文を網目状に施文している。内面のみがきが顕著である。頸部から胴部の外面は，二次火熱のため赤色変化している。頸部外面と胴部内面に炭化物が付着している。器高21.5cm。

4類　（第52図35～40）　沈線文と網目状撚糸文の施文される類。撚糸文が沈線文になっているものもある。1類土器と3類土器の文様が融合したものである。口縁のつくりは，平縁と波状のものがある。

5類　（第50図6・第52図41～43）　撚糸文の施文される類。撚糸文が沈線文になっている

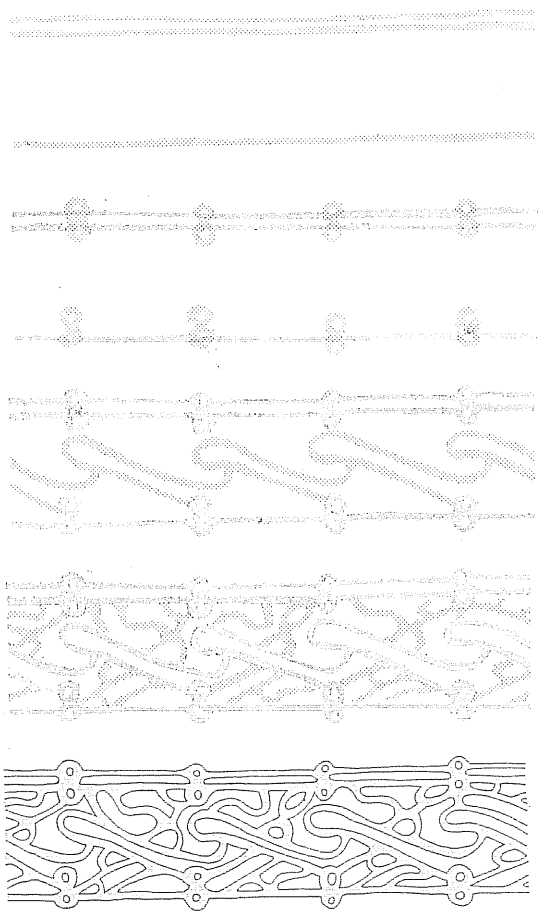
ものもある。口縁は平縁である場合が多いようである。

Ｂ．壺形土器

１類　（第50図11・第52図44～48）　低平な隆帯を貼付し，沈線で縁どりする類。隆帯を貼付する例は，壺形土器に多い。第50図11は，最大径が胴下半部にあり，外反する口縁部をもつ土器である。文様は隆帯と沈線文による入組文が主体であり，口縁部上半と胴部に展開する。胴部の文様施文順序（第46図）は，（１）上２本・下１本の隆帯で上下幅を決定する。（２）「８」字文で４区画（区画位置は口縁部のそれに対応）する。（３）４区画それぞれを波頭状の隆帯で充塡する。（４）残りの空間を曲線状の隆帯で充塡する。（５）隆帯を沈線で縁どりする。（６）隆帯上に化粧土を塗る。なお，胴部内面に炭化物が付着している。器高23.5cm・胴部径20.0cm。

２類　（第52図49・50）　沈線文が施文される類。

３類　（第52図54）　沈線文と刷目状文が施文される類。



第46図　文様の施文順序

４類　（第52図51・52）　磨消縄文が施文される類。

Ｃ．鉢形土器　（第50図７～10・第52図53・55～65）

１類　沈線文を施文する類。第50図８は，胴部が内弯気味に立ち上がり，口縁部が外反する。内外面のみがきが顕著である。第50図７は，胴部が直線的に立ち上がり，口縁部が内反する。内外面のみがきが顕著である。これらの土器文様は，（１）２本を１単位とする沈線文で上下幅を決定し，（２）内部を「８」字文か「Ｕ」字文で４区画する。（３）さらに，３本を１単位とする直線か曲線の沈線文で充塡する。第50図９・10は小型であり，前二者とは，用途を異にするものと考えられる。文様の施文手法は類似する。

２類　（第52図63～65）　磨消縄文を施文する類。

②　土偶・土製品

土偶　（第53図66～74）　66～69は土偶の頭部である。頭部は板状であり，眉・鼻を隆帯で，目・耳・鼻穴・口を刺突文で表現している。70～74は胴部であり，70と71には，乳房を表現したと思われる粘土塊の貼付が認められる。70～73の表裏には，沈線文が認められる。

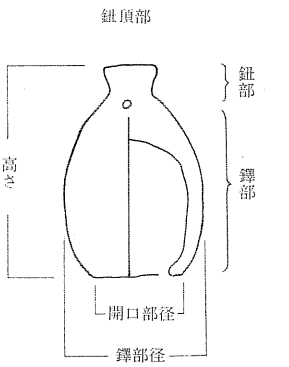
鐸形土製品　（第53図75～88・第54図89～93）　鈕部と鐸部の断面形をもとに分類し，さらに，鈕頂部の形状によって細分した。個々の観察結果は，第１表のごとくである。

１類　（第53図75～79・93）　鈕部・鐸部の断面形は，いずれも楕円形を呈し，鈕頂部の平面形も円形である。

２類　（第53図80～87）　鈕部の断面形は楕円形をなし，鐸部のそれは円形を呈する。（ａ）　鈕頂部が平坦である。（ｂ）鈕頂部が凹形を呈する。（ｃ）　鈕頂部が凸形を呈する。

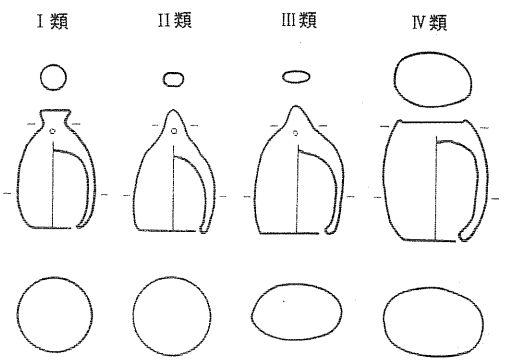
３類　（第53図88・89）　鈕部・鐸部の断面形は，いずれも楕円形を呈する。（ａ）　鈕頂部が凹形を呈する。（ｂ）　鈕頂部が凸形を呈する。

４類　（第54図90）　鐸部は楕円形を呈するが，鈕部を有しない。



第47図　鐸形土製品の各部位の名称と計測位置

鐸形土製品の各部位の名称及び図示（第47図）は，孔に紐を通して吊した状態を想定して行っている。しかしながら，こうした使用法は確定できない。使用法（機能）については，内面に付着したスス状炭化物が，大きな意味を持ってくるものと思われる。真壁地遺跡Ｄ区の場合，19個のうち14個にスス状炭化物が付着している。



第48図　鐸形土製品の分類(模式図)

三脚土製品　（第54図94・95）　全体の形状は二等辺三角形を呈し，身は湾曲している。３辺とも内方向への曲線を呈し，そのうちの一辺の曲線は緩い。95は２辺の直線距離が6.5cm，１辺のそれが7.2cmを測る。表面には，各辺に沿って数本の沈線文が施文されている。裏面は無文である。94は２辺の直線距離が5.0cm，１辺のそれが7.2cmを測る。表面の文様は，各頂部に渦巻状の沈線文を，直線状を呈する辺の中央部にも渦巻文か円形の沈線文を施文している。

有孔土製品　（第54図96）　全体の形状は楕円形を呈する。長軸4.1cm・短軸3.0cm・中央部の厚さ1.1cm。両面と側縁に沈線文が施文されている。中央に孔が認められるが，両面からの刺突の方向がずれたため，貫通していない。長軸の両端には刺突文が施文されている。

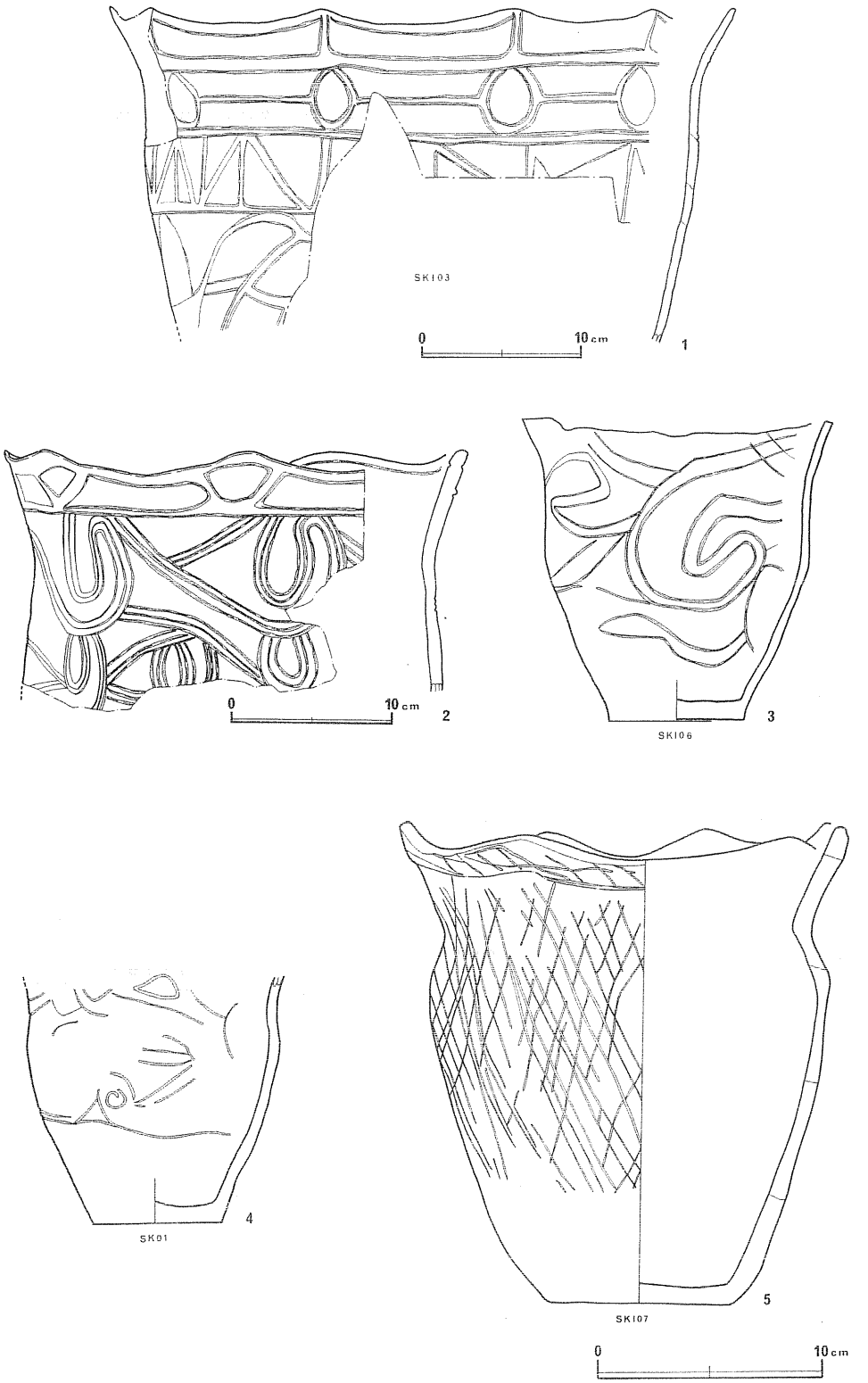
板状多孔土製品　（第54図97）　欠損品であるため，全体の形状は不明であるが，隅丸長方形を呈するものと思われる。１列４個の孔を，横位に３列認められる。

円盤状土製品　（第54図98・100～102）　98は直径4.0cm，厚さ1.1cmの円盤状を呈する。両面，側縁とも無文である。100～102は土器片を円形にトリミングしたものである。

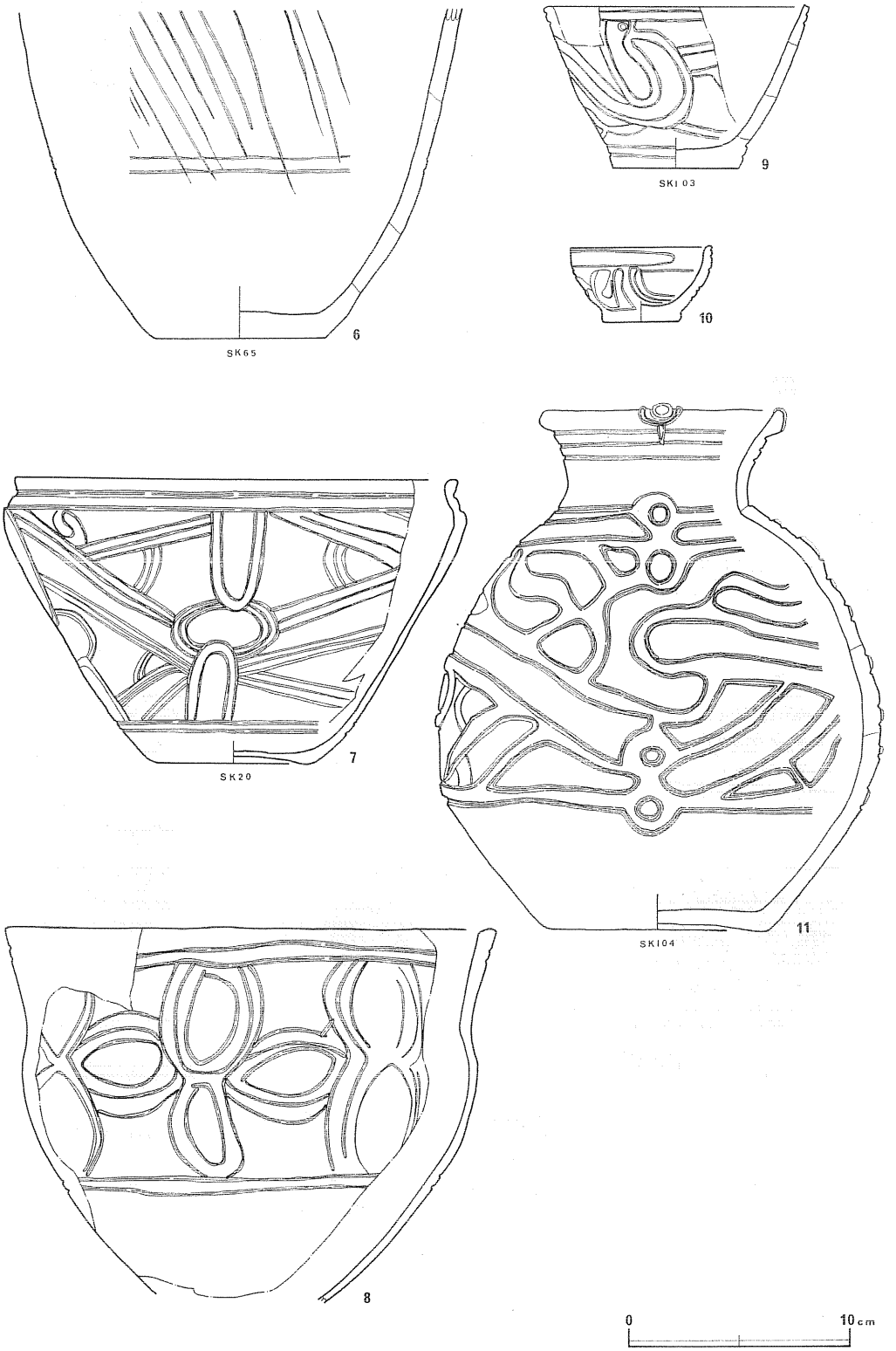
ミニチュア土器　（第54図99）　高さ1.7cm，口径1.9cm。丸底である。

番号	出土遺構等	計測値			文様・その他	スス付着	分類
		高さ	開口部径	鐸部径			
		cm	cm	cm			
75	S K 45	——	——	4.7	鐸部には２本を１単位とする沈線文を施文。 鈕部には縦方向・横方向の２孔あり。	○	I
76	S K I 02	4.2	2.8	3.5	鐸部には２本を１単位とする沈線文を施文。 鈕部には横方向の孔あり。	○	I
77	S K I 03	5.3	3.0	3.9	鐸部全体に沈線文と刺突文をていねいに施文。 鈕頂部にも円形の沈線文。横方向の孔あり。	○	I
78	S K I 05	——	——	——	鐸部と鈕頂部に沈線文を施文。横方向の孔あり。	○	I
79	II　層	5.7	2.8	4.4	全体に横位の沈線文を施文。横方向の孔あり。	○	I
80	S K 47	5.1	3.3	4.7	鐸部と鈕部に沈線文を施文。横方向の孔あり。	○	IIa
81	II　層	——	——	——	鐸部に沈線と刺突文を施文。横方向の孔あり。	×	IIb
82	II　層	——	——	——	無文。 鈕部の孔なし。	×	IIb
83	II　層	5.3	3.0	4.5	鐸部に沈線文を施文。 鈕部に横方向の孔あり。	○	IIc
84	II　層	——	——	——	鐸部に沈線文を施文。 鈕部に横方向の孔あり。	×	IIc
85	S K 64	——	——	——	鈕頂部から鐸部にかけて，沈線文を施文。 横方向の孔あり。	○	IIc
86	II　層	5.3	2.8	3.9	無文。 鈕部に横方向の孔あり。	○	IIc
87	II　層	5.4	——	4.1	無文。 鈕部に横方向の孔あり。	○	IIc
88	S K 55	7.1	2.1×4.0	3.4×5.3	鐸部に沈線文と刺突文を施文。 鈕部に横方向の孔あり。	○	IIIa
89	S K I 03	——	——	——	鐸部に沈線文と刺突文を施文。 鈕部に横方向の孔あり。	○	IIIb
90	S K I 02	6.0	2.3×2.6	5.0×5.3	開口部・鐸部に隆帯を貼付し，その上に刺突文を施文。 鐸部には沈線文を施文。孔は鐸部上端の隆帯にあり。	×	IV
91	II　層	——	——	——	鐸部に沈線文を施文。	○	—
92	II　層	——	——	——	鐸部に沈線文を施文。	○	—
93	II　層	——	——	——	鐸部に沈線文を施文。 鈕部に縦方向の孔あり。	×	I

第１表　鐸形土製品観察表

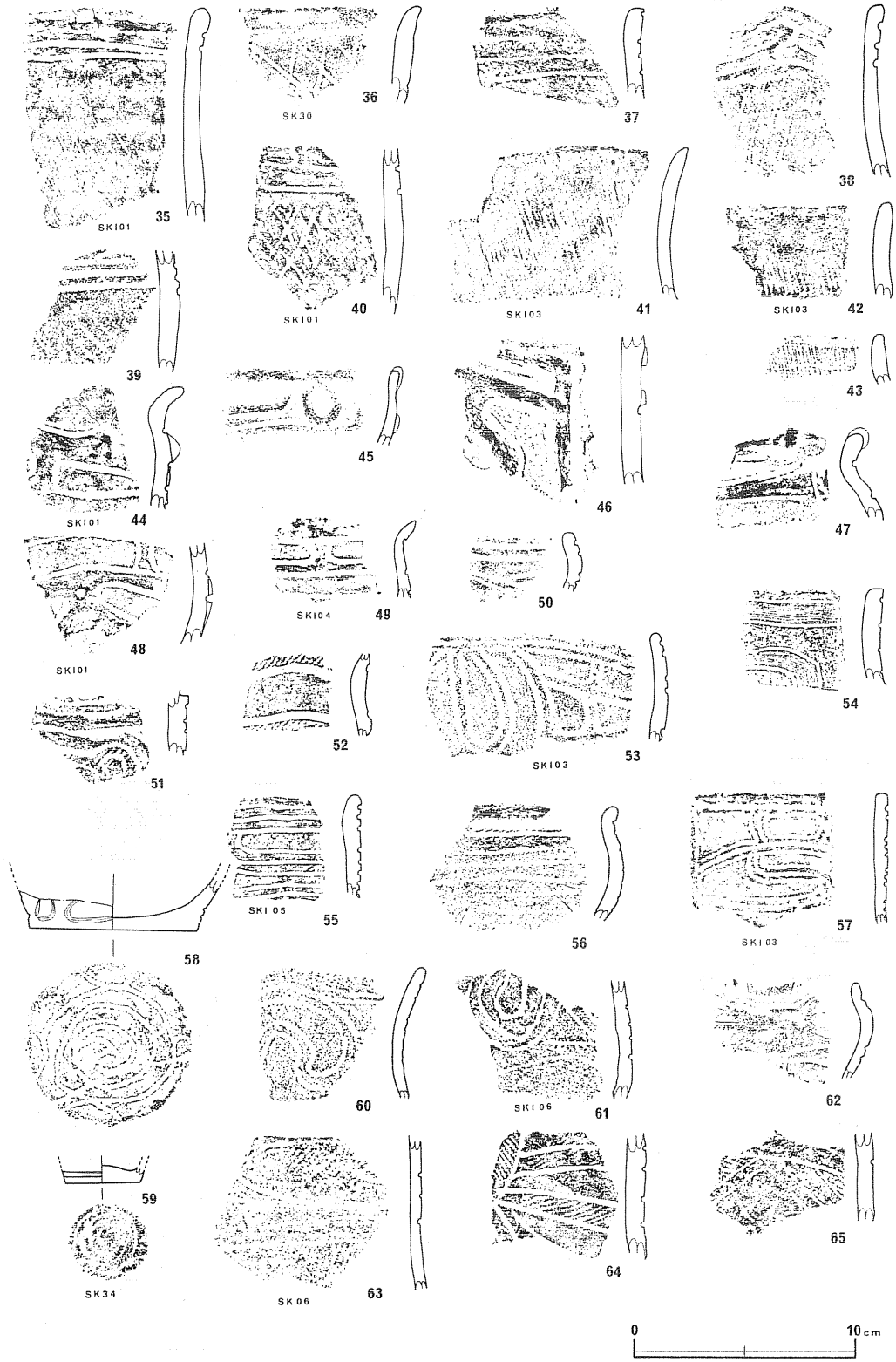


第49図　D調査区出土遺物(縄文土器1)

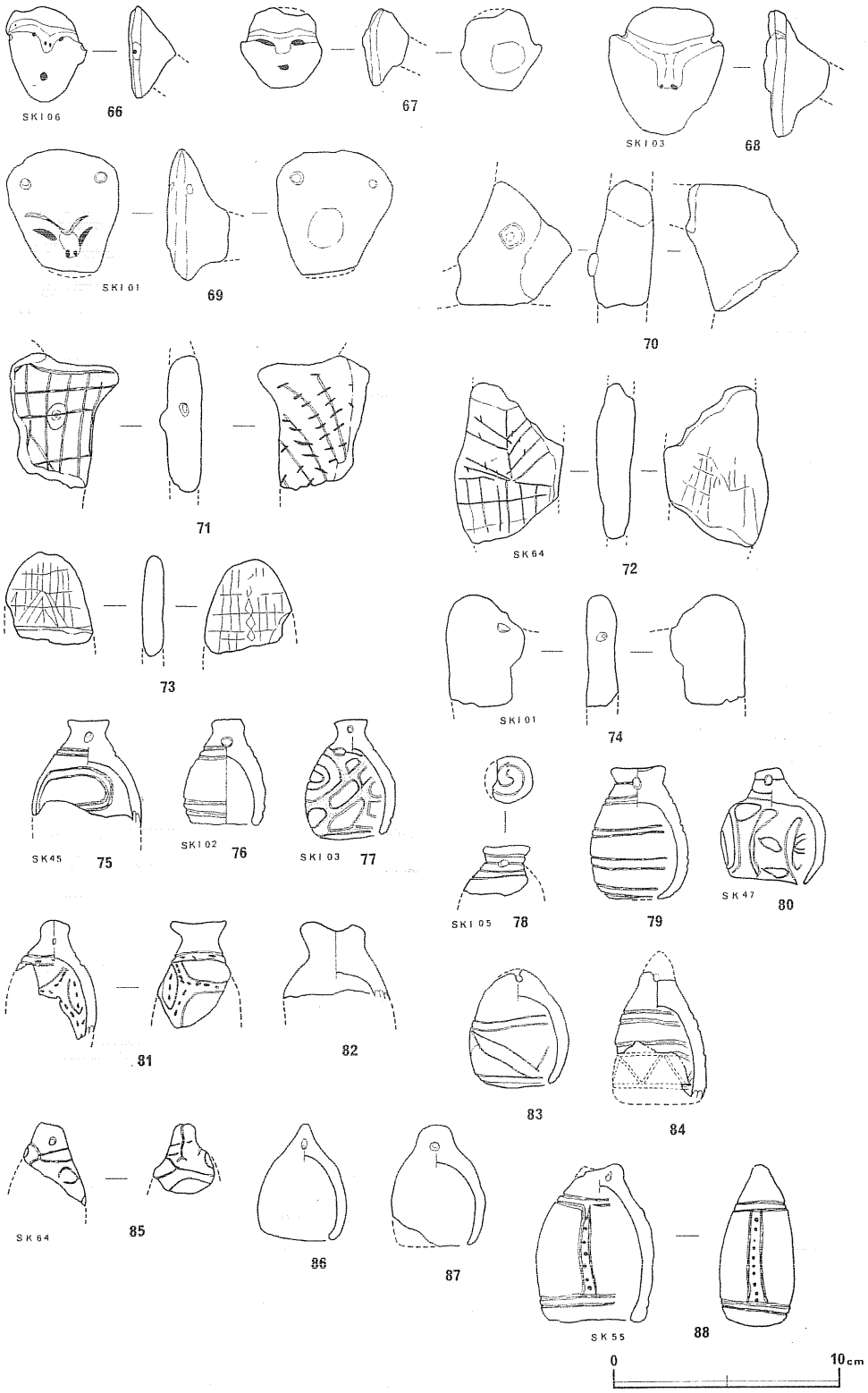


第50図　Ｄ調査区出土遺物(縄文土器２)

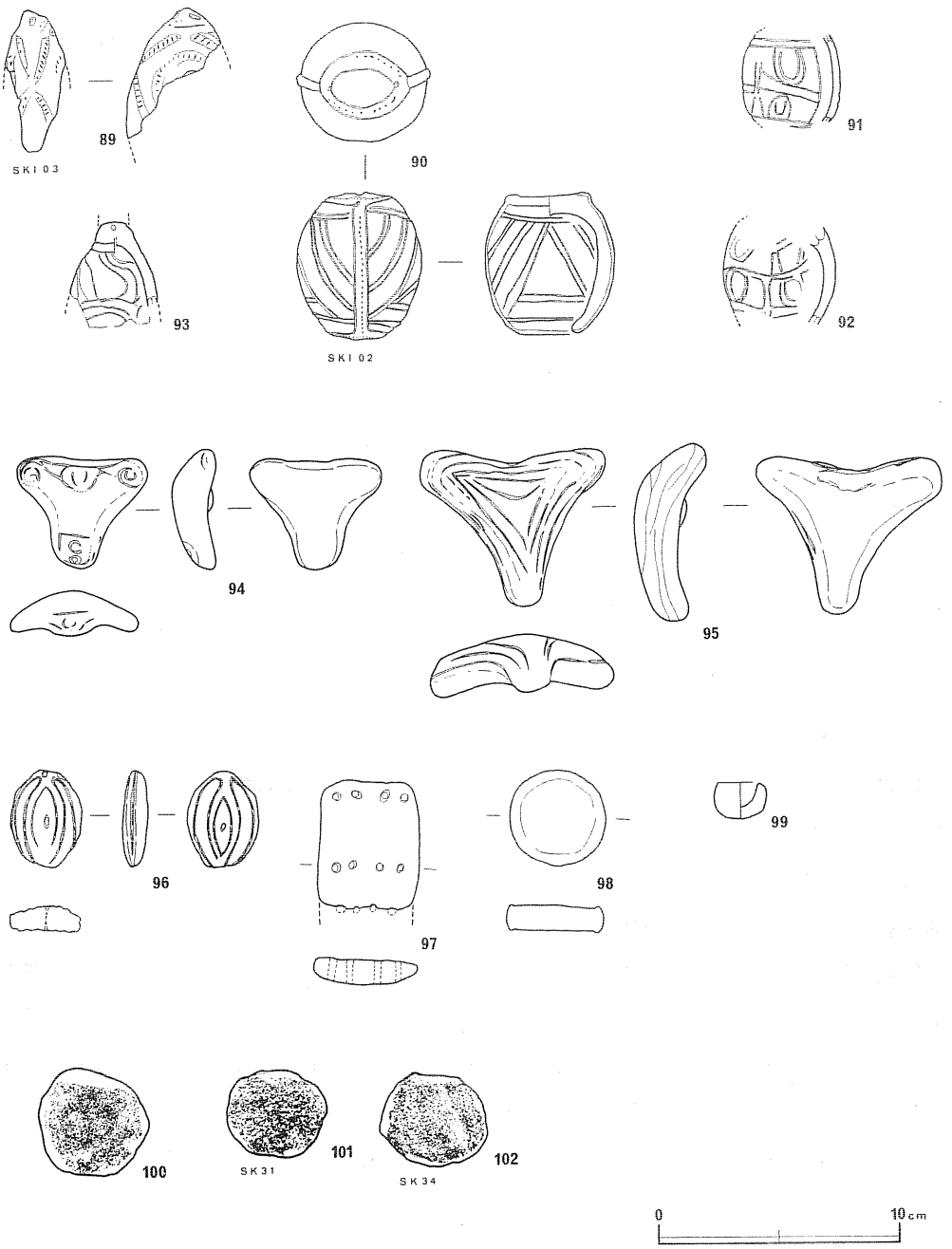
第51図　D調査区出土遺物(縄文土器３)



第52図　Ｄ調査区出土遺物（縄文土器４）



第53図　D調査区出土遺物(縄文時代—土偶・土板・鐸形土製品)



第54図　Ｄ調査区出土遺物(縄文時代―鐸形土製品・三脚土製品・有孔土製品・板状多孔土製品・円盤状土製品・ミニチュア土器

③ **石器**　（第56図～第60図）　D区で計625点の石器が出土している。主な石器の分布様子を示したのが第55図であるが，台地縁辺で多く出土していることがわかる。この他に有孔石製品（第58図86）や石剣（4点），石刀（4点）などの石製品がある。実測図は紙数の都合上，遺構内から出土したものを主体とし，器種ごとの点数については第2表にまとめた。文章中の（ ）内の番号は石器の実測図における通し番号である。石材は磨製石斧は緑色凝灰岩，安山岩，花崗岩で，凹石，石皿などは安山岩，その他の大部分が頁岩で，わずかに黒曜石が入る。

石鏃　基部の形態の違いから4つに分類される。A(1)－基部が若干膨らみ全体として柳葉形を呈する。Dに比べて薄手で石材は全て黒曜石である。B(2)－基部が平らで全体に平べったい。C（3～7）―茎を有するもので細身のもの(3)，ずんぐりと大きいもの(7)などがある。D(8)－Aに似ているが，中心部の断面は菱形に近いものである。

石錐　石鏃，石匙状石器，掻器などのいわゆる定形的な石器の出土量にくらべつまみ部を有する整った形の石錐は全くない。本遺跡の石器の石器組成の特徴の1つである。

匙状石器　つまみのつき方によって2つに分類できる。A－いわゆる縦形である。①（11・12）－先端部が直線的で，全体の形状が細長い短冊形となる。②（13・14）－先端が尖っているものである。B－いわゆる横形である。①（15～17）－中央部につまみ部があり，ずんぐりしている。②(18)－つまみ部が斜上につくものである。

石槍　出土量は少ない。A(19)－細長く全体の形状が柳葉形でていねいな作りのものである。B(20)－全体的にずんぐりした形をしている。

掻器　やや厚手の縦長及び不定形の剥片を用いて，先端に主要剥離面からの加撃によって刃部を作出している。A（21～25）－刃部が直線的で両側辺の一部まで加撃の及んでいるものである。B（26～28）－刃部が直線をなし，刃の角度が90°に近いもの。C（29～31）－刃部が丸味を持つもの。D(32)－円形の掻器である。

箆状石器　いわゆる石箆と呼称されている石器で，形態により5つに分類できる。刃部が片面加工（33・34）のものと，両面加工(35)のものがある。B（36・37）－平面形が二等辺三角形(37)のものと，洋ナシ形(36)のものがある。C（38・39）－平面形が短冊形のものである。D(40)－小形で断面が凸レンズ状を呈し，ずんぐりしている。E－その他。

石錐状石器　やや縦長の不定形の剥片の一端を主に主要剥離面からの加撃によってのみ尖らせた石器である。従って石錐でいう錐部にあたる部分の断面は三角形となっている。削器様石器と似かよっているものもあるが，定形的な石錐のない本遺跡にあって量的にも多く，特徴的な石器である。錐部の尖り方によってA（41～46），B（47～51）に分類できる。

削器様石器　主に主要剥離面からの加撃によって，縦長，不定形の剥片に直線的な刃を作出した石器である。A（52～58）－直線的な刃部の一端が尖るもの。B（59～65）－直線的な刃

部と両側辺が直角になるように加工されたもの。C（66～72）－直線的な刃部のみのもの。D（73・74）－刃部が曲線を描き一端が尖るもの，E（75～77）－刃部が曲線的なもの。

短形石器　（78・79）　直線的な刃部に対して，両辺が直交する石器。78のように２つの側辺への加撃がそれぞれ逆方向から施されているものが多い。

小刀様石器　(80)　匙様石器に似ているが，つまみ部が太く，両面加工の石器である。

親指状石器　(81)　掻器の一種かと思われる。黒曜石を原材にすることが多い。

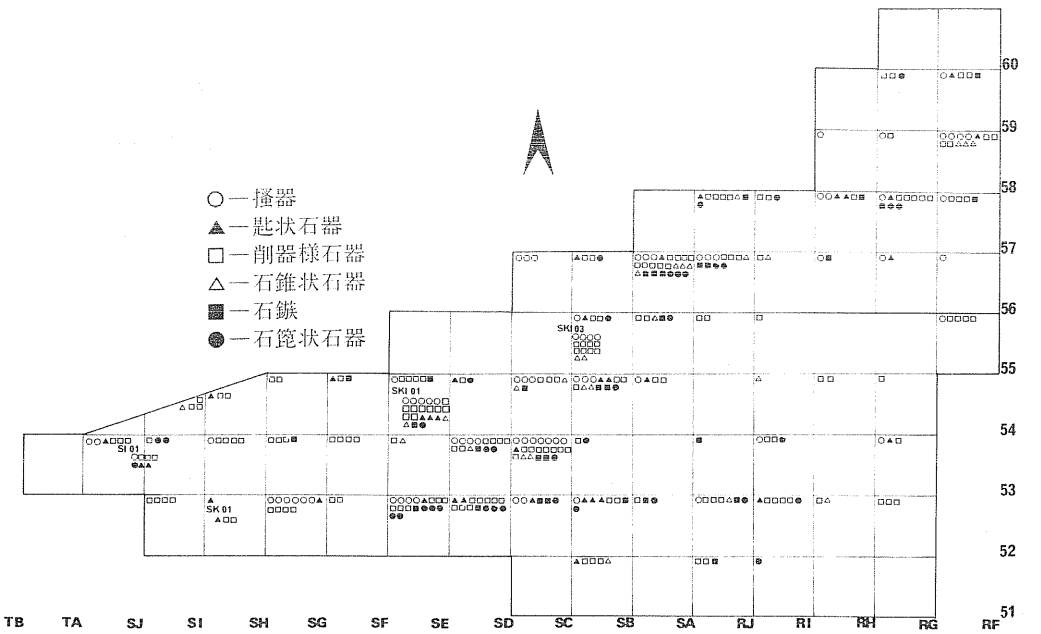
鷲爪状石器　(82)　先端の細くなる三角形の部厚い剥片を用いて主要剥離面から細かい剥離を施した石器で主要剥離面が大きく反る。

磨製石斧　A（83・84）　幅に対して厚みのあるものである。B(85)－Aに比べ，厚みが少ないものである。

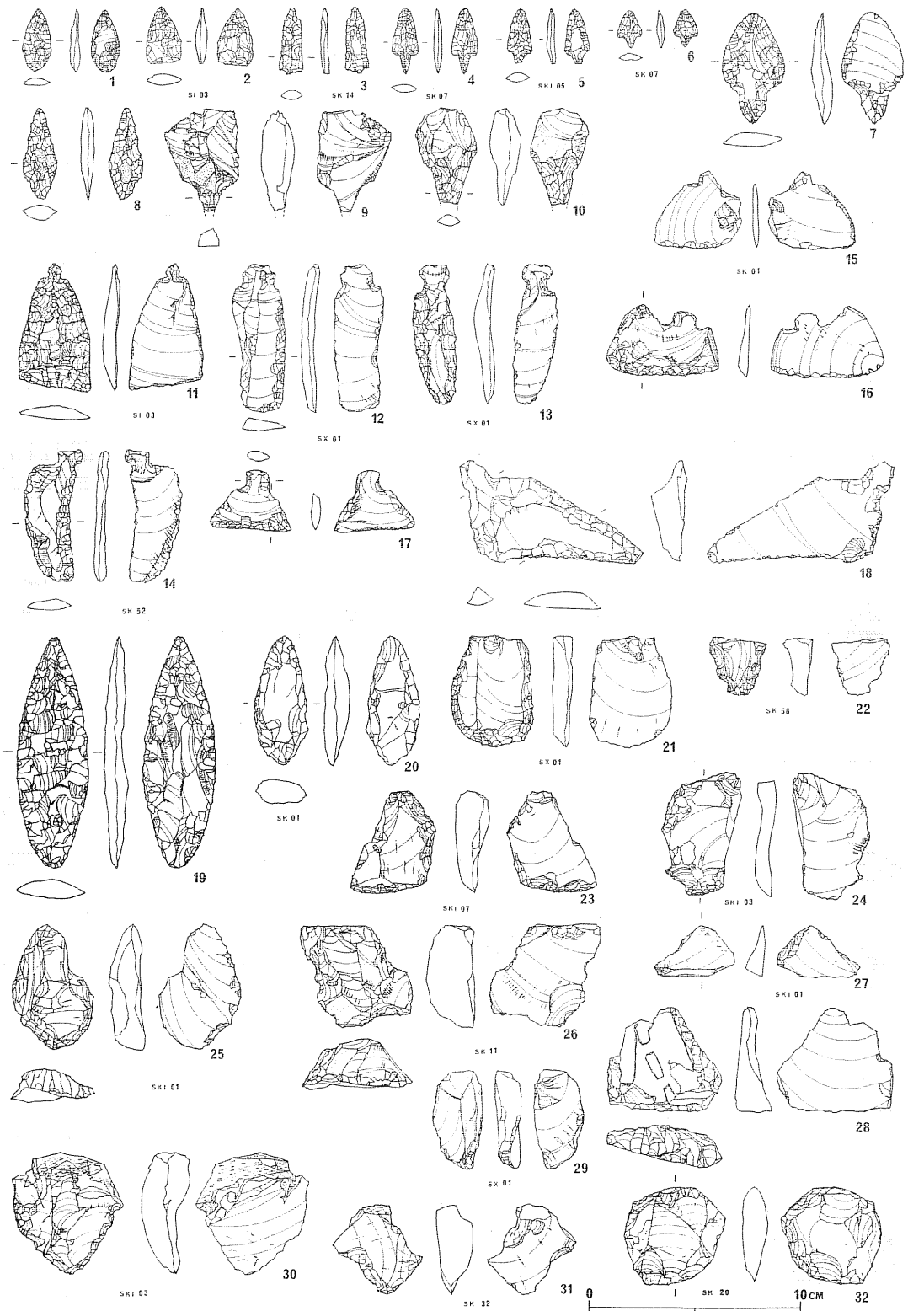
三脚石器　この石器は総数で46点出土した。他の石器と同様，特殊な出方はしていない。この石器の特徴は側面図でもわかるとおり図示した左側(表面)中央部が膨み，右側(裏面)中央部がくぼむということである。石材は頁岩と泥岩がそれぞれ約半分ほどに用いられており，両面の一部に自然面を残すものが多い。また，本遺跡出土のものには，105，106，110のように表面の中央部と脚先端部を除いてアスファルトの付着しているものもある。平面形によって三つに分類できる。A(88～92)－各辺が直線的であるものである。裏面も平坦か，ほとんど凹まない。B（93～102）－両側辺が弧を描くのに対し，上辺がほとんど弧を描かないものである。(103～117)－本来の三脚石器の基本的な形のものと思われる。三辺が強く弧を描くものである。この他に本石器では，三つの脚のうちどれか１つを欠損するものがあり，左上脚（D－118～125）を欠くものと，右上脚（126～131）を欠くものとがある。

第２表　出土石器組成及び遺構内出土石器表　※（　）内は石器の実測図番号を示す。

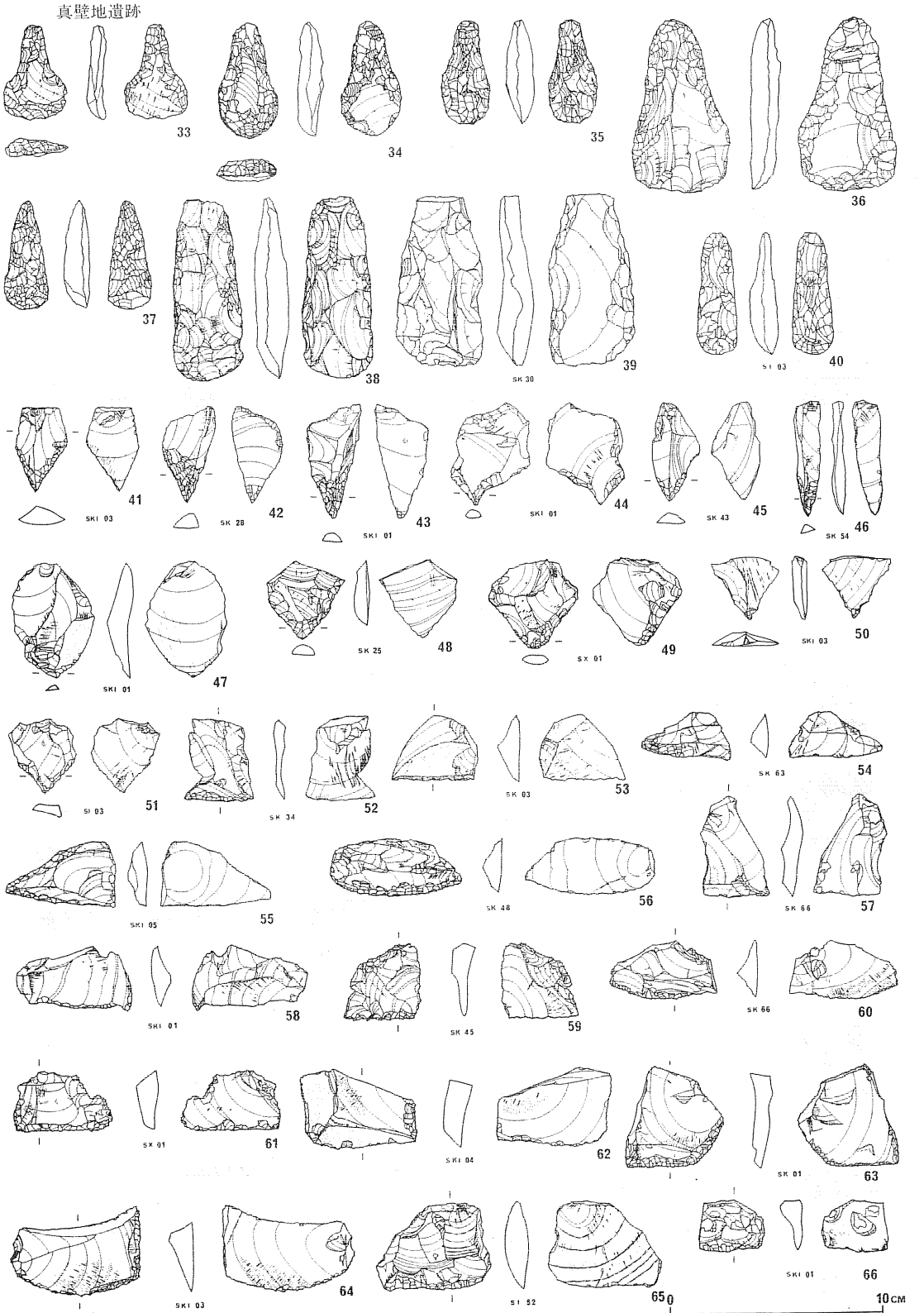
	石鏃	石錐	石匙	石核	掻器	円形	石槍	石錐状石器	削器様石器	小刀	長方形	鷲爪	磨製石斧	石鎚	三脚石器	親指状石器	石皿	凹石
総数	28	4	42	6	78	5	47	71	212	2	11	3	36	10	46	6	3	15
占比率%	45	0.7	6.7	1.0	12.4	0.8	7.5	11.3	33.8	0.3	1.8	0.5	5.7	1.6	7.3	1.0	0.5	2.4
分類点数	A B C-1 C-2 C-4 D 4 4 9 11 1 3	4	A-1 A-2 B-1 B-2 7 11 14 10	A B 3 3	A B C 33 17 28	5	A B C D E 13 13 5 13 3	A B 37 34	A B C D E 52 31 50 24 55	2	11	3	A B C 24 7 5	A B 8 2	A B C D E 5 10 15 9 5	6	3	15
遺構名																		
SK1 01	1 (2)		1 1 1 (11)	1	1 1 3 (29) (27)	1	1 1 1 (49)	2 2	3 1 2 1 2 (66 (70.71) (77)	1 (88)	2 (78.79)					SK101 (81)		
SK1 03					2 2 (20) (30)			1 1 (40) (50)	1 1 6 (64) (73)						3 1 1 (93×96) (97) (115) (128)			
SI 01			1 1	2	1		1		1 1 1									
SK 01			1 (19)	1 (29)					2 (63.66)						1 (104)			
	SK105(5)				SK107(28)	SK1 04			SK104(62) SK104(68) SK104(79)				SK1 02					
	SK07(4.6) SK14(3)		SK52		SK1129 SK3230 SK5822	SK2022	SK31 SK58	SK2508 SK2849 SK4369 SK5446	SK0353 SK3453 SK6384 SK6787 SK4856 SK1986 SK4559 SK2375 SK6657 SK4774 SK4379 SK39				SK05 SK3448 SK43 SK53	SK57	SK02(125) SK04(130) SK21(107) SK43(92) SK54(90)			



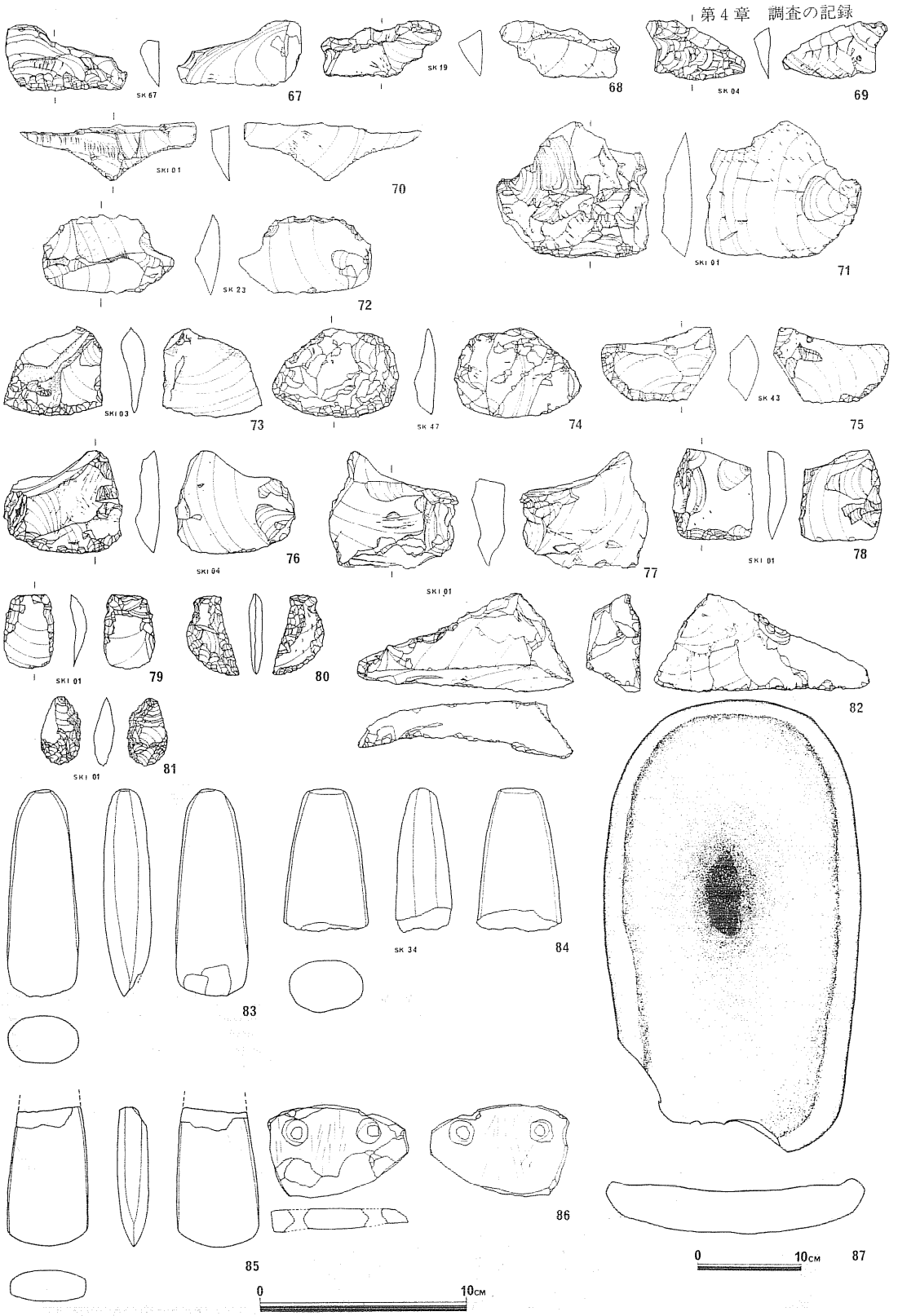
第55図　石器出土分布図



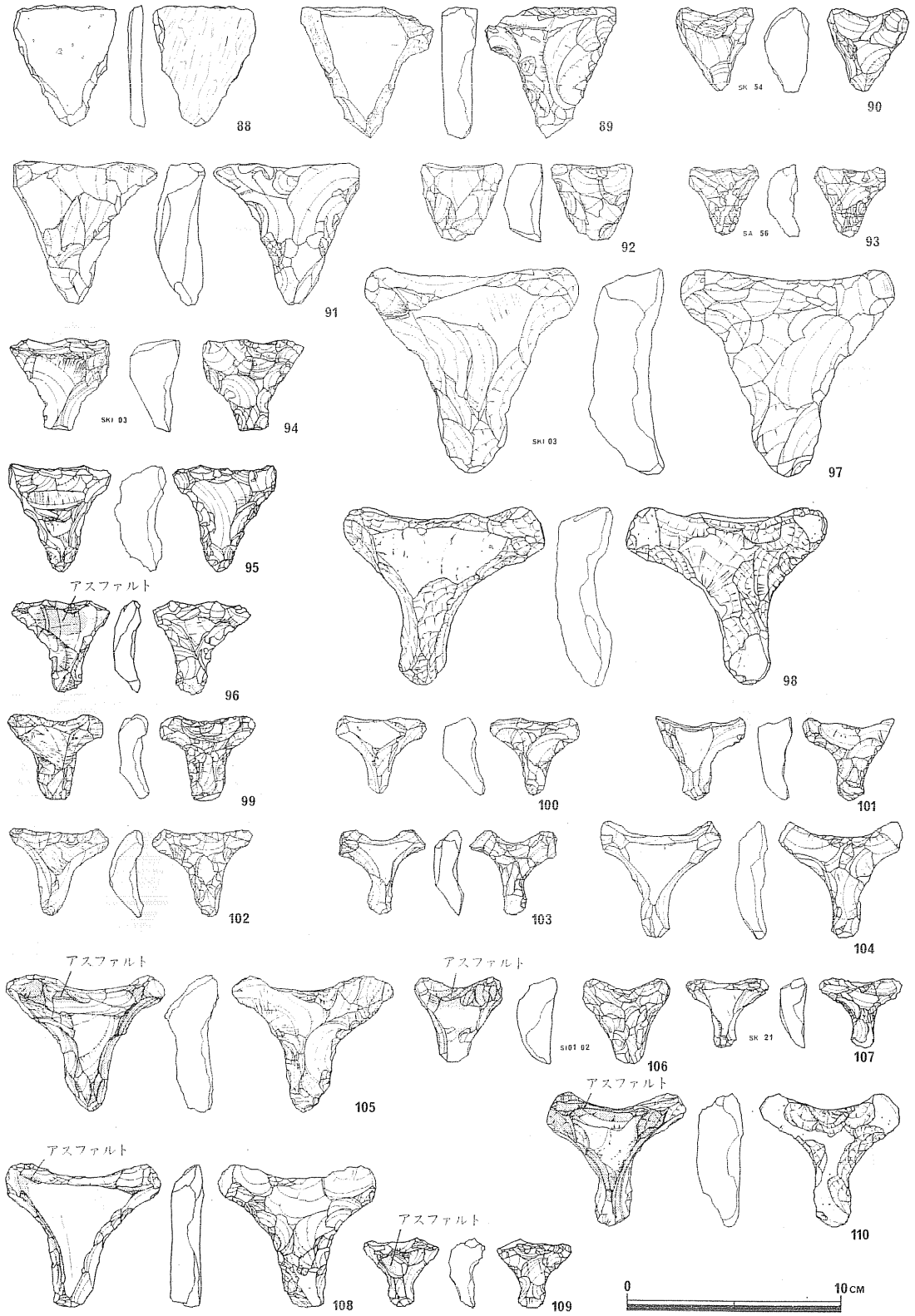
第56図　Ｄ調査区出土遺物(石器１)



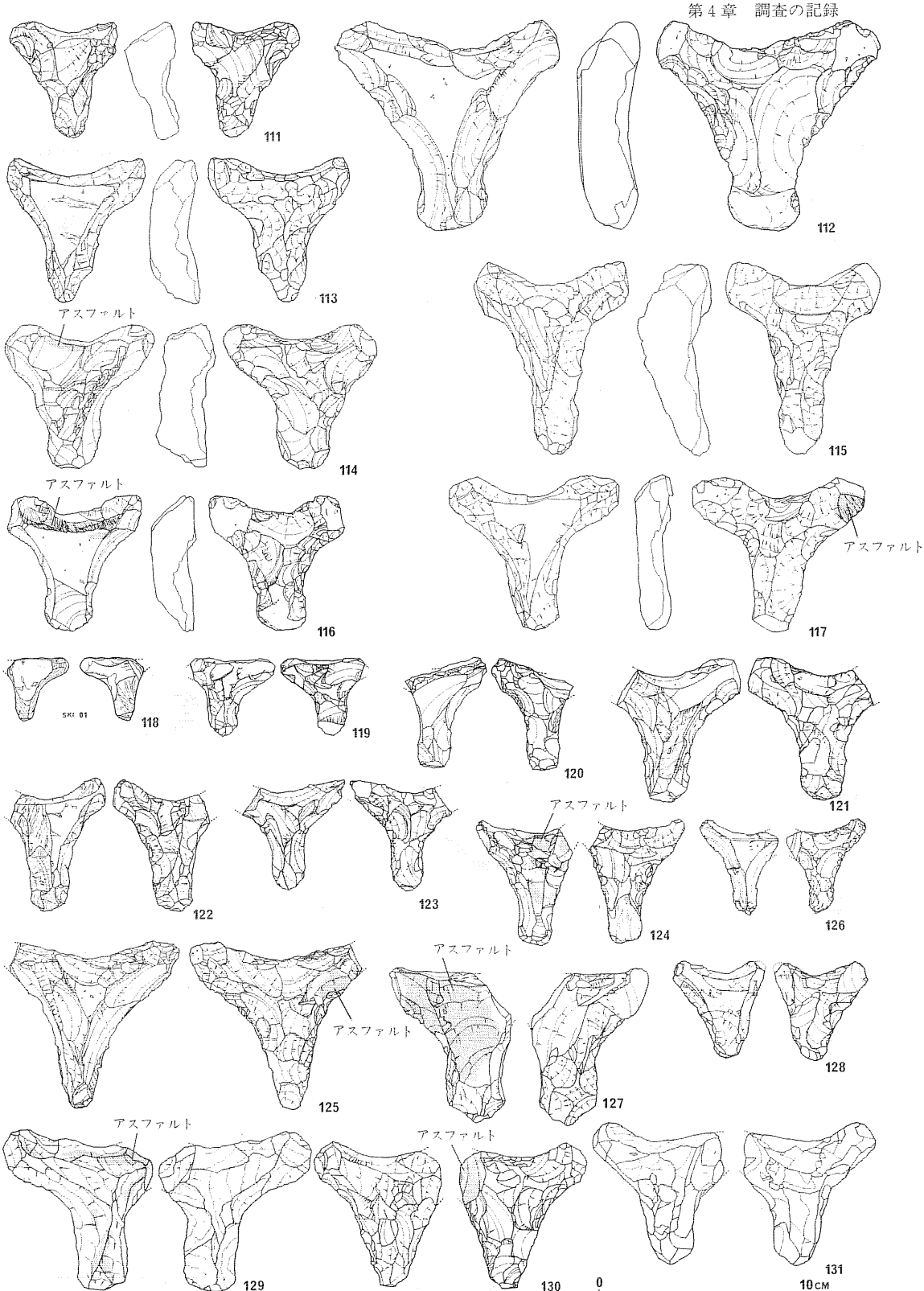
第57図　D調査区出土遺物(石器２)



第58図　Ｄ調査区出土遺物(石器３)



第59図　D調査区出土遺物(石器４)



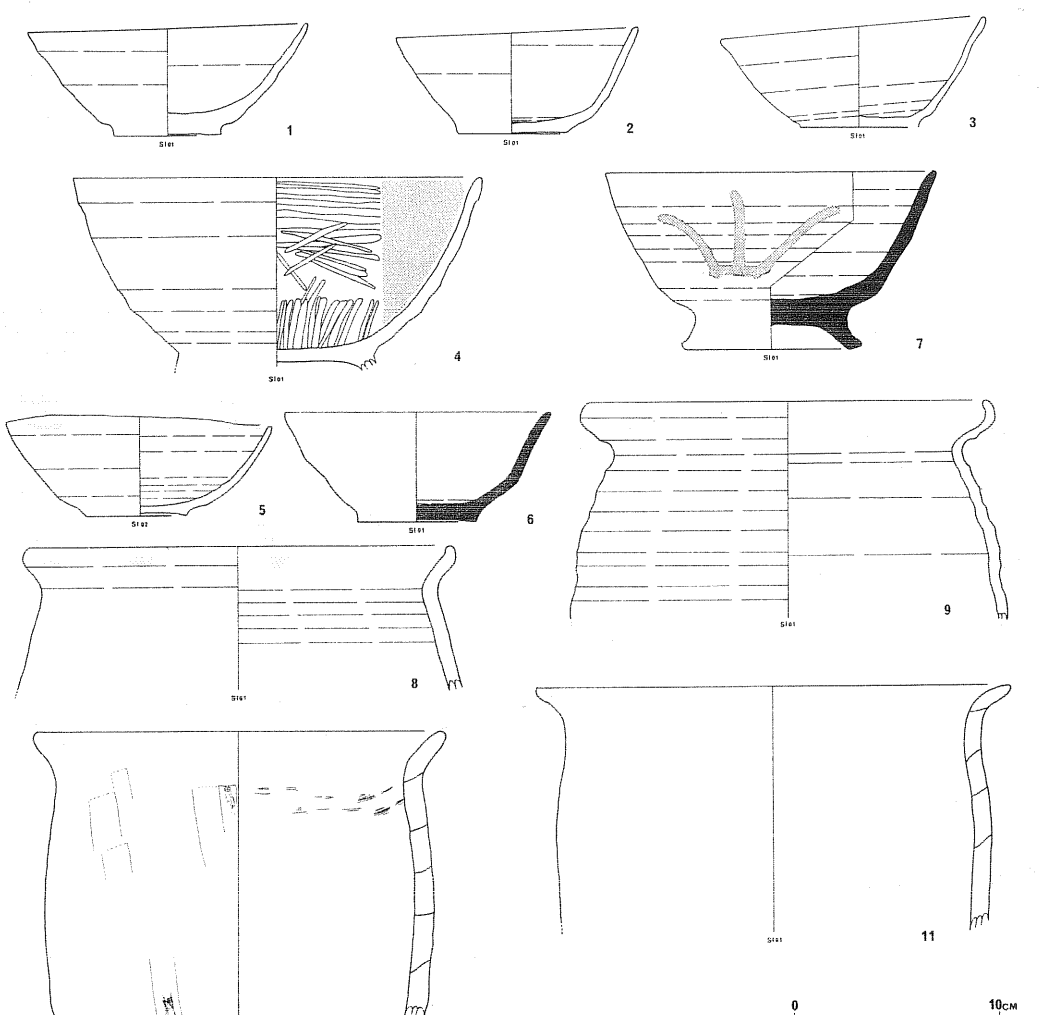
第60図　Ｄ調査区出土遺物(石器５)

(2) 平安時代

① 土師器　須恵器　（第61図　図版35）　いずれもSI01，SI02遺構内より出土している。

1．土師器　杯及び甕が出土している。5を除き他はいずれもSI01遺構内出土。杯はいずれも底部に回転糸切り痕を留め，内面にヘラミガキ及び黒色処理を施すもの（4）と，そうでないものがある。前者は，体部が内弯気味に立ち上がるものと，直線的に立ち上がるものがある。色調は灰白色のもの，赤褐色のものがあり，前者はややもろい。甕は，胎土が緻密で焼成も良く器表面にロクロ整形痕を留めるものと，粗砂を含みややもろくヘラナデ痕を留めるものがある。前者は口縁部が強く「く」の字状に外反，口唇部で内弯し，後者は口縁部が緩く外反する。

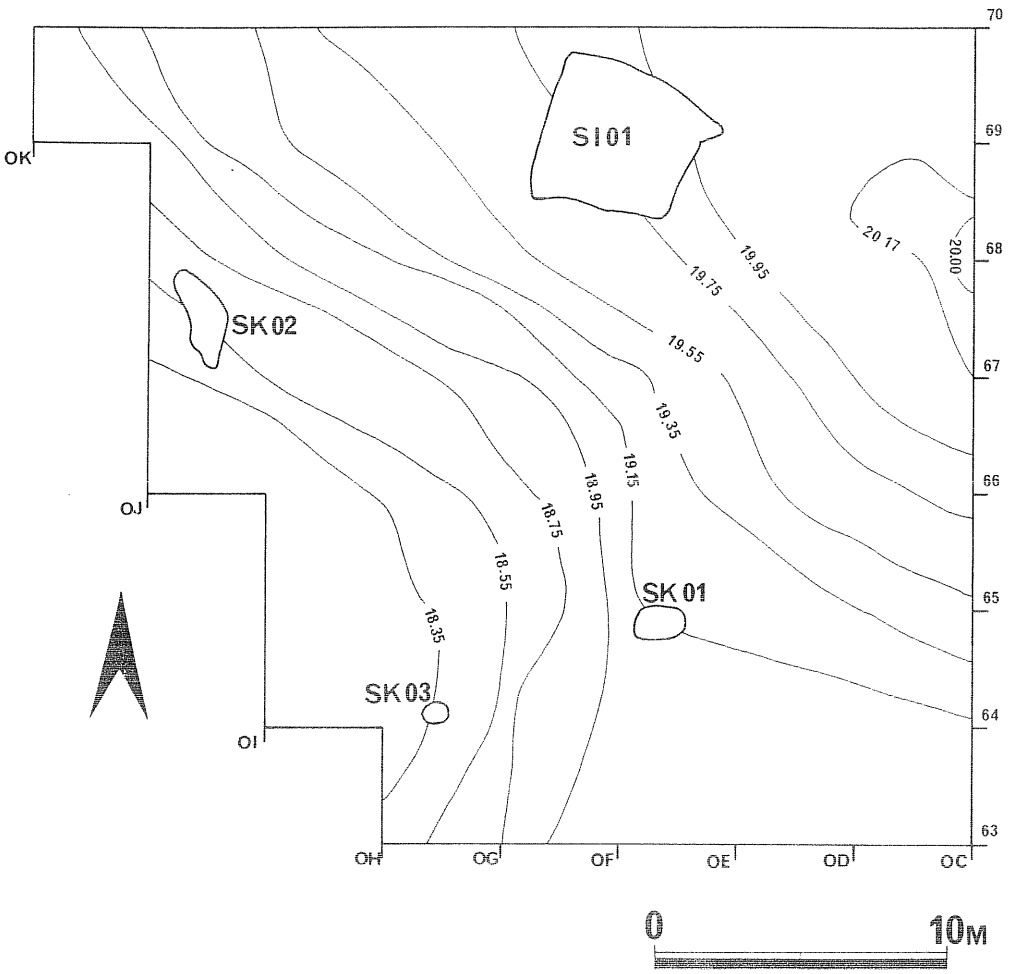
2．須恵器　杯が出土している。いずれも底部に回転糸切り痕を留め，体部下半でいったんふくらんだ後，外傾して立ち上がる。7は高台を付し，器表に「山」の墨書がある。



第61図　D調査区出土遺物（土師器，須恵器）

３．小結

調査区は舌状台地の先端，北面部に位置し，地形は平坦である。検出された遺構は住居跡２棟，竪穴状遺構８基，土壙67基及び溝４条である。住居跡はいずれも平安時代のもので１棟は台地北端部，他は40ｍ程台地中央部寄りに検出された。竪穴状遺構及び土壙はＳＫ31を除きいずれも縄文時代後期前葉，十腰内Ｉの時期に構築されており，調査区のほぼ全域にみられる。調査区周辺の遺物採集及び過去に行われた範囲確認調査から，縄文時代の遺跡は南面に広がり台地先端部ほぼ全域に及んでいると思われ，平安時代のものについては東面方向，台地中央部に広がっていると考えられる。



第62図　E調査区遺構分布図

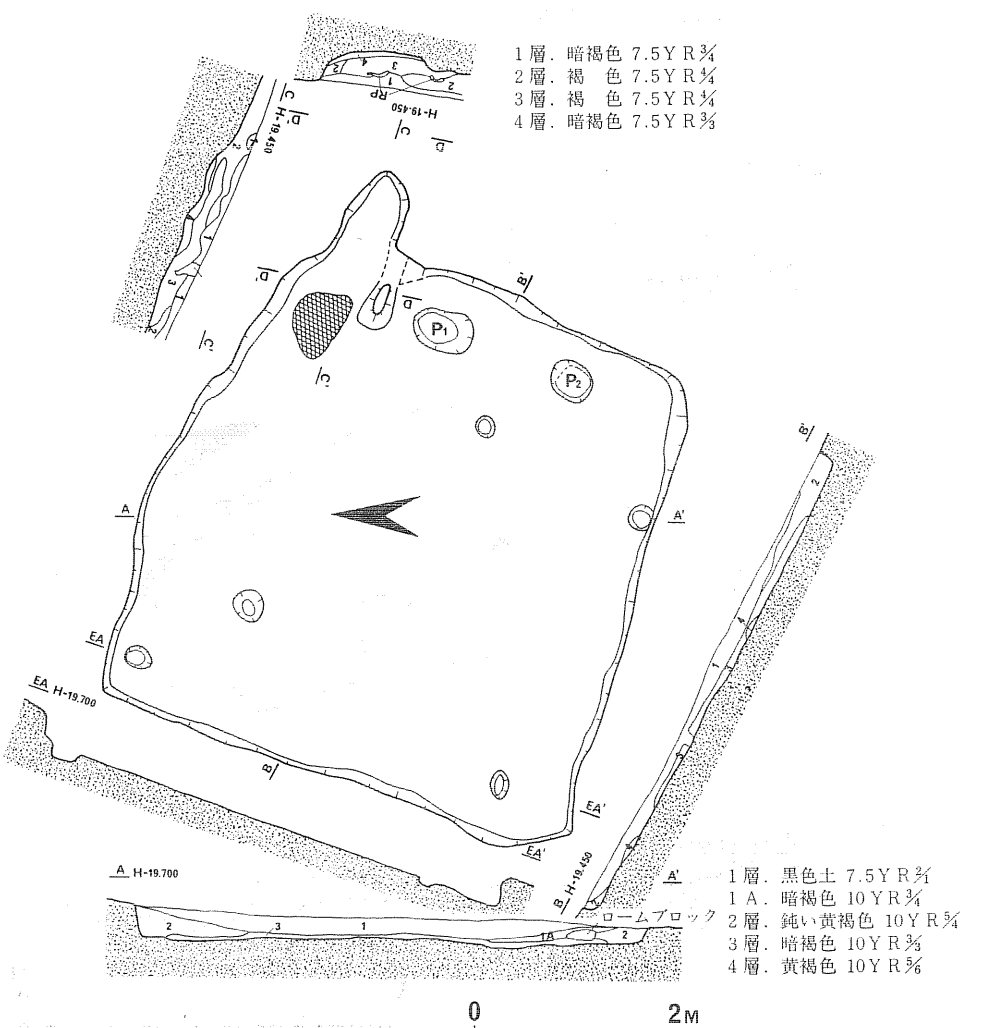
第５節　Ｅ調査区

１．遺構と遺物

(1)　平安時代

①　ＳＩ01竪穴住居跡　（第63図　図版36）

平面形は東西辺長4.6ｍ，南北辺長4.9ｍの正方形を呈する。壁高20～30cm。底面は比較的平坦でカマド周辺は硬くしまっている。カマド南面に２基のピット。P_2堆積土中から土師器杯片出土。柱穴は遺構内西面隅部に２本，南面に１本。カマドは東壁北寄りに設置され，燃焼部は平坦で少量の焼土痕跡がみられる。煙道はなだらかに立ち上がり，構築は地山を掘り凹め断面は袋状を呈する。上部は崩落している。



第63図　ＳＩ 01実測図

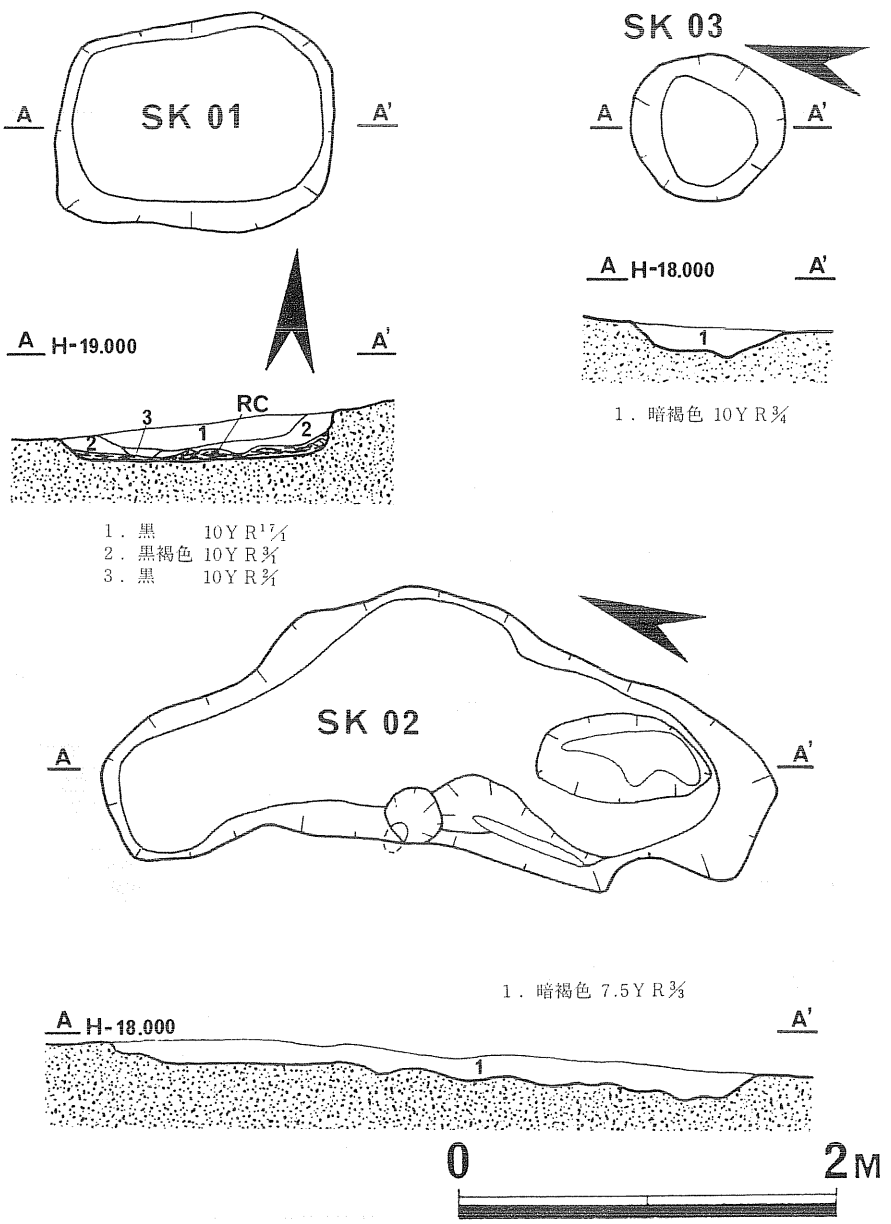
(2) その他の時代

① 土壙

SK01土壙 （第64図） 上壙幅1.4×1mの隅丸長方形。壁は外傾して立ち上がり，深さ25cm。

SK02土壙 （第64図） 上壙幅3.3×1.3mの不整円形。壁は外傾して立ち上がり，深さ25cm。

SK03土壙 （第64図） 上壙幅0.8×0.8mの円形，壁は外傾して立ち上がり，深さ25cm。



第64図 SK01～03実測図

２．出土遺物

(1)　弥生時代

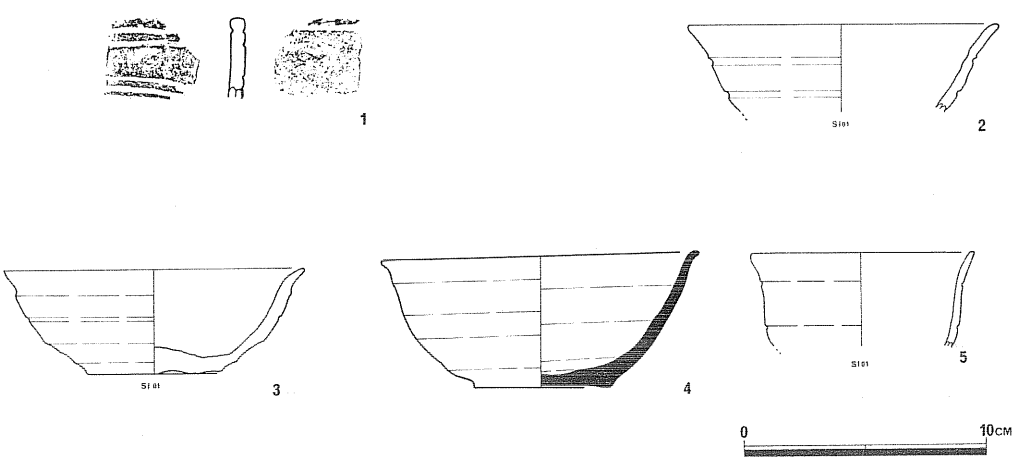
①　土器　（第65図）　出土量は極めて少なく図化できるものは１点である。口縁部破片で２条１単位の平行沈線を施す。沈線間は磨消しにより無文。口縁部に地文としての縄文。

(2)　平安時代　（第65図　図版35）

①　土師器　須恵器

１．土師器　杯は，体部下半が内弯気味に立ち上がり，口縁部は外反する。色調は赤褐色を呈するものが多く，胎土は緻密である。３は底部に回転糸切り痕を留める。甕は出土量が少なく，胴部破片が大部分で図化できるものは１点である。器表にはヘラケズリ調整痕を留めるものと，ロクロ整形痕のものがある。５は小形で，器厚は薄く，口縁部はわずかに外反する。器表面にロクロ整形痕。

２．須恵器　出土量は極めて小ない。大部分が細片で，図化できたものは１点である。遺構外より出土。４は底部に回転糸切り痕を留め体部は内弯気味に立ち上がり，口縁部で外反する。胎土は緻密だが，焼成はやや不良である。



第65図　Ｅ調査区出土遺物(土師器，須恵器)

３．小結

調査区は舌状台地先端部に位置し，地形は北から南に向かいやや傾斜する。検出遺物は竪穴住居跡１棟と土壙３基である。住居跡は台地北端近くの一段高い地点に構築され，出土遺物から平安時代後期と考えられる。過去の範囲確認調査及び本調査時に行った坪掘りでも周辺に関連遺構は検出されず，極めて小単位（確認段階では１棟）で生活が営まれた事がうかがえる。土壙は１基が投げ込みによる炭化物を多量に含む。いずれも遺物は出土してなく時期は不明である。遺物は縄文土器及び弥生土器が数点出土したに留まる。

第5章　まとめ

調査が実施された真壁地遺跡は，約60,000m²の広さをもつ舌状台地に位置する。台地には2つの小谷が入りこみ，さらに3分されている。発掘調査はこのうち2カ所の小舌状台地先端部（A，D，E調査区）と突端から約500m～700m台地内部に入った地点（B，C調査区）で実施した。台地内部のB，C調査区は遺構，遺物共極めて少なく，定住的な生活が営なまれた遺跡としての確認には至らなかった。台地先端部に位置するD，E調査区は小谷によって分断されてはいるが，両者の地形状況は極めて似ており，平担な台地からは3方に沖積平野がのぞまれる。A調査区はこのE調査区と地続きである。遺構，遺物の検出出土はD調査区が際立って多く，遺跡はさらに台地先端部全面に及んでいるものと考えられる。それに反しA，E調査区では少なく，明確な時期決定を得たのは平安時代の住居跡2棟のみであった。台地先端部は生活の場として積極的に活用される傾向にあるが，地形的に類似したこの2地点には利用状況に大きな差異がみられる。

出土遺物は縄文時代が後期前葉に属するもので，D調査区を中心にB調査区で小量出土している。弥生時代のものはA調査区南面部の一画に集中して出土，台地内部にさらに広がっていると考えられる。土器は変形工字文を主体に，地文として縄文を施した土器口縁部に数条の平行沈線をひくものや，一部は横位に刷毛目痕を留めるものがあり，口縁部内面には2～3条の平行沈線を有するものが多い。縄文晩期大洞A′式に後続するものと考えられ，県内の飯森式[註1]に対比できよう。平安時代に属するものは土師器を主体に須恵器が少量で，A，D，E調査区より出土している。器形は杯が多く，いずれもロクロ成形により底面に回転糸切り痕を留める。平安時代後期のものと考えられる。

次に遺構，遺物の最も多いD調査区について記述を進めたい。D調査区は縄文時代と平安時代の複合遺跡であるが，縄文時代後期前葉に属する遺構，遺物が主体を占めている。縄文土器は全て十腰内Ⅰ式に属しており，限定された時期内で生活が営なまれた場であると言える。この事は遺構が密集して構築されているにもかかわらず重複例が少ない事からも言えよう。

検出された縄文時代の遺構は土壙が67基，竪穴状遺構が8基で，住居跡は検出されなかった。土壙は楕円形もしくは円形の平面形状を呈するものが多く，長軸もしくは直径は0.5m～2.8mで，中でも0.8m～1.5mのものが多い。特徴的な事は約8割の土壙から多量の遺物が出土している事である。竪穴状遺構は，周囲に柱穴をめぐらした小住居跡というべきものと，形態状は大形の土壙状を呈するが周辺に数本の関連柱穴がみられるものとがある。後者の場合遺物の出土量が極めて多く，SKI　01，03，06竪穴状遺構では堆積土下層より土偶が出土している。

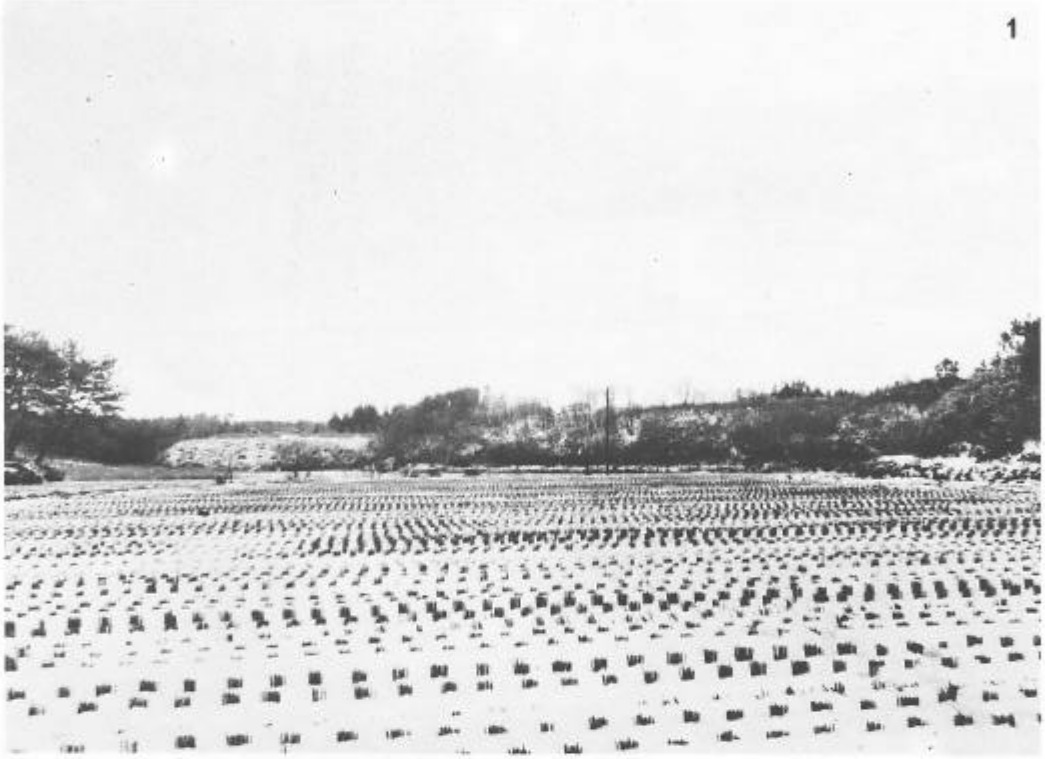
これら遺構は台地北縁の端部を除き，調査区内ほぼ全域に検出されたが，土壙群は中央部に集中する傾向を示しており，互いに隣接するSKI　01，03，06竪穴状遺構を取り囲む状況を呈している。遺物は遺構内外を問わず散乱した状態で出土しており，特に調査区内南西部と中央部に集中しており，捨て場的な様相を呈している。

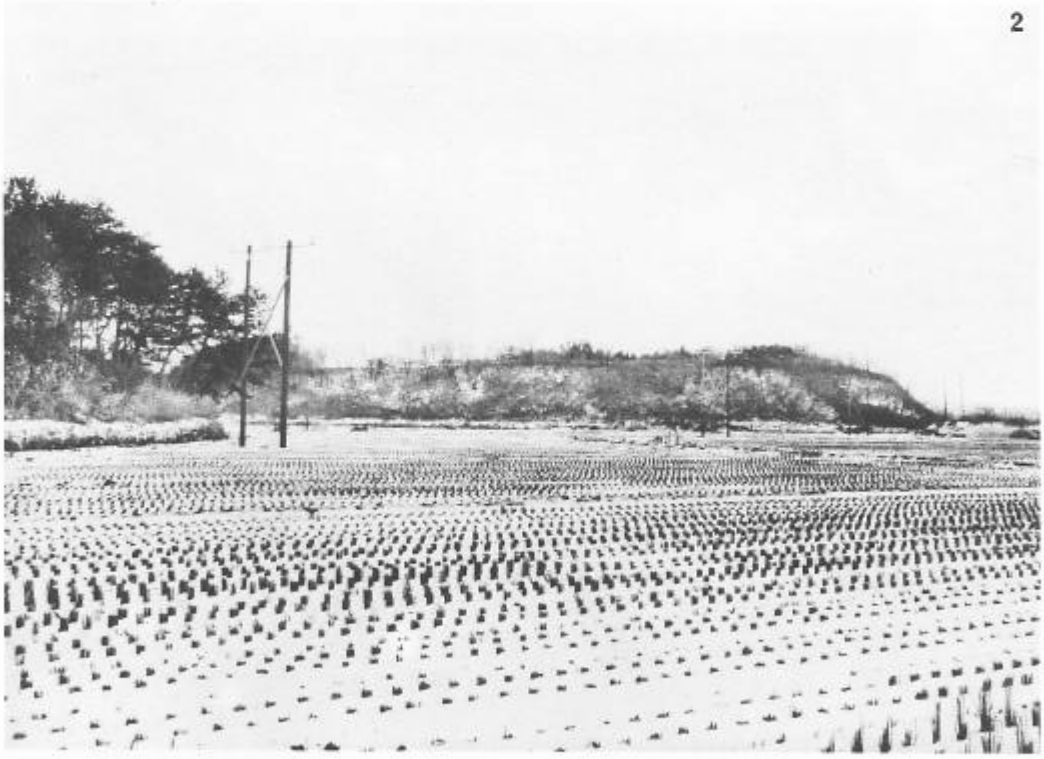
上記の事を考え合わせ本調査区は，遺構群が構築されて生活の場となり，やがて廃棄されるに及んで多量の土器がその場に投棄された状況を示しており，縄文時代後期前葉の一時期における遺跡のあり方を留めているものと言えよう。

註1　秋田県文化財調査報告書11　「脇本埋没家屋第三次調査概報」　1967年

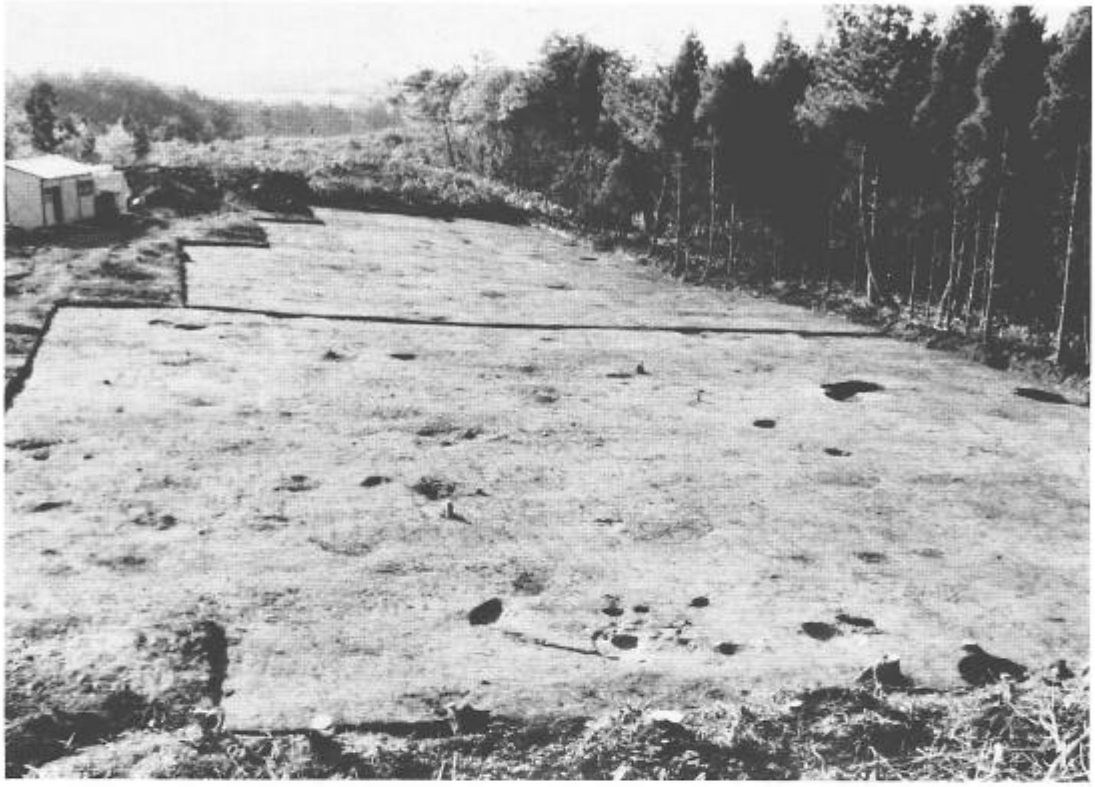
〃　富樫泰時　「男鹿市脇本埋没家屋遺跡の続縄文土器について」　物質文化10　1967年

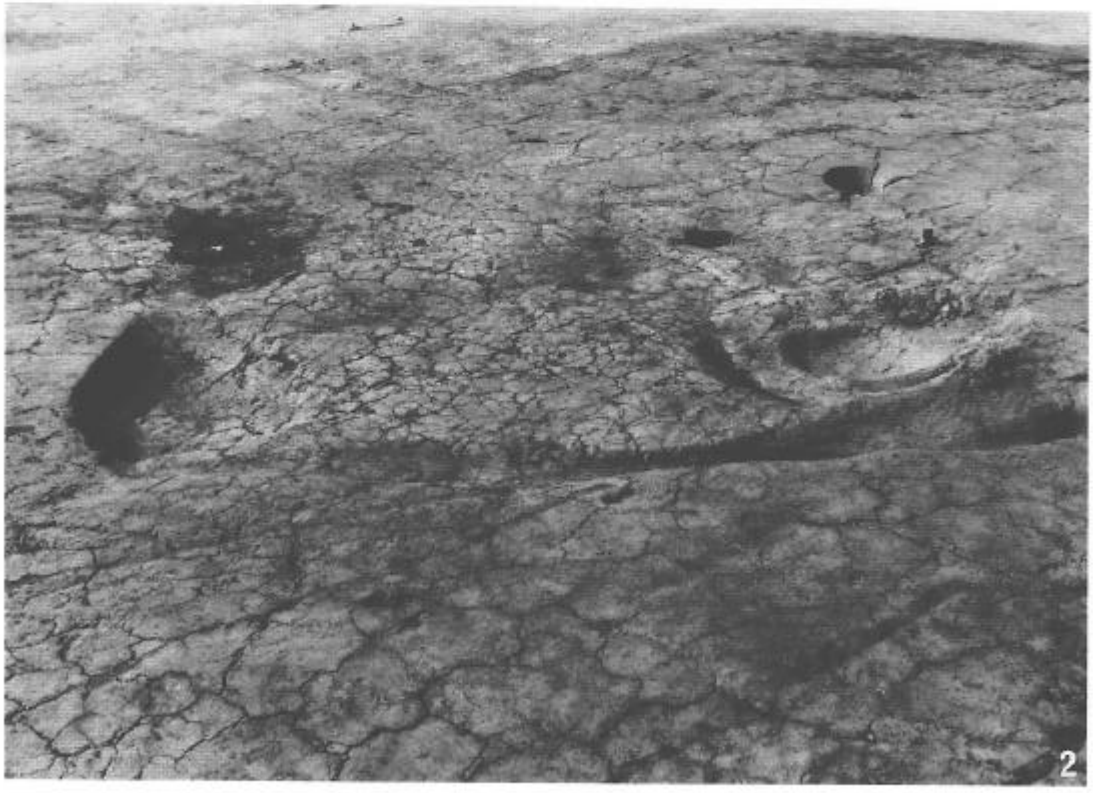
真壁地遺跡周辺地形（航空写真）



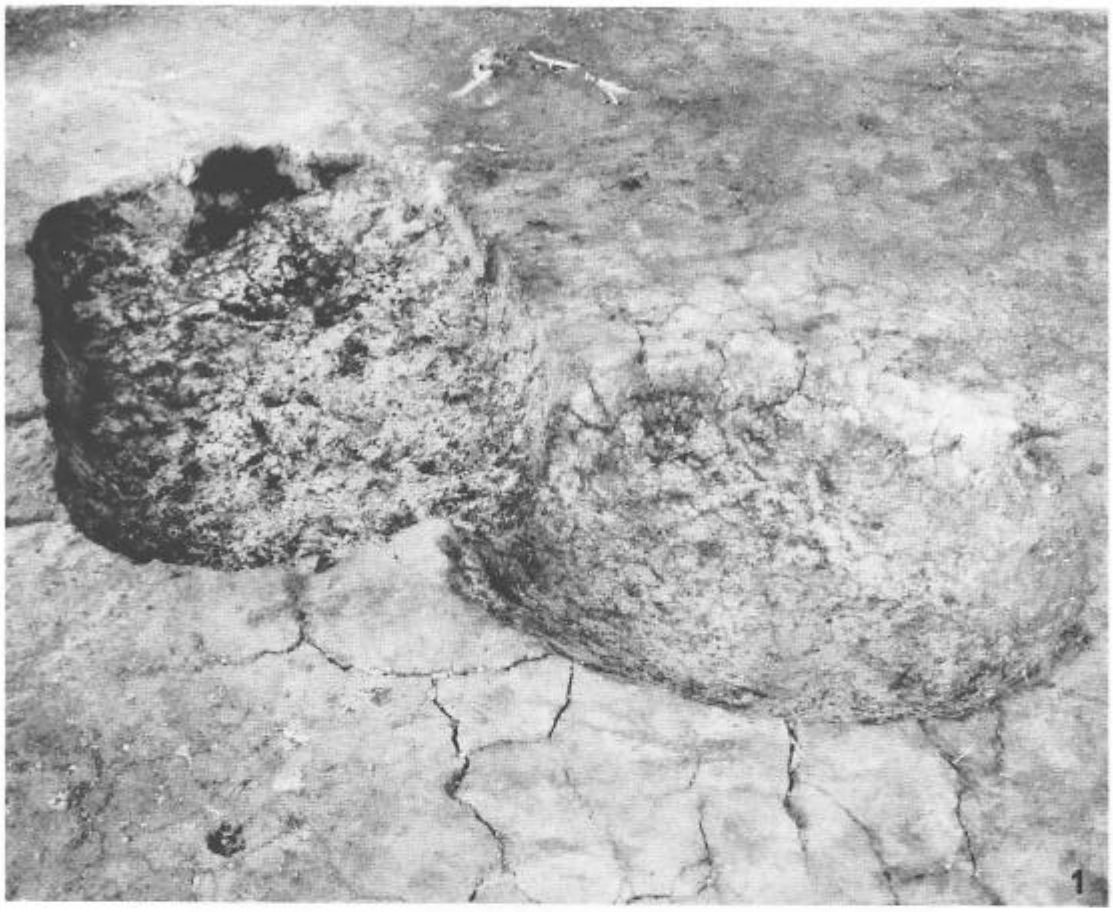


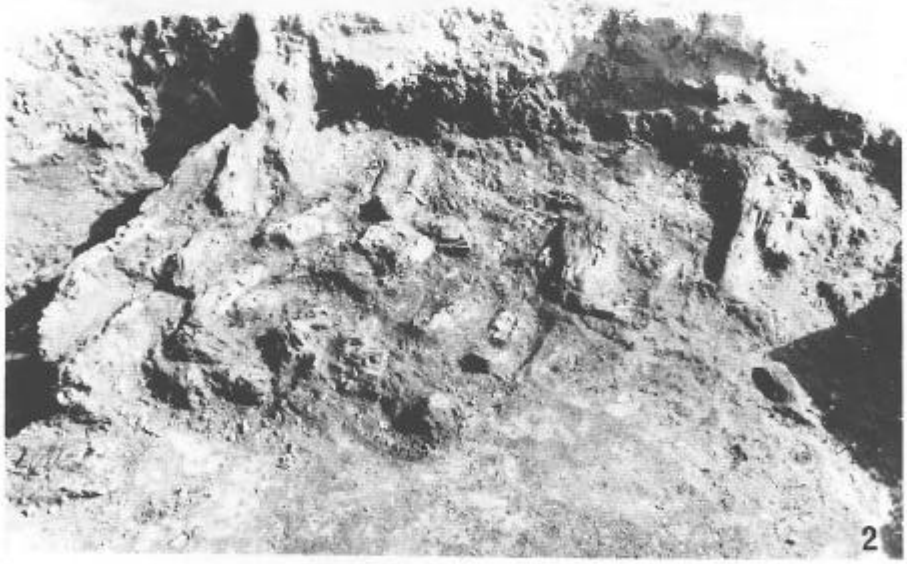
図版1　①真壁地遺跡遠景(西―東)　②遺跡遠景(東―西)





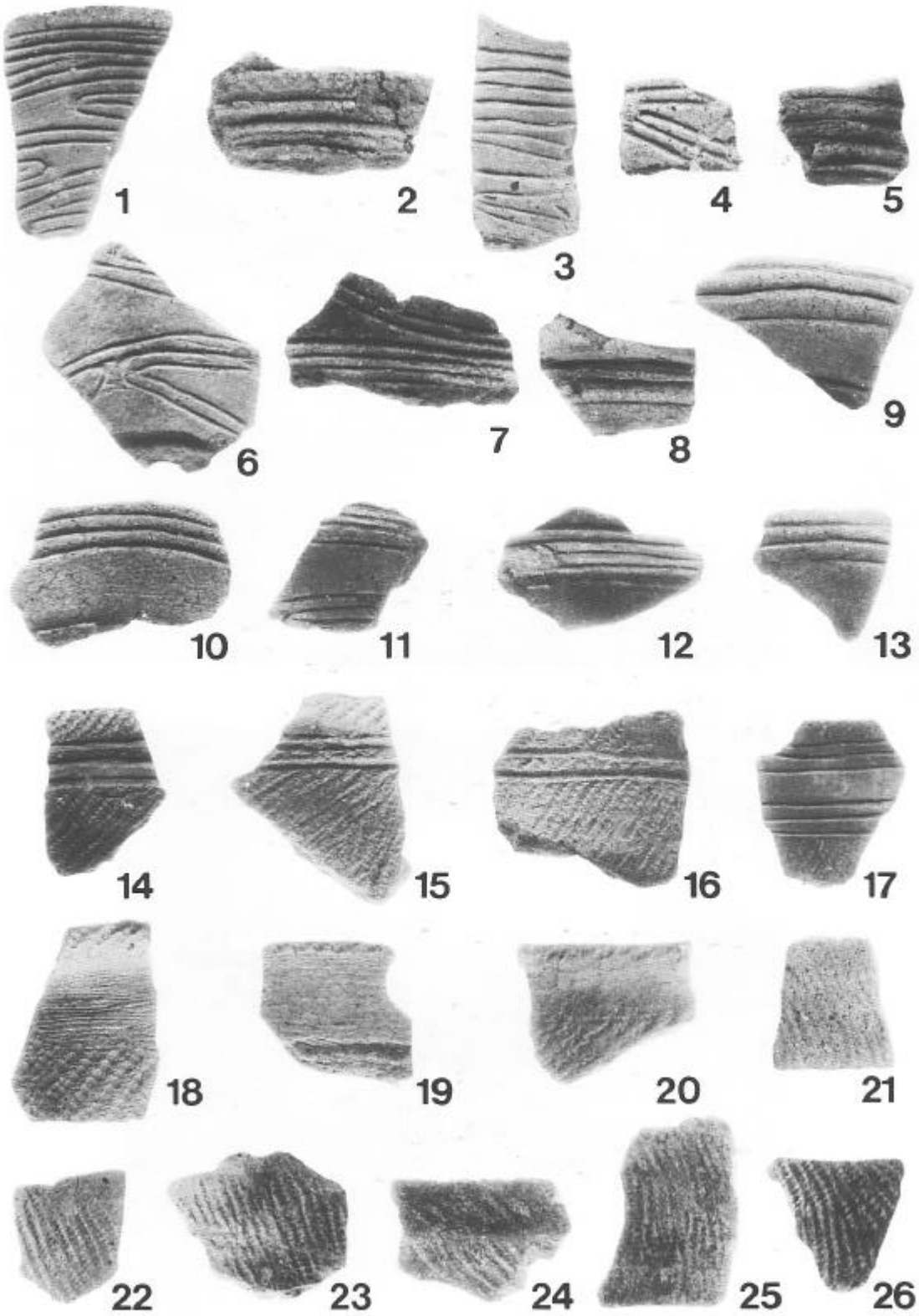
図版2　①A調査区全景(南―北)　②SI　01住居跡



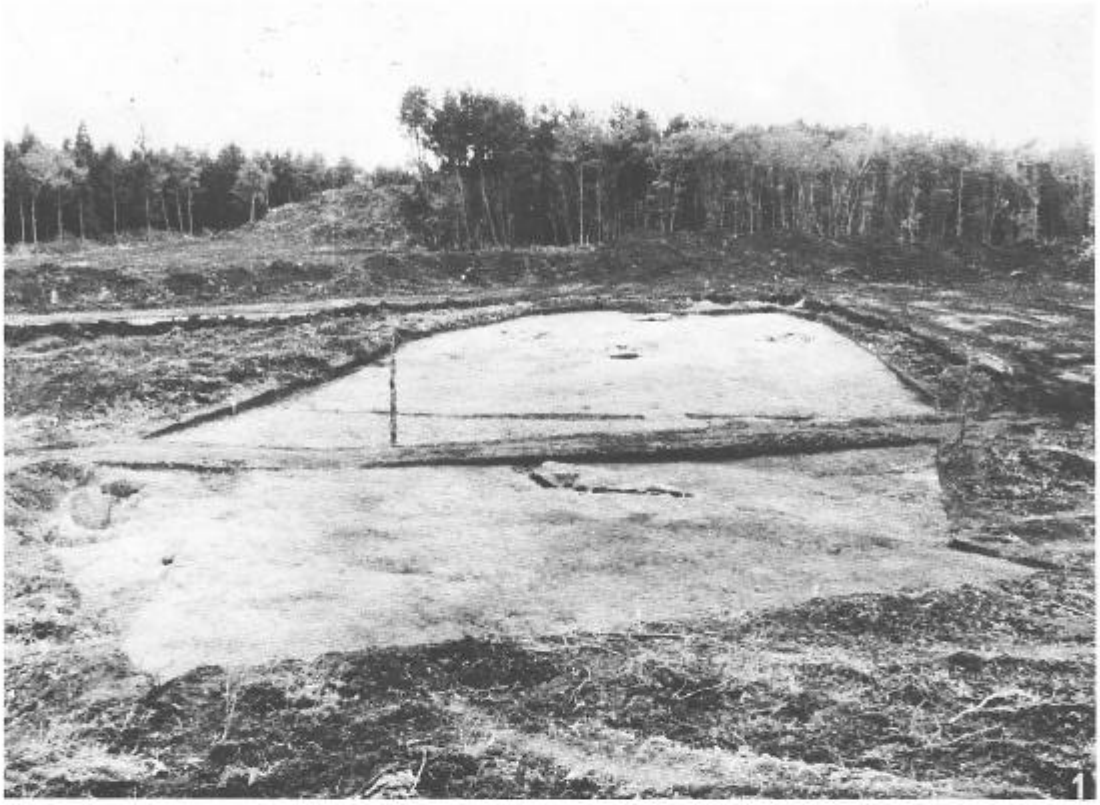


図版3　① SK 05　06土壙　　② SK 06土壙

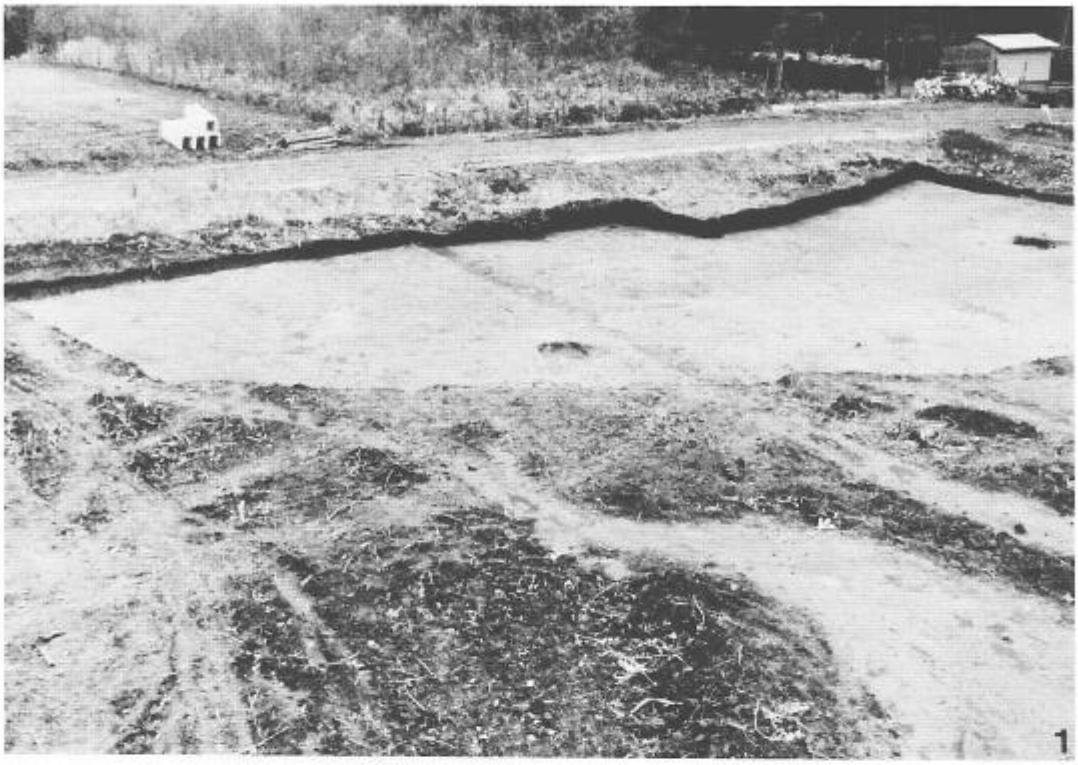
図版4　① SK 01土壙　② SK 02土壙　③SD 02溝状遺構



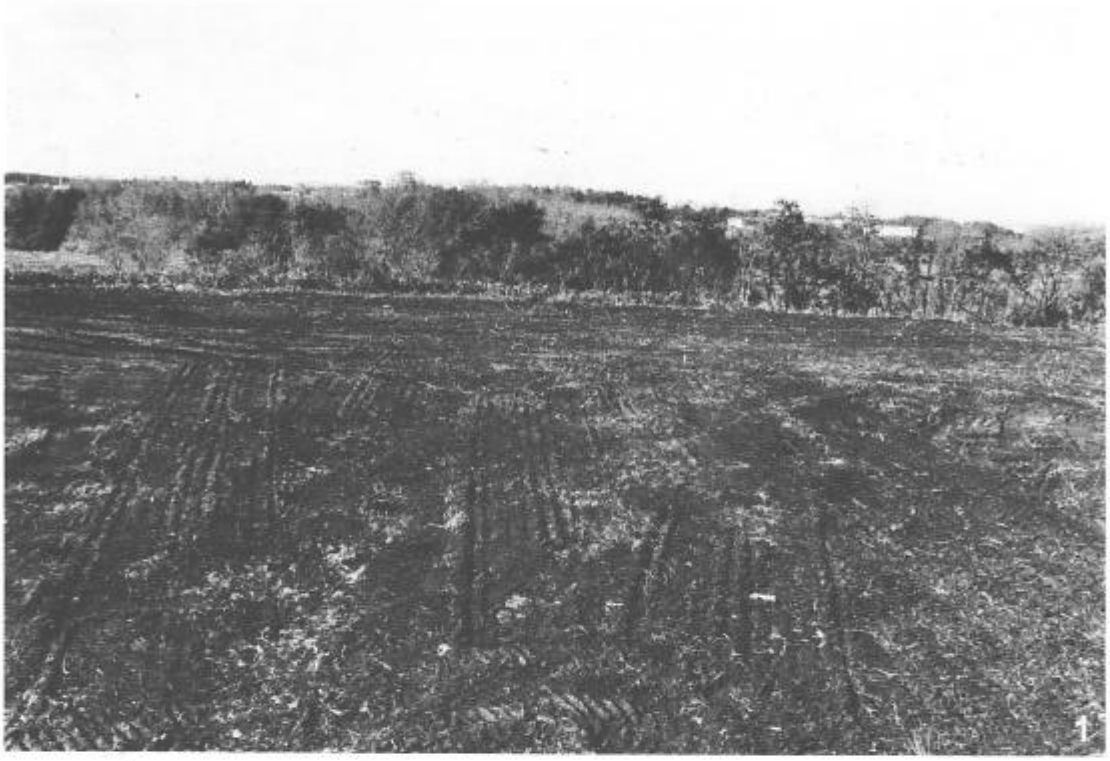
図版 5　A調査区遺構外出土遺物（弥生土器）



図版６　①Ｂ調査区全景（東―西）　②ＳＸ 06風倒木根

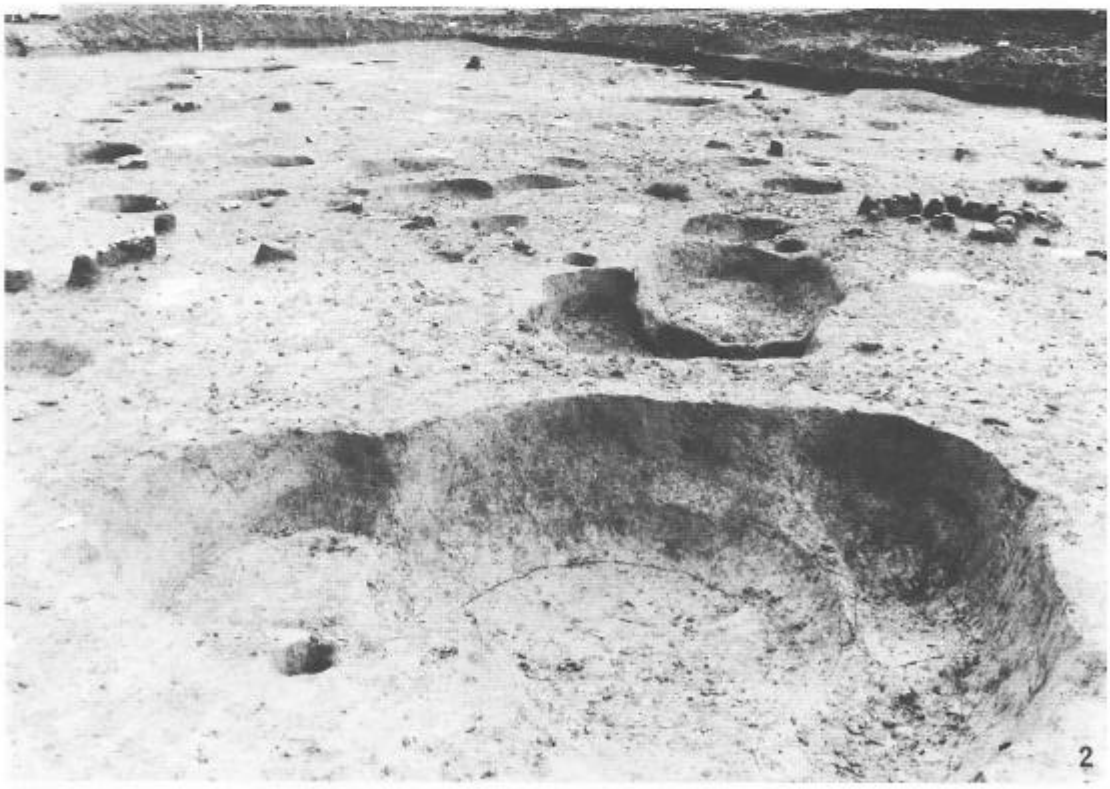


図版7　①C調査区全景(北―南)　②SK 01土壙

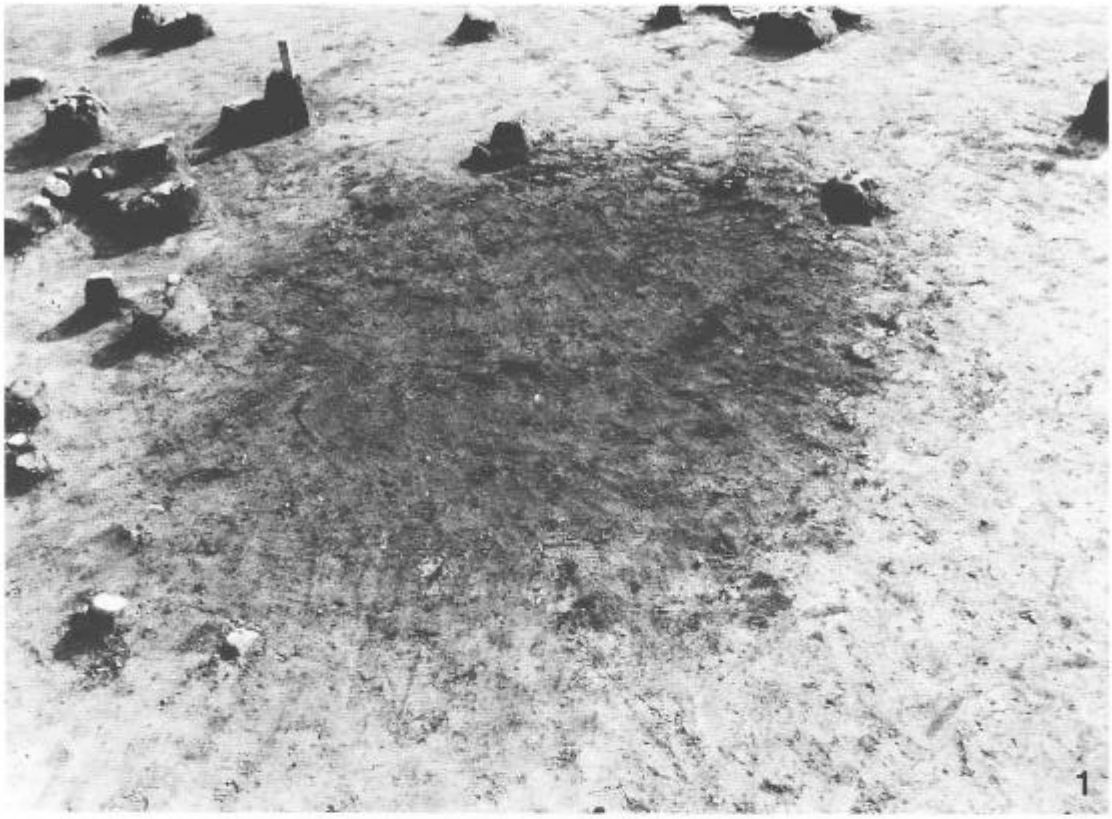


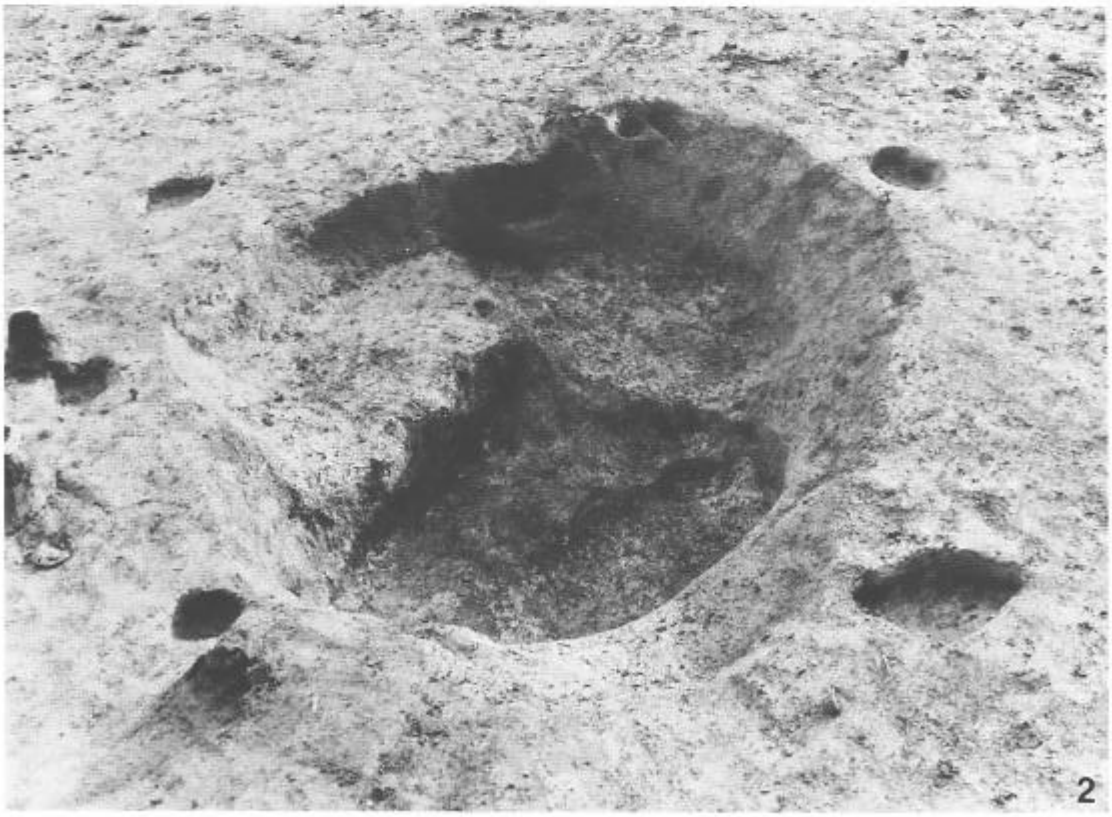
図版 8　①Ｄ調査区発掘前（南―北）　②調査風景

図版 9　①D調査区全景(南―北)　②D調査区全景(南―北)

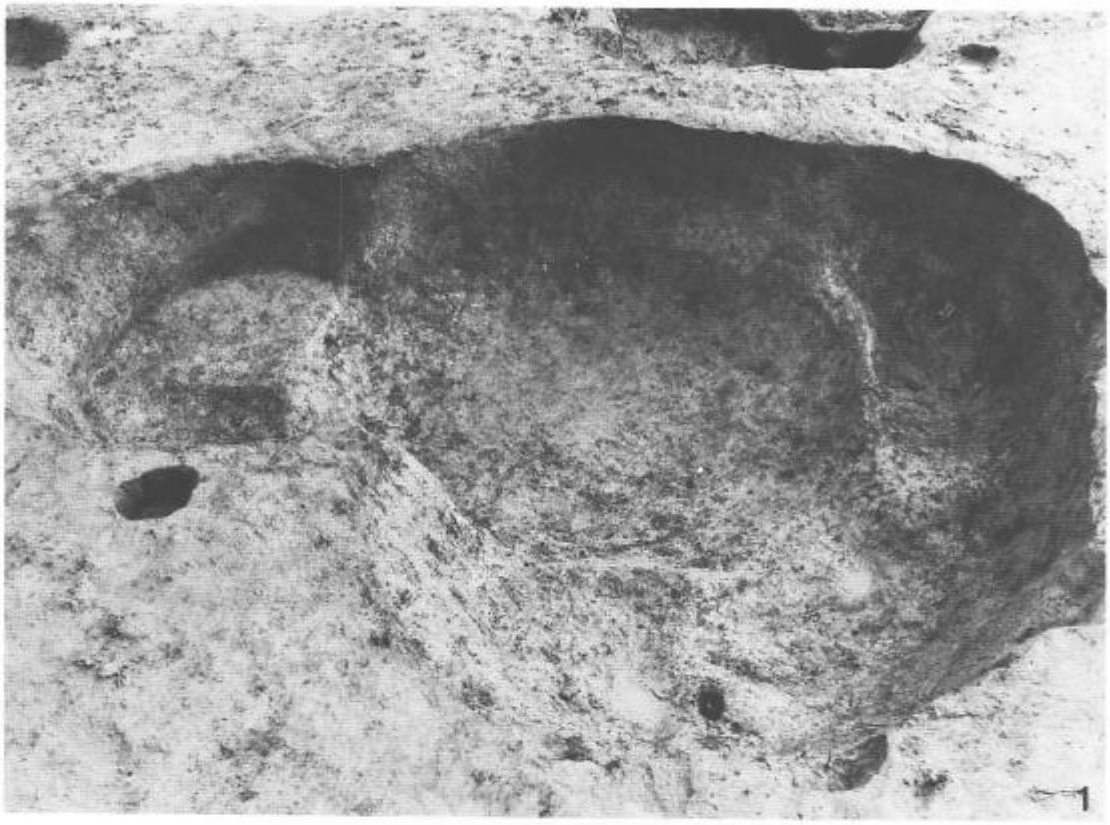


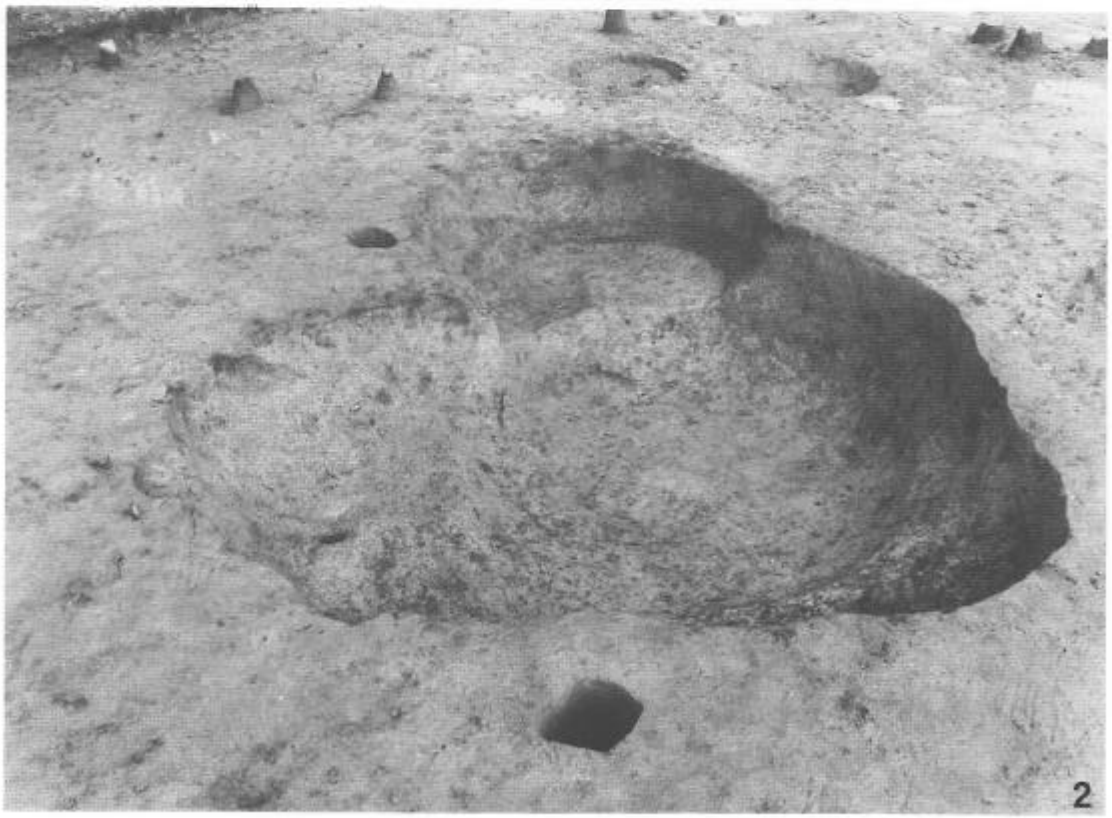
図版10　①土壙群(南―北)　②土壙群(南―北)



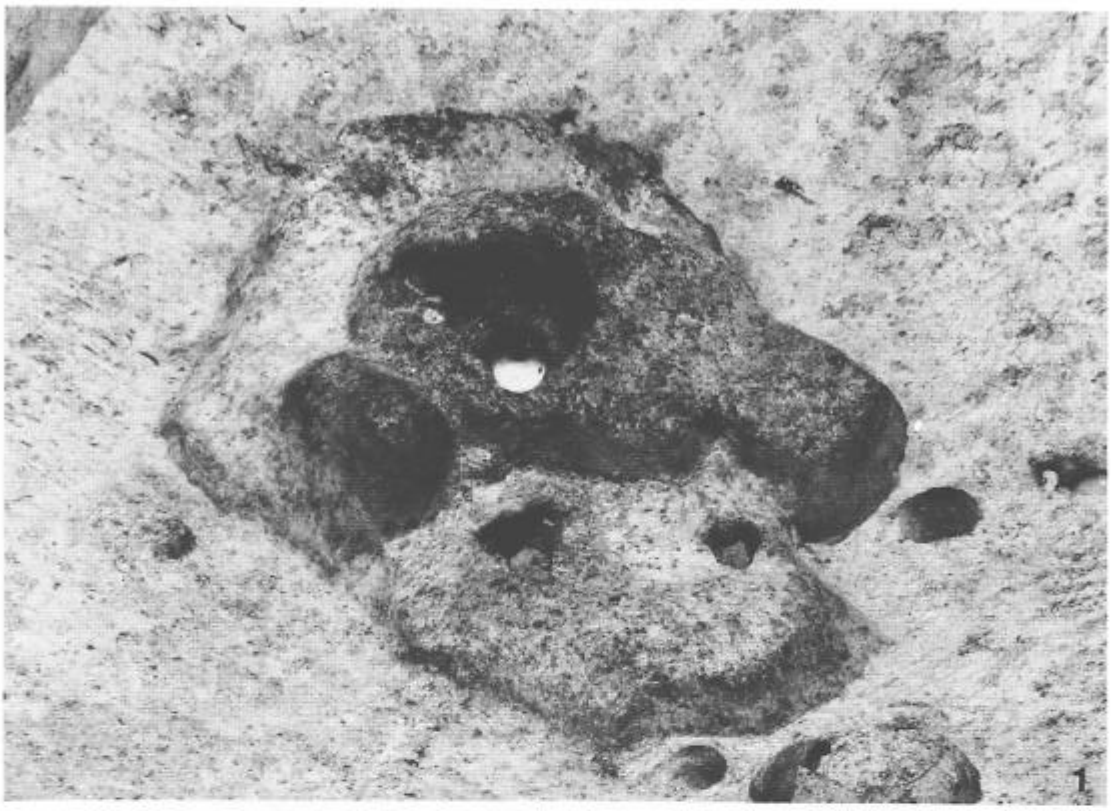


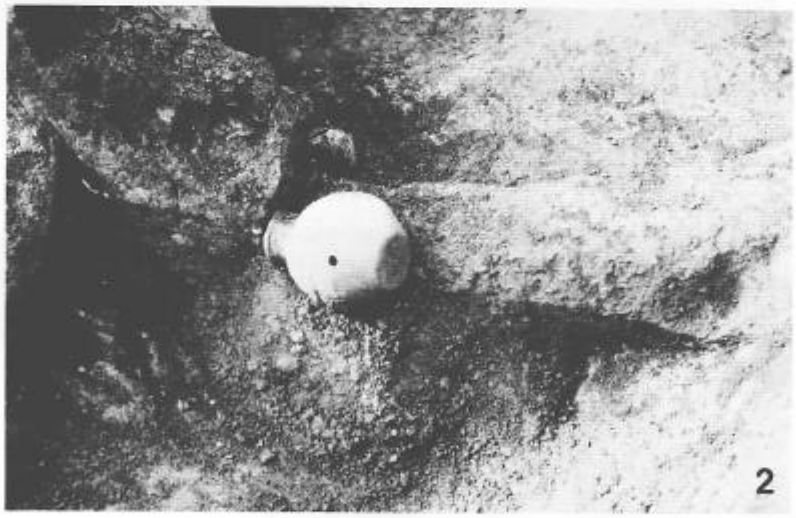
図版11　① SKI 01竪穴状遺構確認面　② SKI 01竪穴状遺構



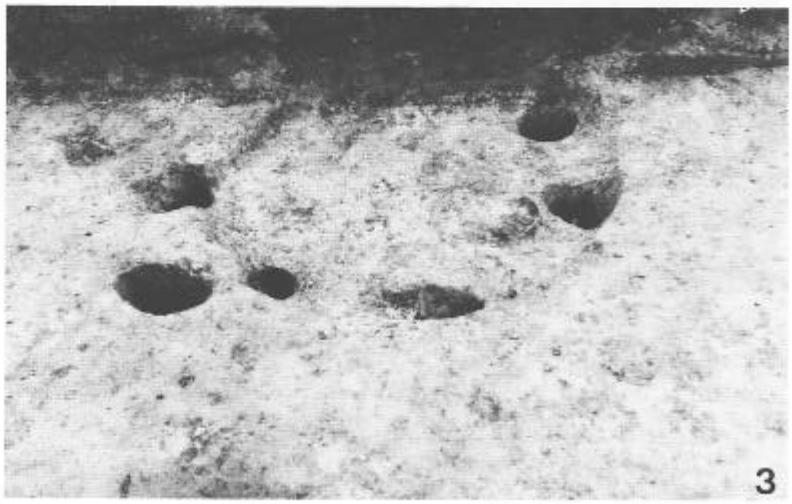


図版12　① SKI 03竪穴状遺構　② SKI 03竪穴状遺構

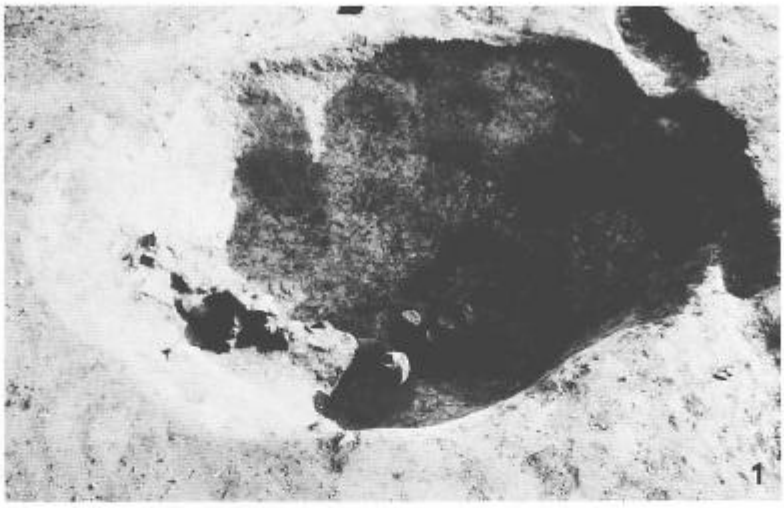


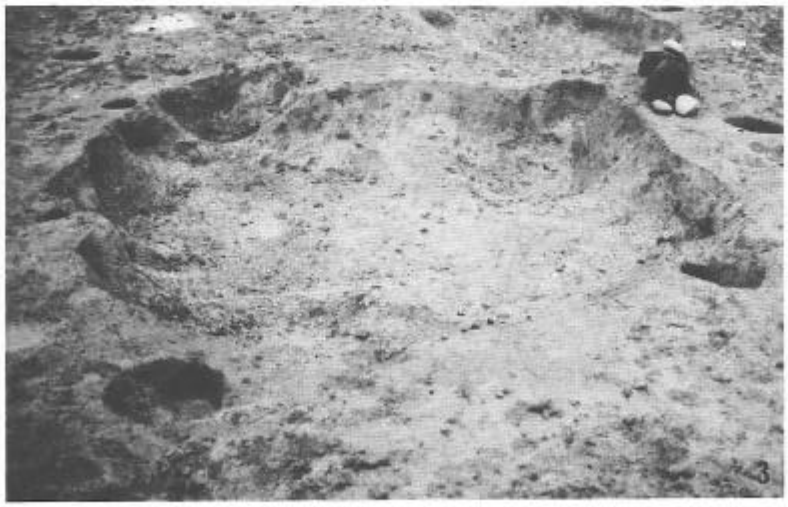


図版13　① SKI 04竪穴状遺構　② SKI 04土器出土状況

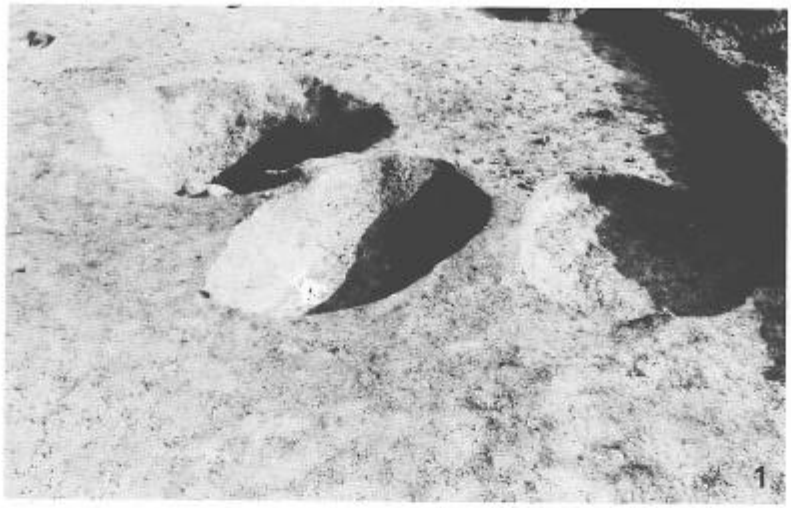


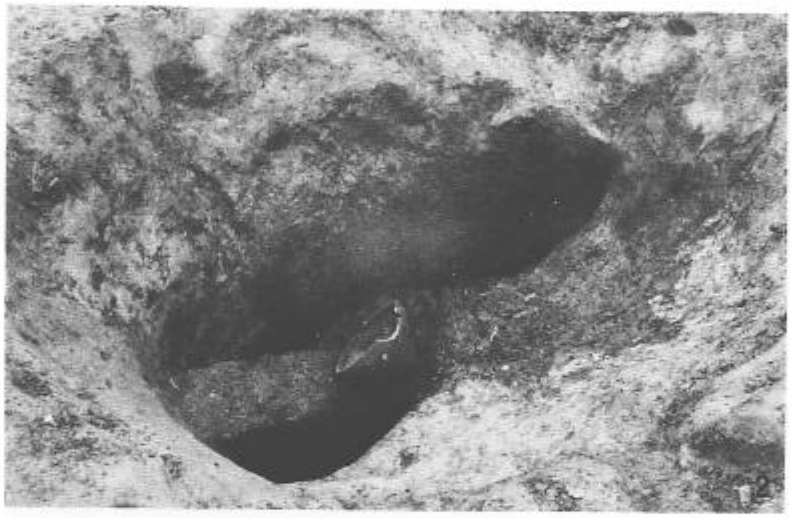
図版14　① SKI 02竪穴状遺構　② SKI 02石器出土状況　③ SKI 05竪穴状遺構

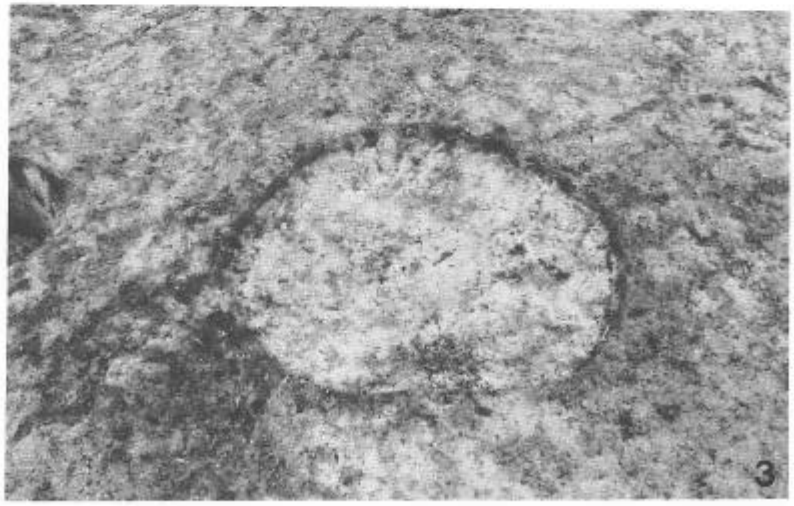




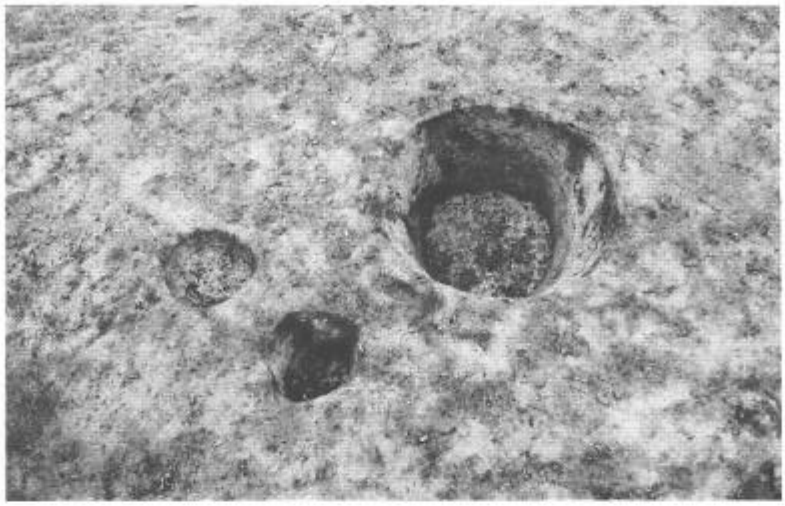
図版15　① SKI 06竪穴状遺構　② SKI 06土器出土状況　③ SKI 08竪穴状遺構

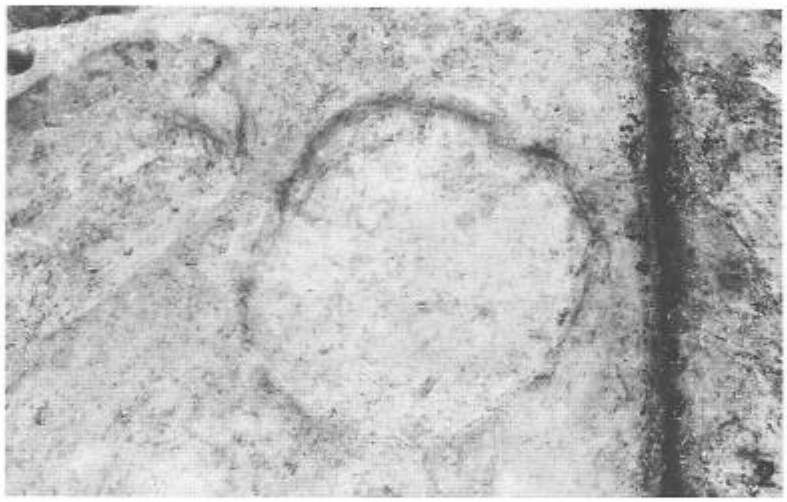


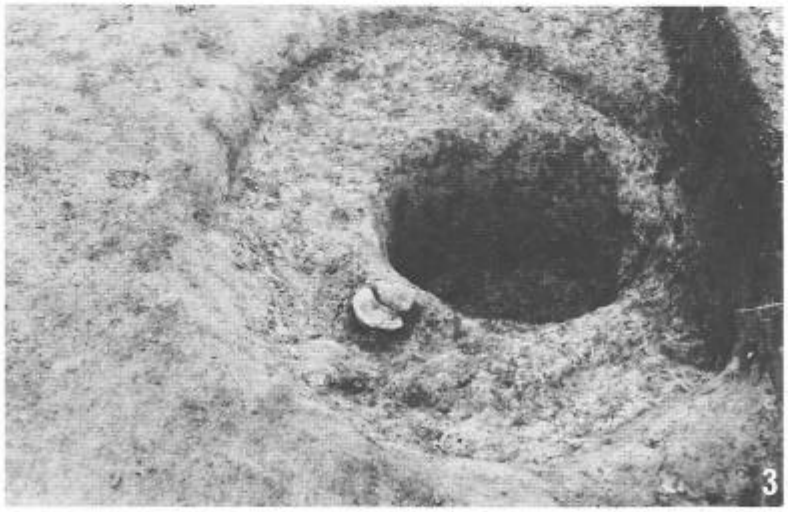




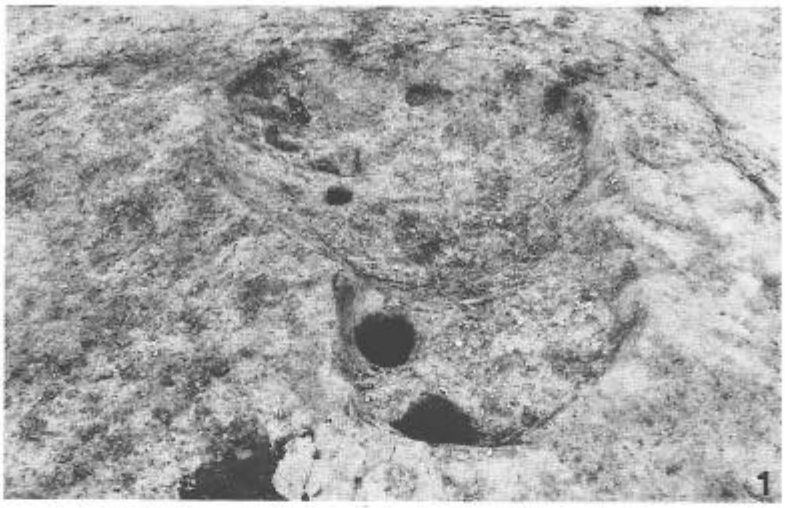
図版16　① SK 01・02・05土壙　② SK 01土器出土状況　③ SK 03土壙

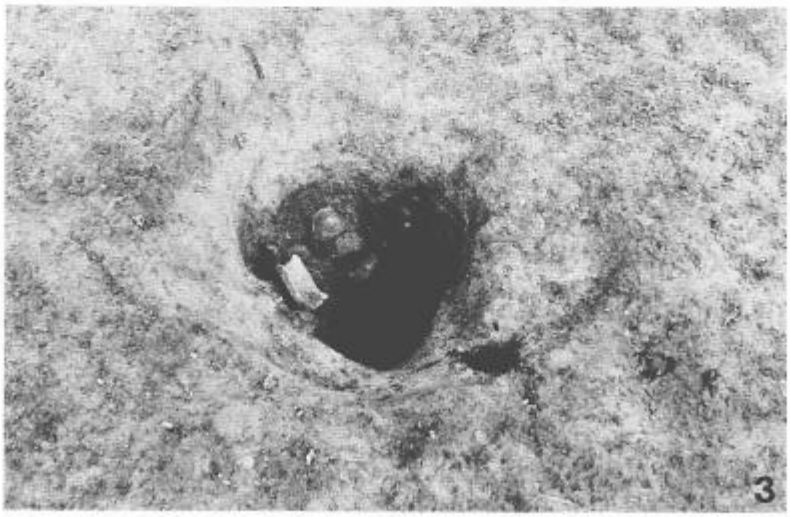




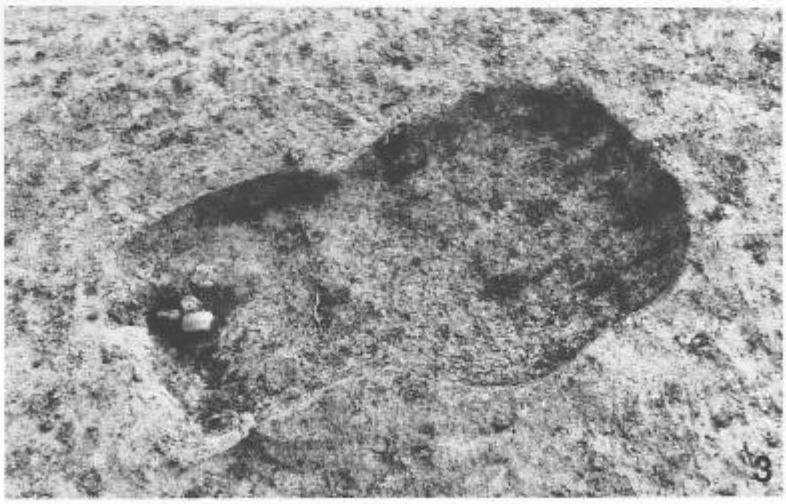


図版17　① SK 04土壙　② SK 05土壙　③ SK 07土壙

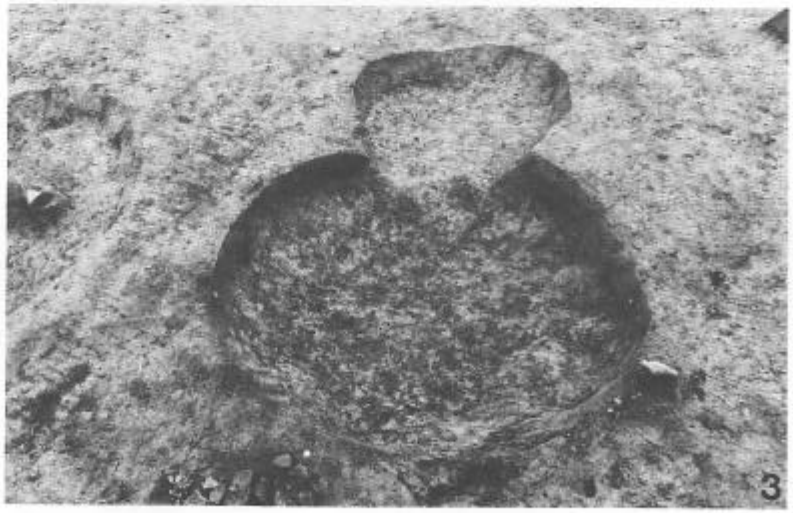




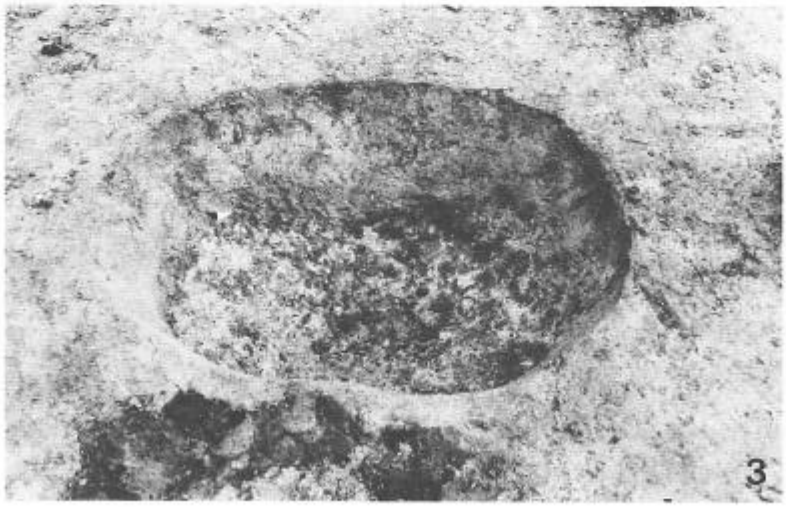
図版18　① SK 09・11土壙　② SK 10土壙　③ SK 12土壙



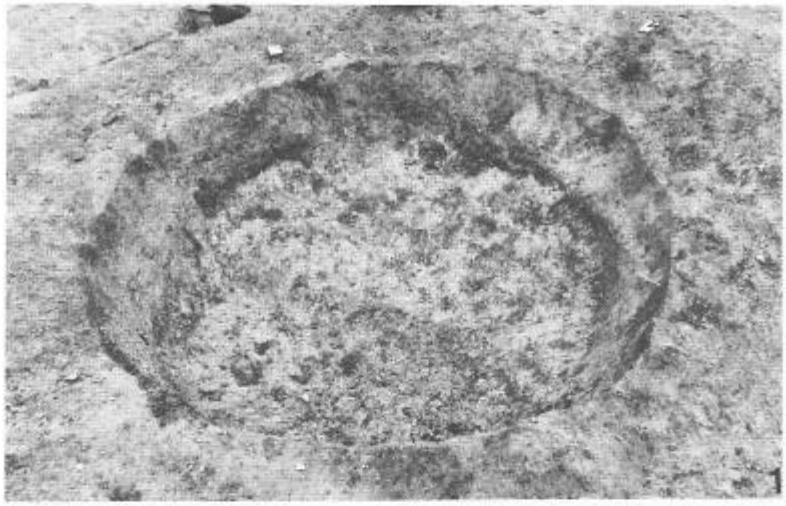
図版19　① SK 14土壙　② SK 14土器出土状況　③ SK 15・16土壙



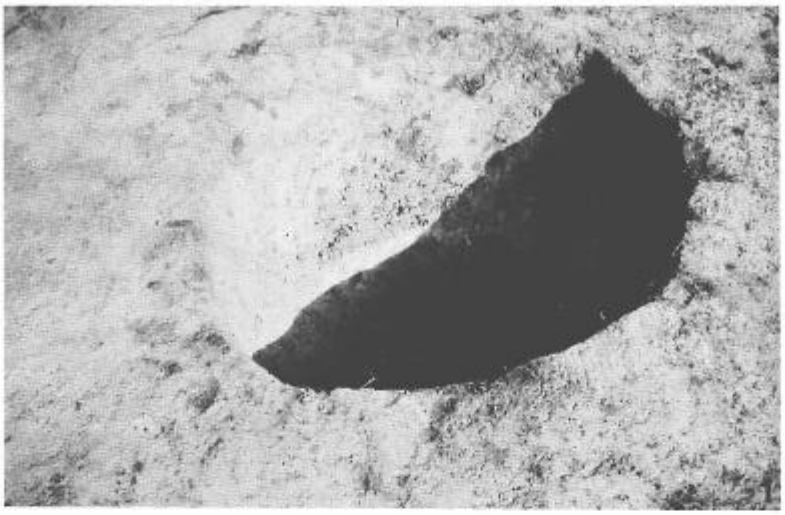
図版20　① SK 17・45土壙　② SK 21土壙　③ SK 25・26土壙

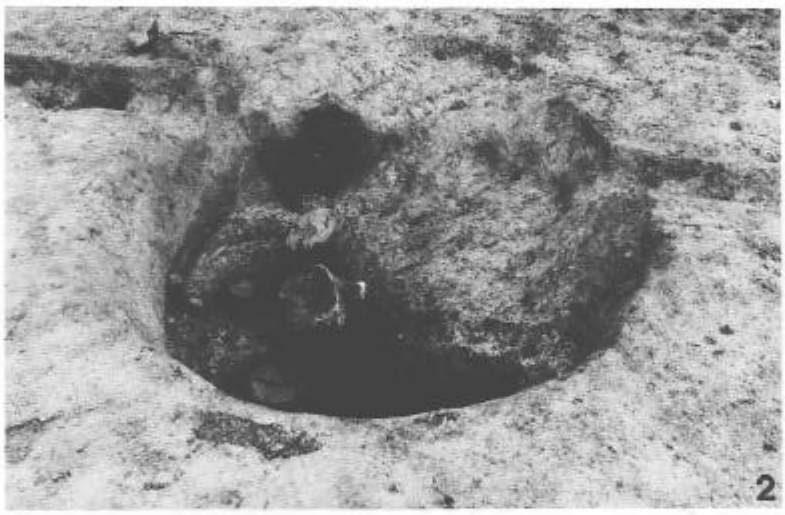


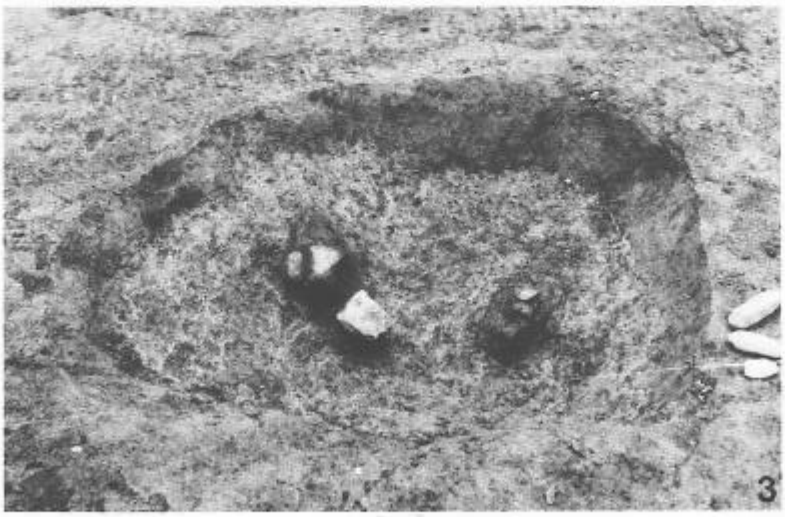
図版21　① SK 27・28土壙　② SK 30土壙　③ SK 32土壙



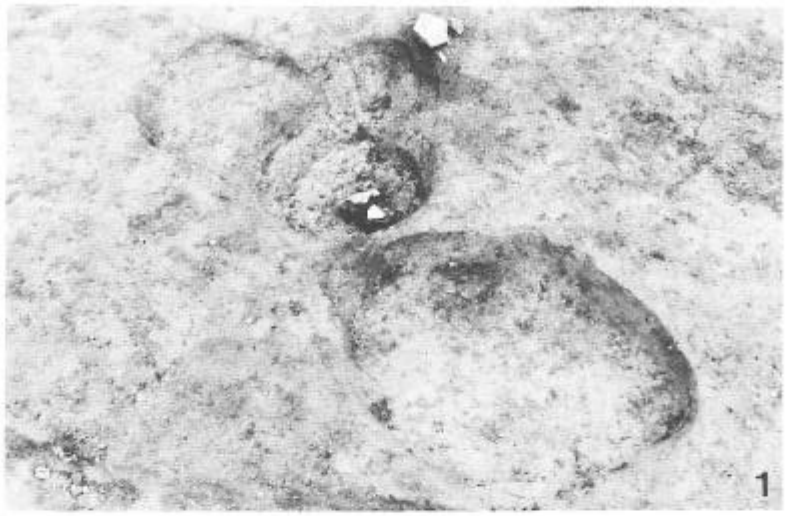
図版22　① SK 33土壙　② SK 37土壙　③ SK 37土器出土状況

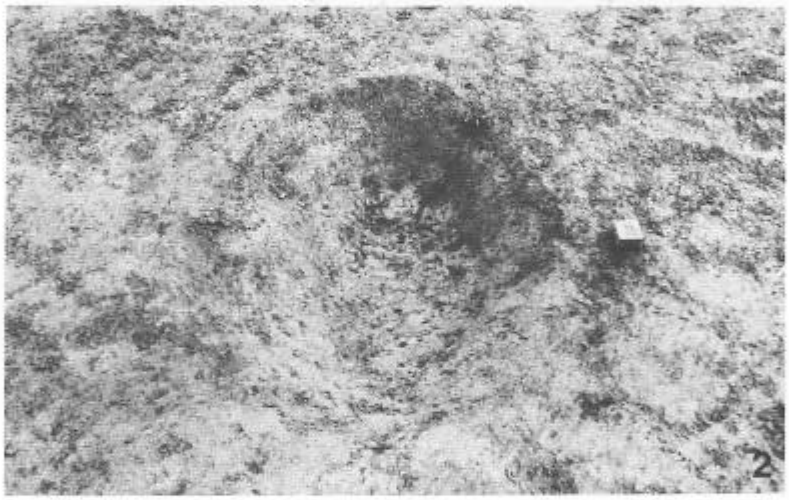


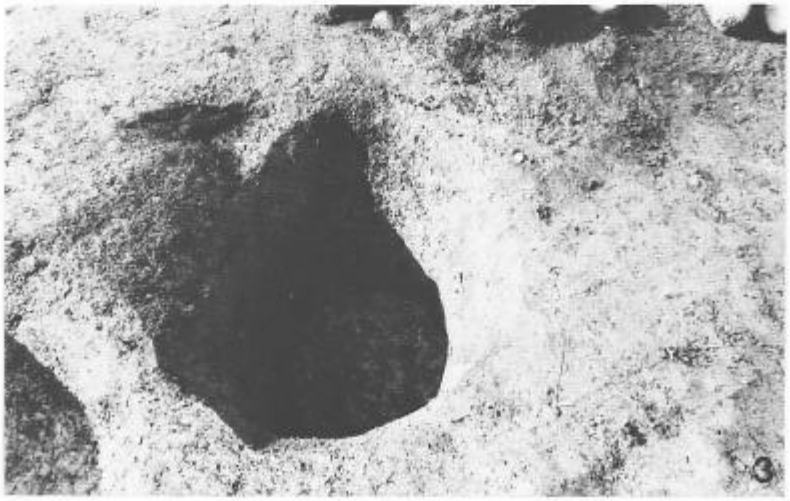




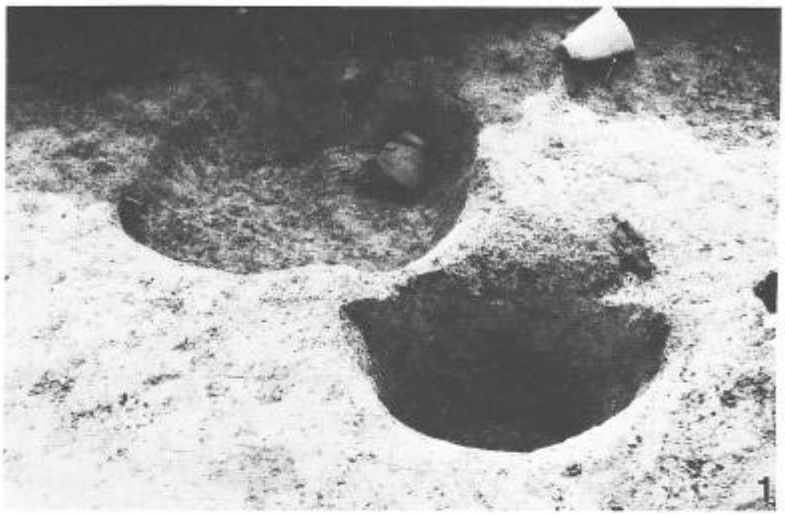
図版23　① SK 40土壙　② SK 43土壙　③ SK 44土壙

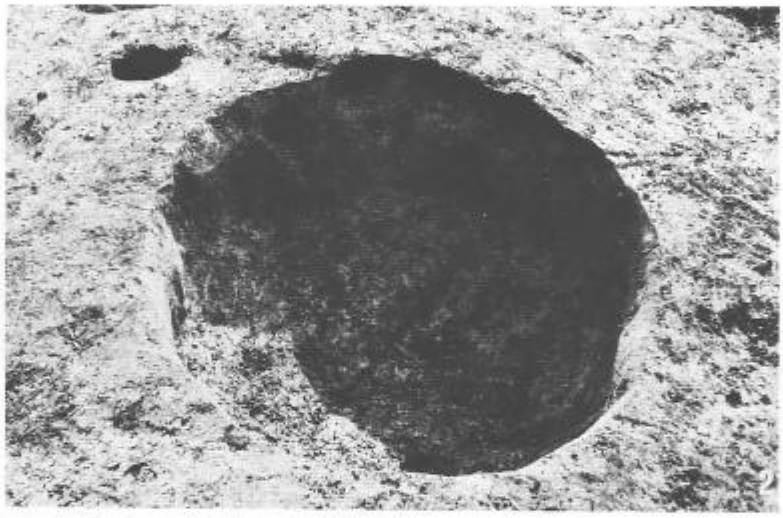


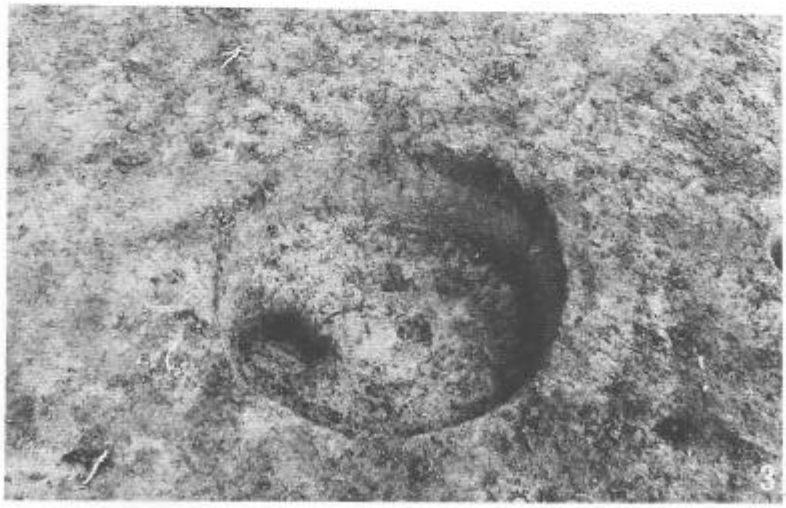




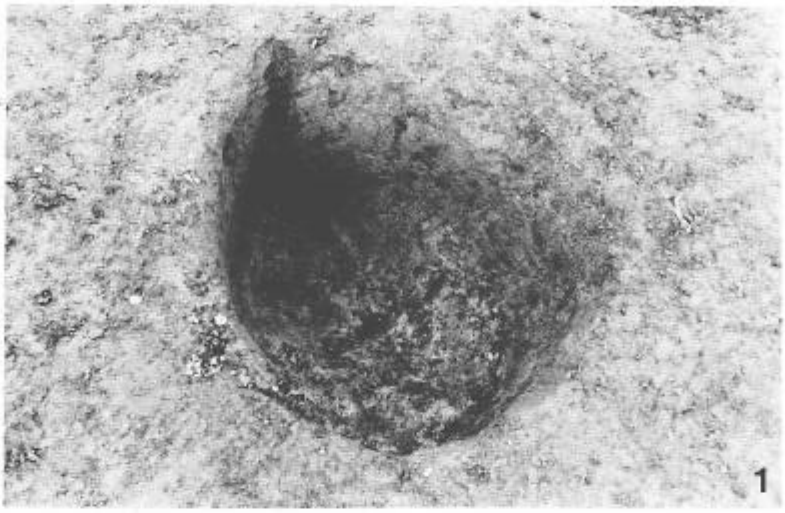
図版24　① SK 45土壙　② SK 47土壙　③ SK 48土壙

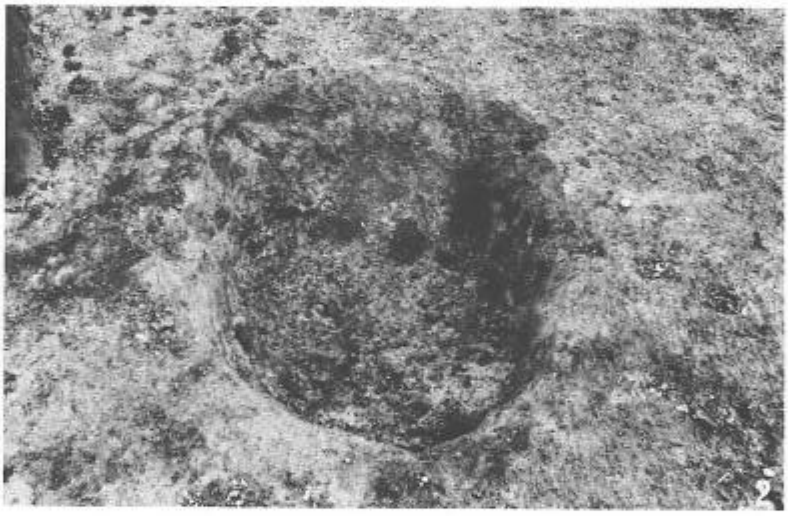


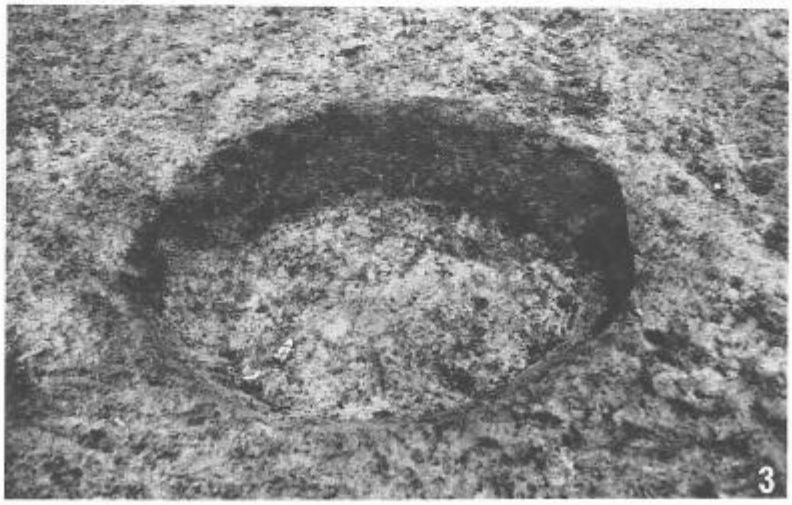




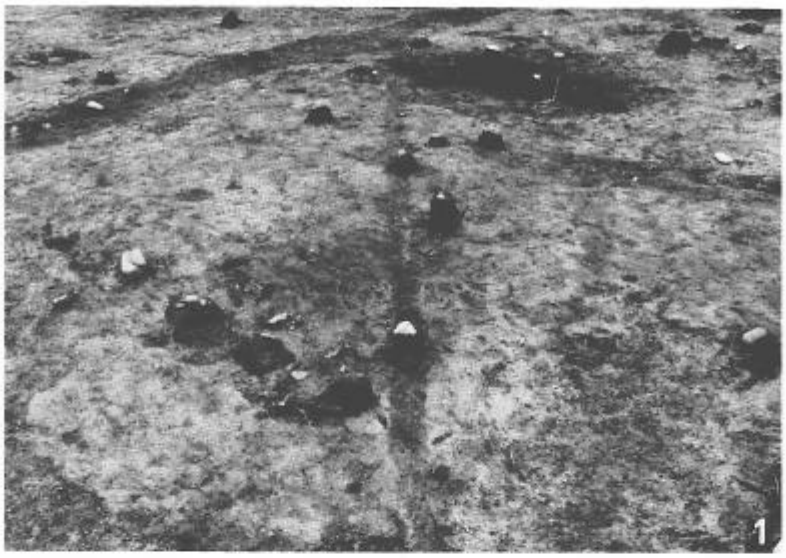
図版25　① SK 48・49土壙　② SK 51土壙　③ SK 52土壙

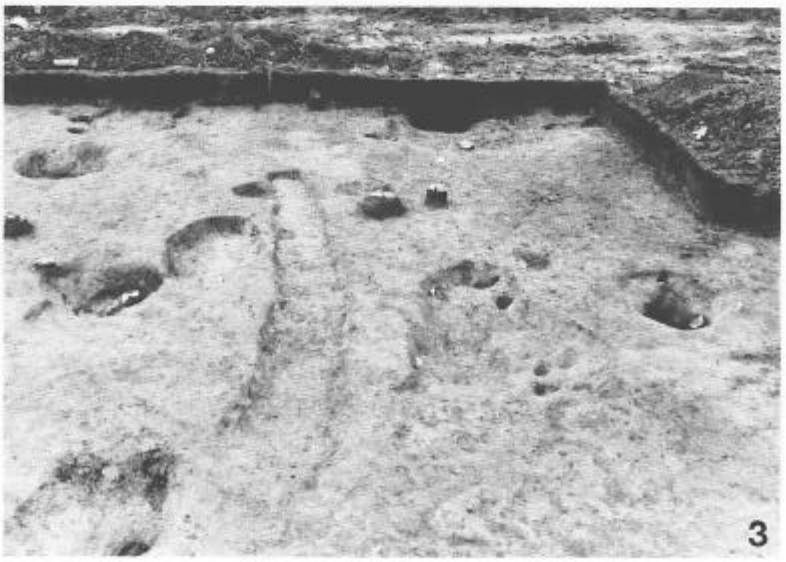






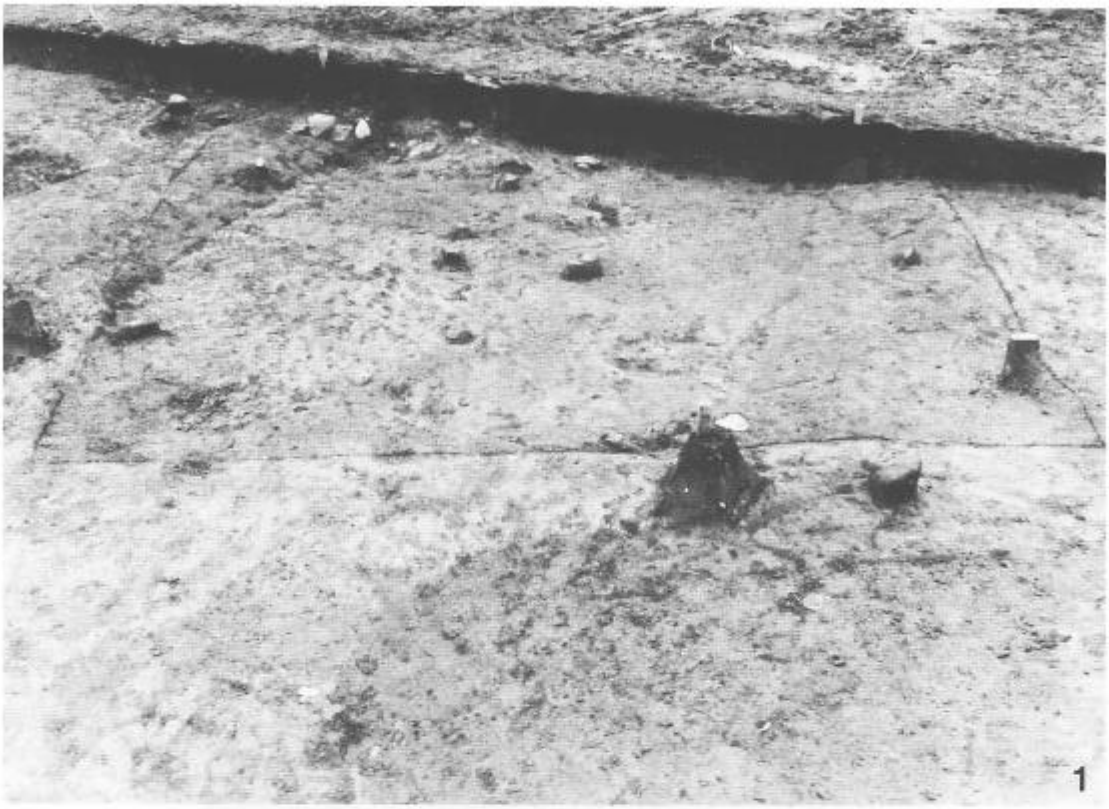
図版26　① SK 63土壙　② SK 64土壙　③ SK 66土壙





図版27　① SD 03溝状遺構確認面　② SD 03溝状遺構　③ SD 04溝状遺構

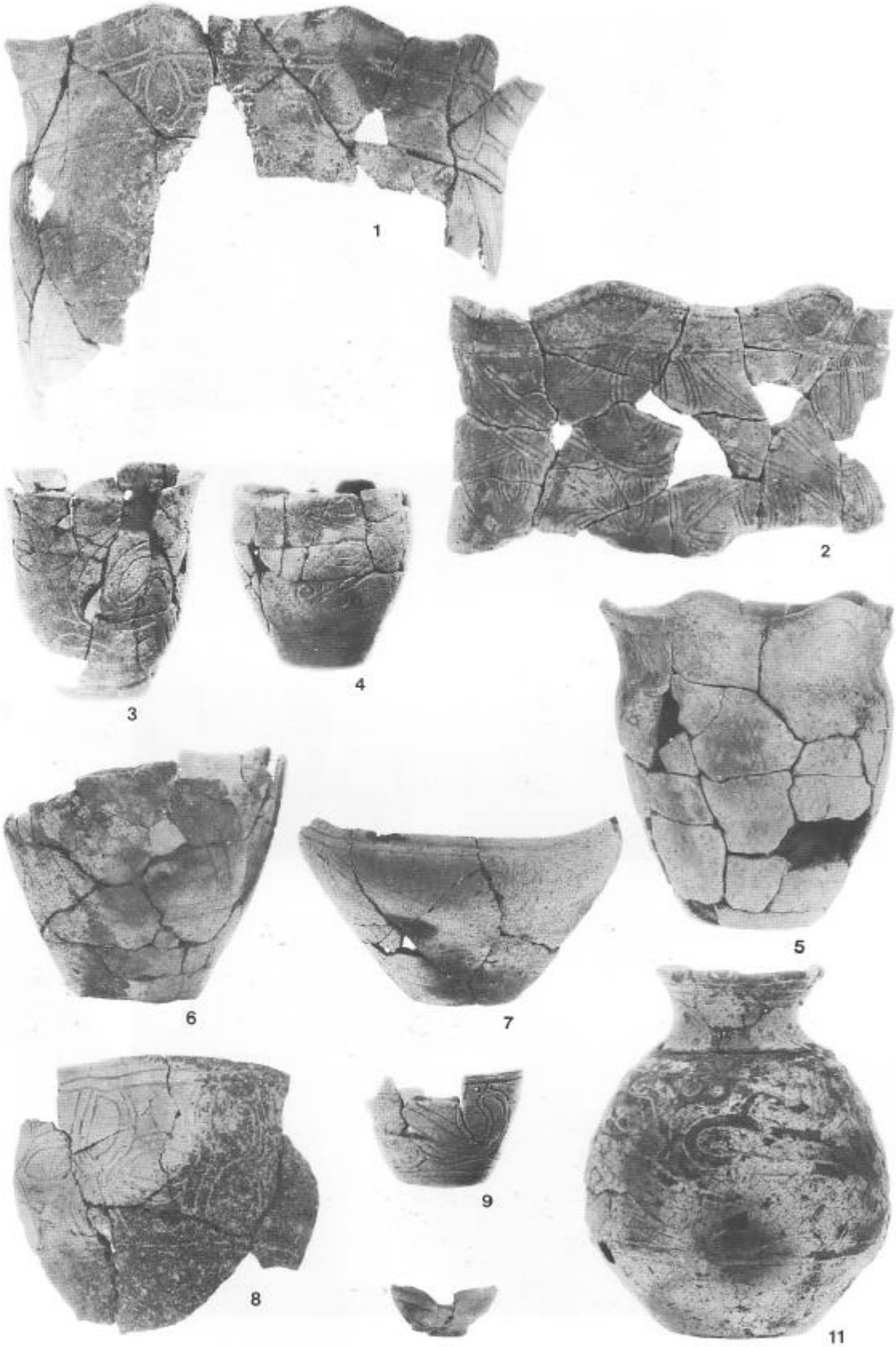
図版28　① SI　01竪穴住居跡確認面　② SI　01竪穴住居跡



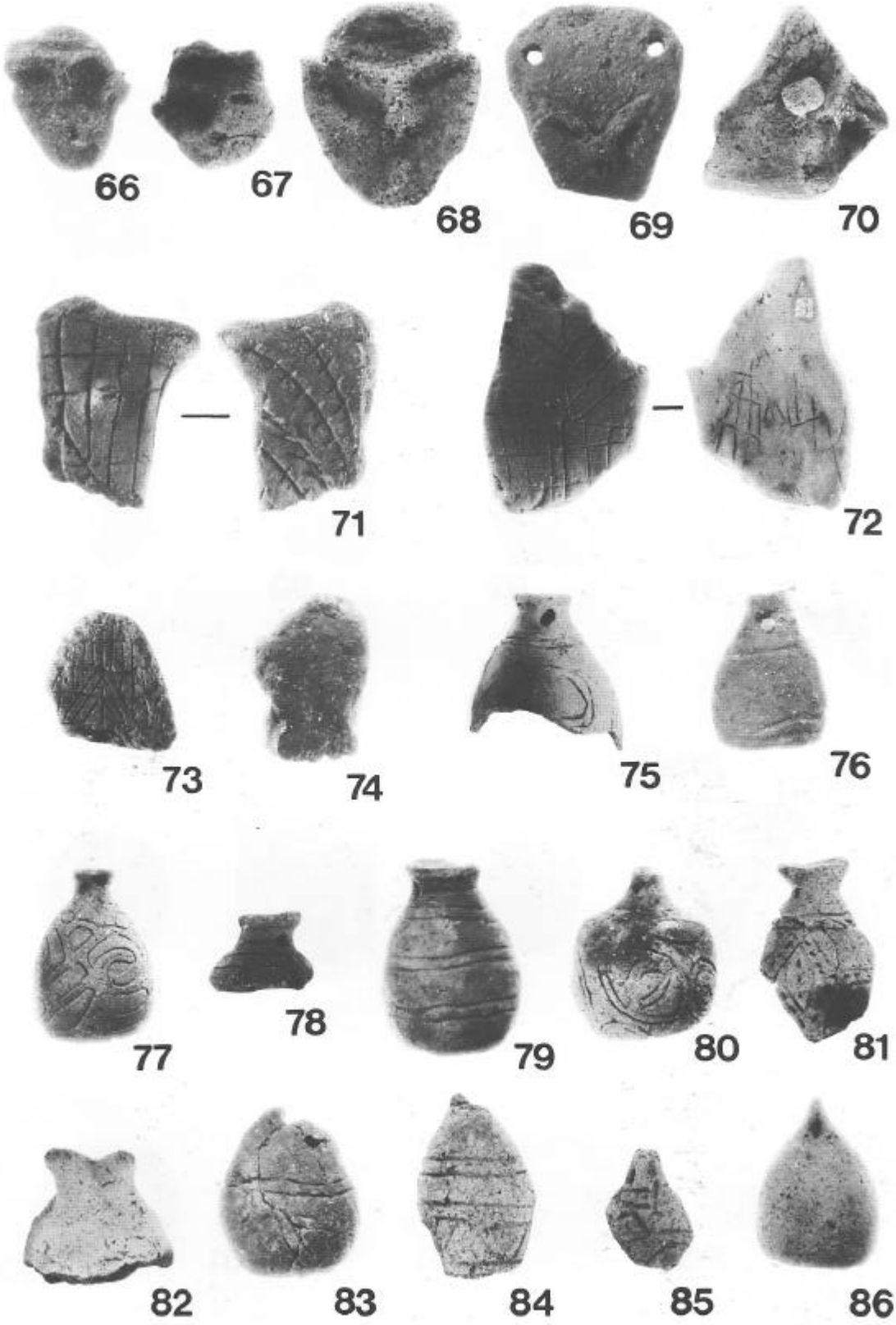
図版29　① SI　02竪穴住居跡確認面　② SI　02竪穴住居跡

図版30　①鐸形土製品出土状況　②，③土器出土状況

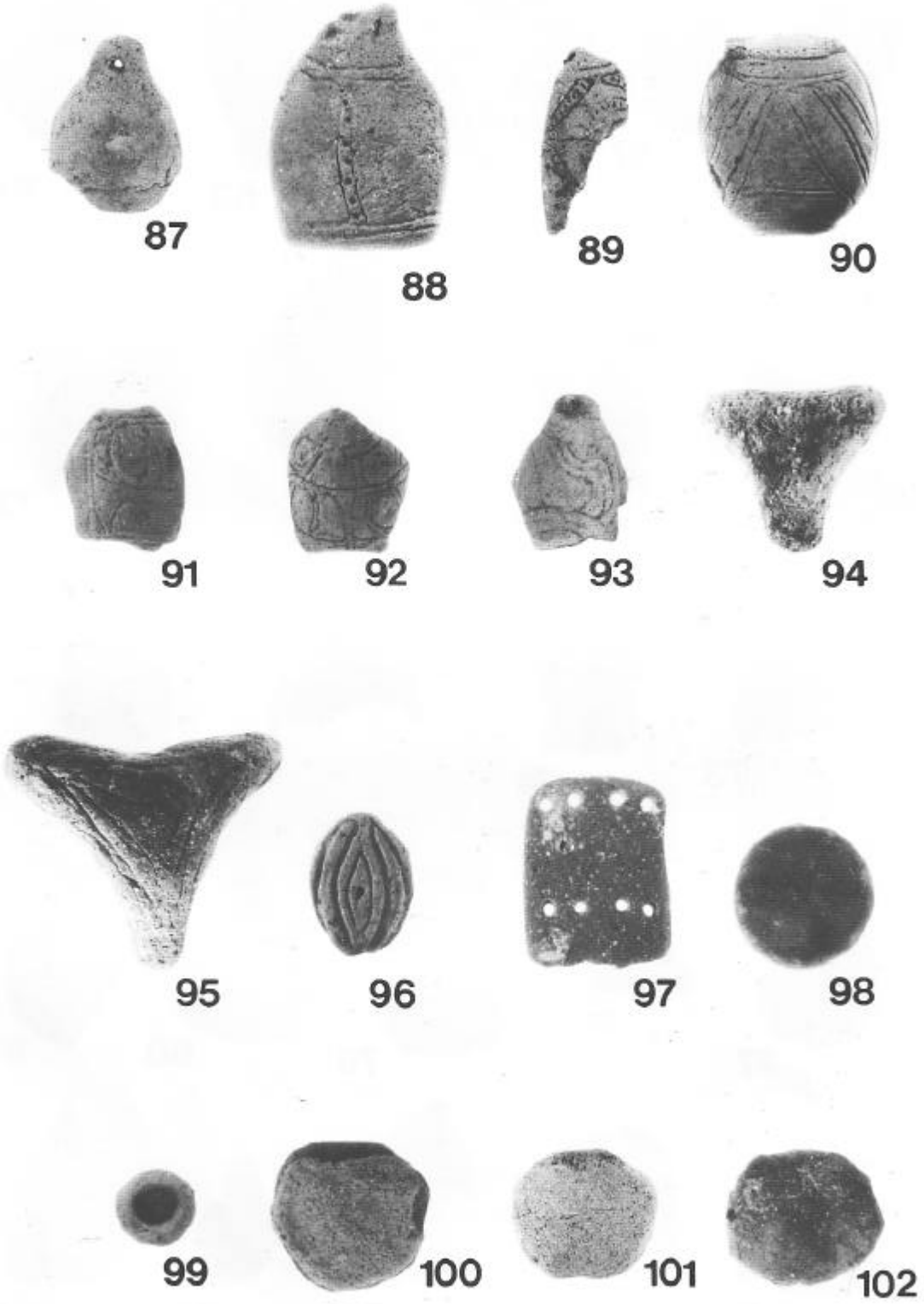
図版31　①石斧出土状況　②石皿出土状況　③石棒出土状況



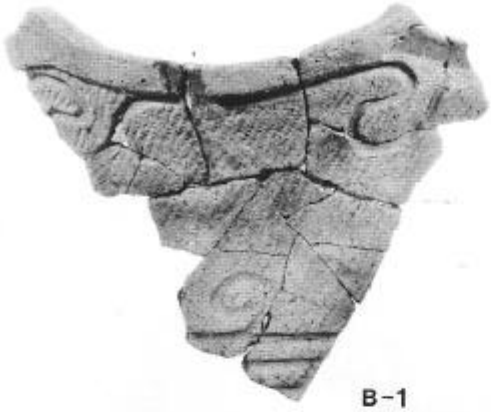
図版32　Ｄ調査区出土遺物（縄文時代）



図版33　Ｄ調査区出土遺物，土偶（66～70）　土板（71～74）鐸形土製品（75～86）



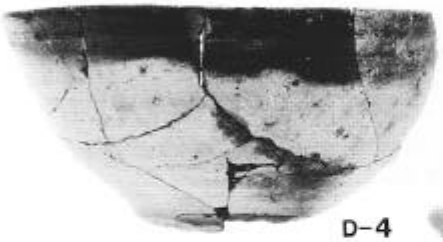
図版34　Ｄ調査区出土遺物　鐸形土製品（87～93）三脚土製品（94・95）
有孔土製品（96）板状多孔土製品（97）
円盤状土製品（98）ミニチュア土器（99～102）


B-1

D-1

D-2

D-3


D-4

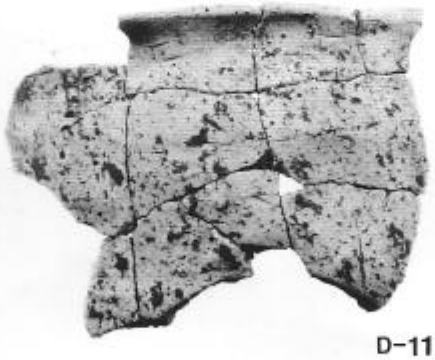
D-5

D-6

D-8

D-9

D-7

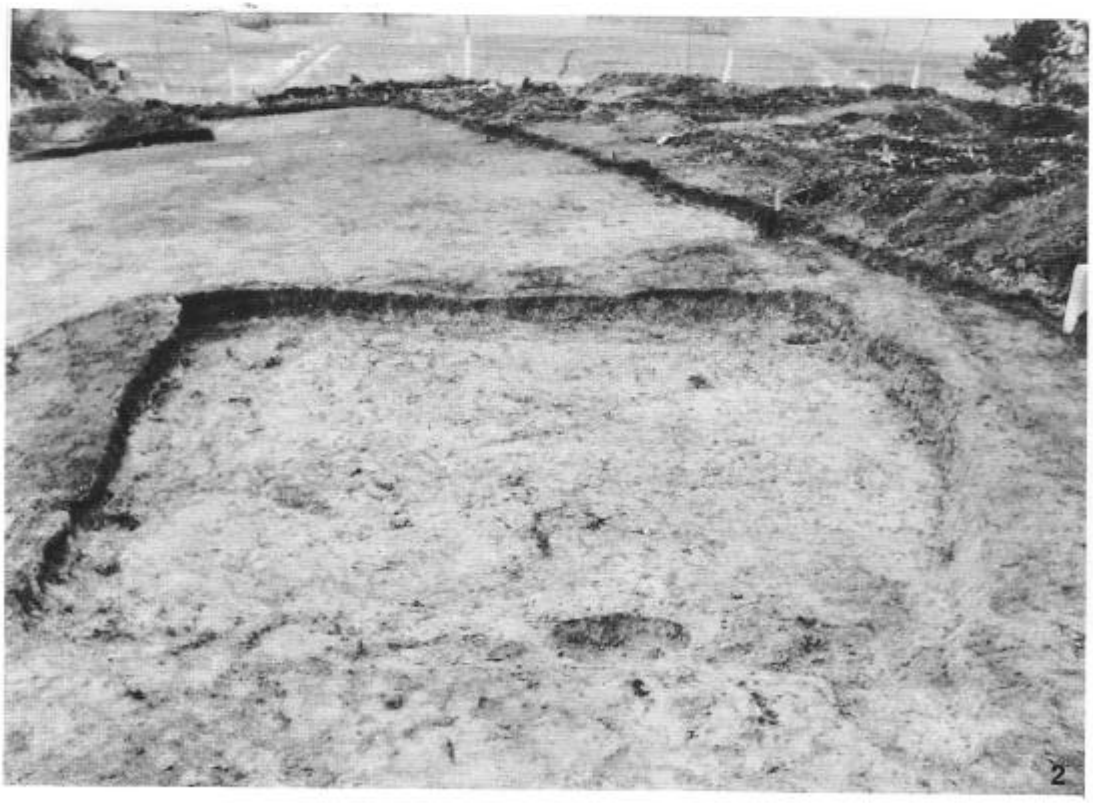

D-11

D-10

E-3

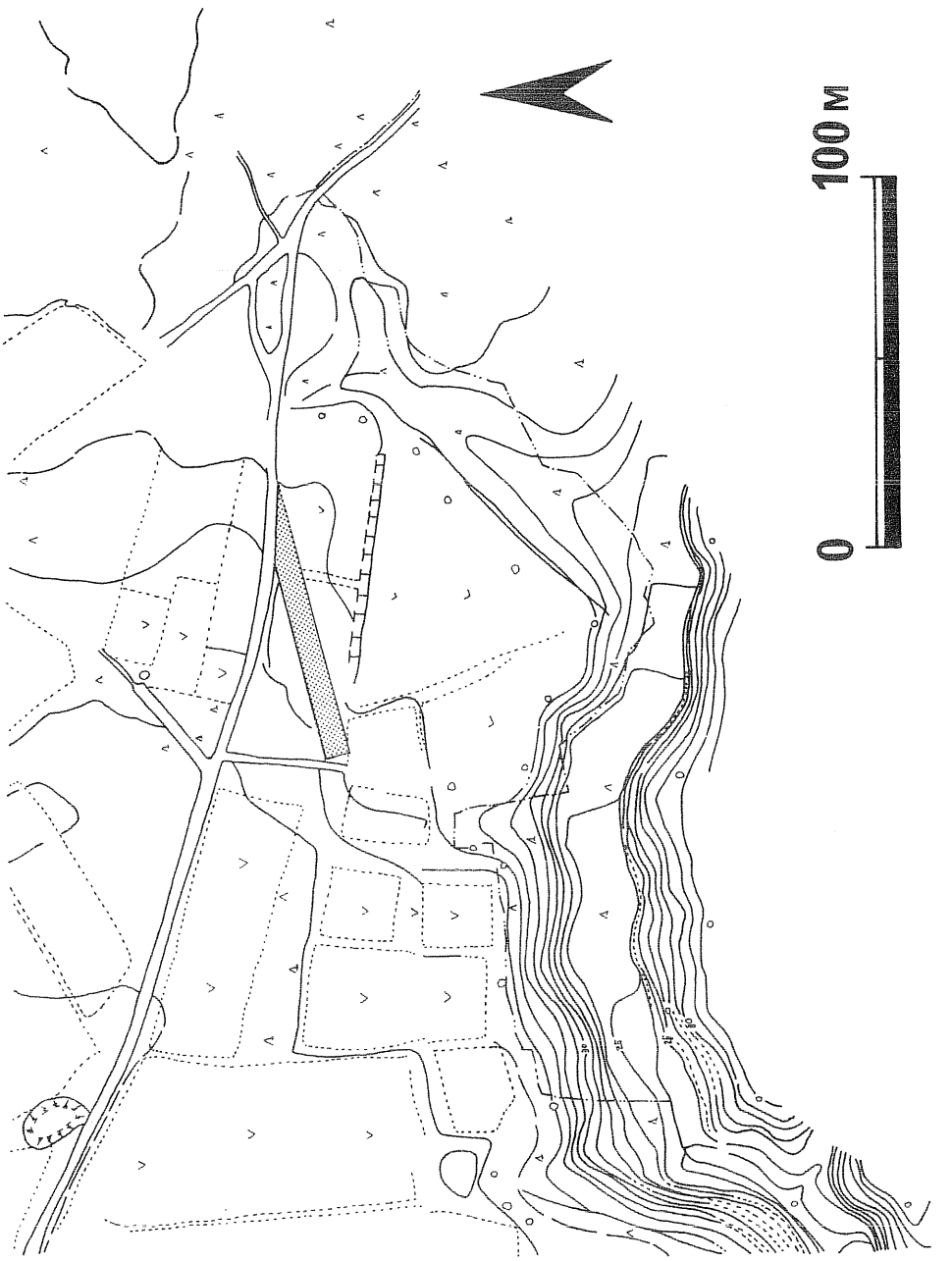
E-4

図版35　B調査区出土遺物（縄文時代B－1）・D調査区出土遺物（平安時代D－1～D－11）
E調査区出土遺物（平安時代E－3～E－4）



図版36　①E調査区全景(南―北)　②SI 01竪穴住居跡

蟻　ノ　台　遺　跡



第１図　蟻ノ台遺跡地形，調査区位置図

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで　　真壁地遺跡参照

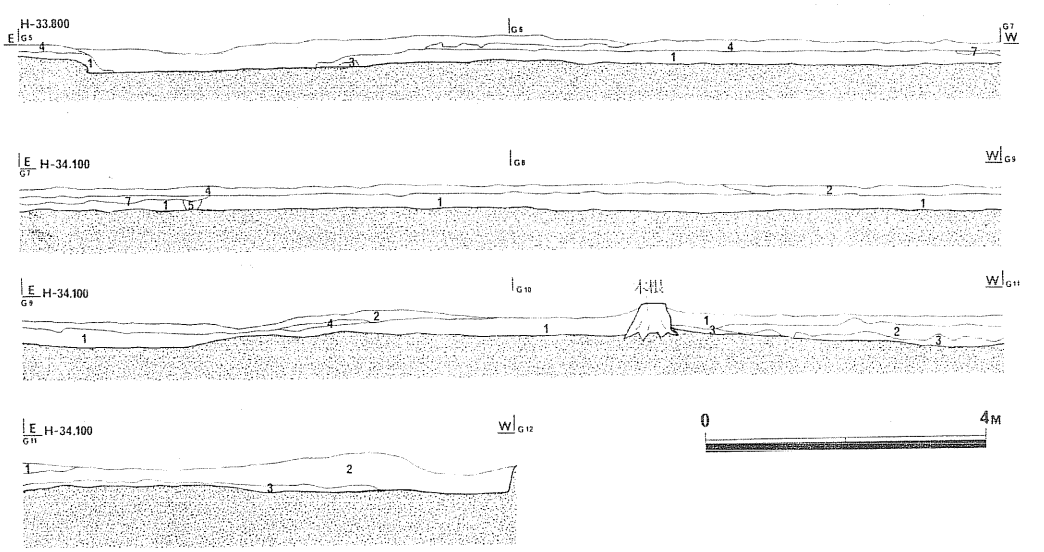
第２節　調査の組織と構成　　真壁地遺跡参照

第２章　遺跡の立地と環境　　真壁地遺跡参照

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

蟻の台遺跡は，米代川左岸の台地上に位置する。台地は南方へ平坦に広がり，遺跡周辺の現状は，畑地と水田である。南端は沢に接している。数年前の開墾で，表土・地山とも削られ，表土層は20～30cmと浅く，褐色土が所々に混入し極めて粘質性の土質を呈する。



第２図　蟻ノ台遺跡の地層

第２節　調査の方法

調査は，東北農政局作成の工事計画図を用い，導水管を敷設する範囲に７×７ｍのグリッドを設定した。グリッド名は算用数字を用い，南から北にかけ順列させている。

第３節　調査の経過

９月１日，テント設営，グリッド設定。表土除去。ＳＤ01確認。２日，ＳＸ01検出。４日，ＳＲ01検出。８日，ＳＸ01精査，写真。11日，調査区土層実測。14日，全景写真，調査終了。

第４章　調査の記録

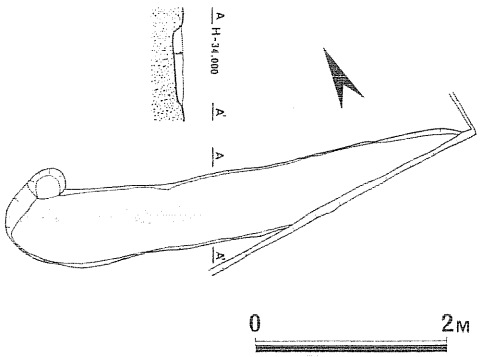
第１節　遺構と遺物

(1)　**溝状遺構**　（第４図）

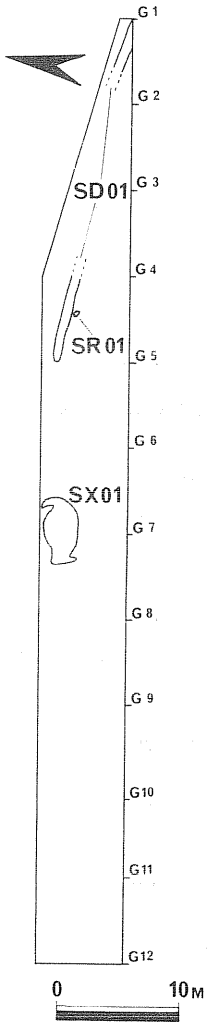
ＳＤ01溝　幅約80cm，深さ10～20cm。断面形は鍋底状。一部は開懇のため消滅している。西から東へ傾斜。

(2)　**土器埋設遺構**　（第５図　図版２）

ＳＲ01土器埋設遺構　ＳＤ01に隣接し，上部が開懇のため消滅している。確認できるところで径35cm。底部はなく土器中の堆積土は暗褐色で硬くしまっている。土器は風化が激しく復元するに至らなかった。粗製の深鉢で縄文時代後期のものと思われる。



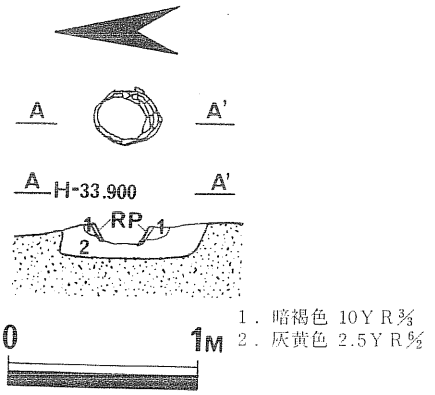
第４図　ＳＤ01実測図



第３図　蟻の台遺跡遺構分布図

(3) 炭焼窯状遺構

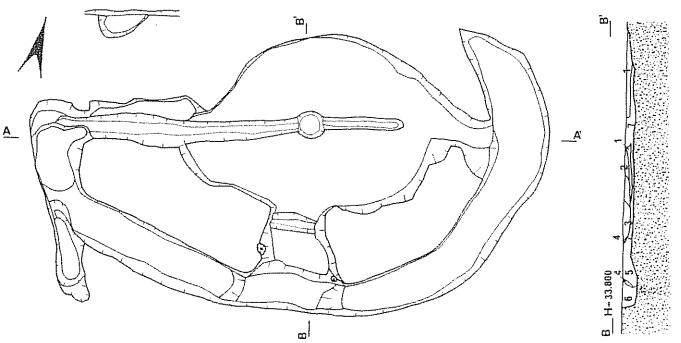
ＳＸ01炭焼窯状遺構　平面形は長軸5.5m，短軸３ｍの楕円形。幅50cm，深さ30cmの溝が半周している。溝は底面面より垂直に立ち上がり，壁面は硬くしまっている。堆積土は全層にわたり炭化物を含み，底面には石，レンガ，炭化材などが横たわり崩壊したものと思われる。遺構中央部には約1.7ｍ×2.5ｍの浅い凹み状土壙がある。中には多量の炭化物が堆積し，底面には砂が敷かれている。

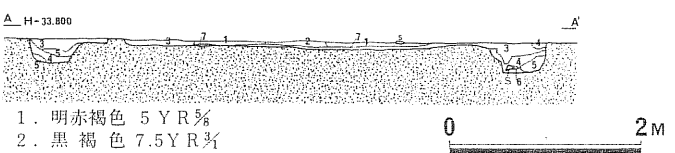


第５図　SR01実測図

第２節　出土遺物

２　出土遺物　遺物は少なく遺構外から数点の縄文時代後期の破片及び近代の擂鉢片が出土したに留まった。いずれも風化が激しく図示するにはいたらなかった。



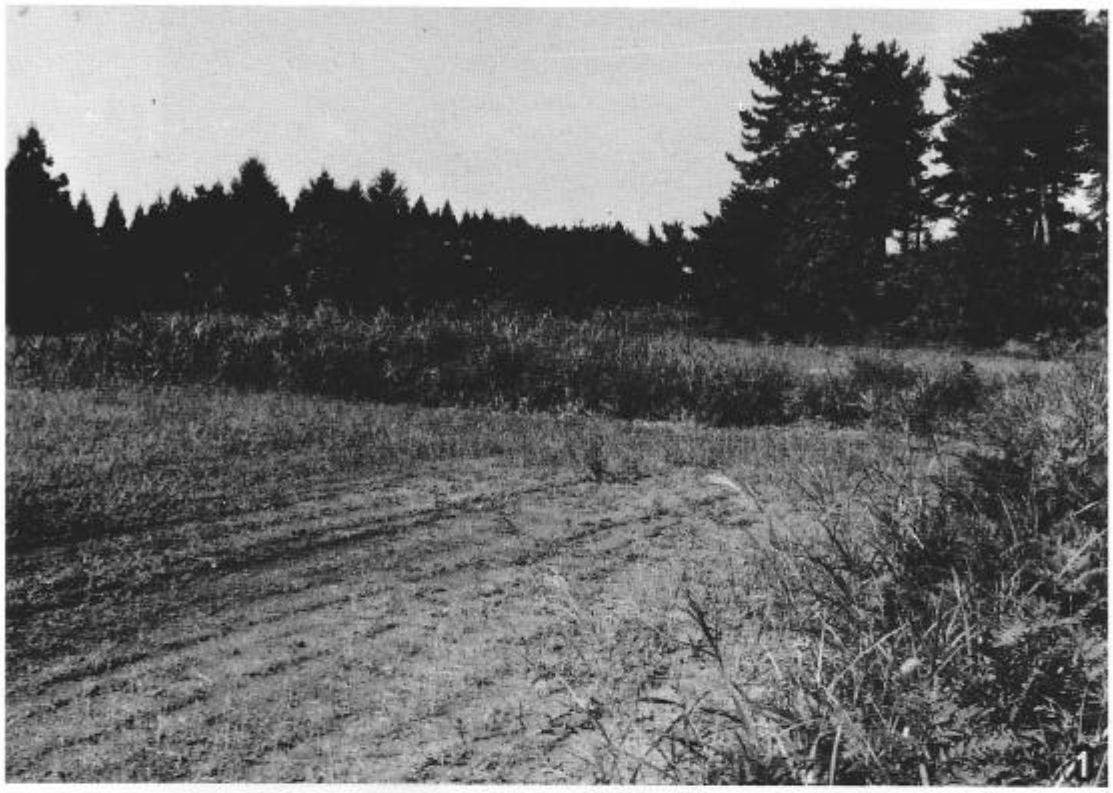


第６図　SX01実測図

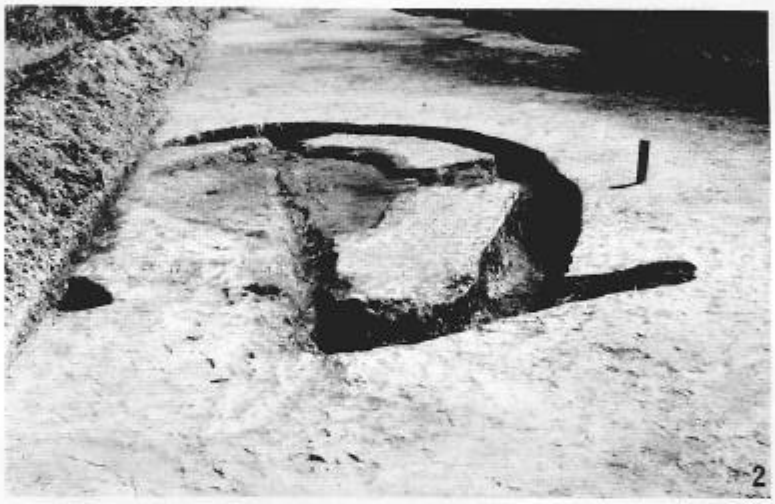
第５章　まとめ

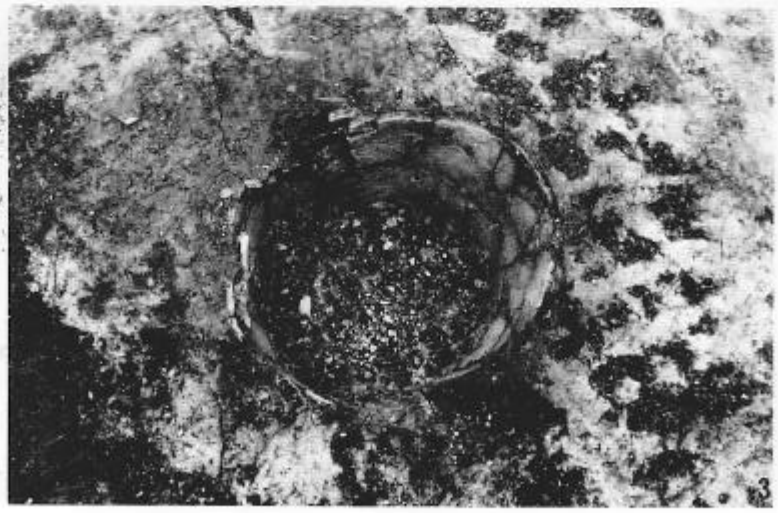
調査区は，以前行なわれた畑地造成のために遺構の一部が消滅している。

中央部に検出したＳＸ01は，地山上面部が消滅しているが，近年使用された炭焼窯と思われる。近代の当地域における炭焼窯は粘土で構築され，炭化窯室内部径約1.2×１.0ｍ，高さ1.2ｍのものに煙道と焚口を設けたものが一般化されていた。この炭焼窯は，白炭と黒炭の製造によって，窯形式，炭製造法も異なり，白炭が一日に何度も製造できるのに対して，黒炭は３～４かかった。また，白炭は窯の規模小さく，炭化材料を外から操作し，取り上げる直前に空気を入れるのに対して，黒炭の場合は，外気にふれさせずに密閉したまま炭化室の中で操作した。特に黒炭は水気を嫌うので窯外周に溝を設けたものもあった。炭化材料は白炭も黒炭も同じで，主にナラ，カシ，クヌギ等が使われている。古代のものとは異なるが，炭焼窯の稼動しなくなった現代においては，大切な資料と考えられる。



図版1　①蟻ノ台遺跡発掘調査前(東　西)　　②調査区全景(西―東)





図版 2　①SX 01確認面　②SX 01
③SR 01土器埋設遺構